

---

# 陰を往く人

Haru

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>



## プロローグ

### プロローグ

闇。

遠くで男の喚き声。酔っ払いのようだ。

暗い部屋。常夜灯も点けておらず、カーテンの隙間から洩れる月光が僅かに家具の輪郭を浮かび上がらせる。机と本棚、そしてベッド。

人の形の影は、ベッドの上ではなく部屋の隅に蹲っていた。

「うづ。どうしてだ……」

影の呻き。十代後半の少年と思われるその声には昏い怨嗟が滲んでいた。

影は、震えていた。

通りの酔っ払いが調子外れの歌を歌い始めた。

「うるさいよ」

中年の女の声が酔っ払いを怒鳴りつけている。

「お前こそうるせえんだよ。殺すぞ」

酔っ払いが反撃している。

歌が再開された。次第にこちらへ近づいてくる。

ギジギジ、ギジ、と、爪で壁を引っ掻く不快な音。闇の中で影が蠢いている。何かに耐えているように。

「...」  
「どうして、今回は早いんだ...まだ、四、五日はある筈なのに...」

酔っ払いの気配が家の前で止まった。陽気な歌がやむ。

寝室の影が動き出した。立ち上がって窓に歩み寄り、カーテンの隙間から外を覗く。

酔っ払いは四十才前後だろう。背広姿だ。寝室は二階にあるため、男の薄い頭頂部が見えた。

男は、扉の前で立ち小便をしているのだった。

「この扉、そろそろペンキ塗り替えた方がいいぞ」

住人が見ているとも知らず、酔っ払いが勝手なことを呟いている。

影は震える息を吐いた。深呼吸。何度か繰り返すうちに全身の震えが収まってくる。

ベッドの下に手を入れ、細長いものを取り出した。闇の中でそれがキラリと光った。

ドアへ向かう少年の目も、冷たい飢餓に光っていた。

十分後、少年は地下室の大型焼却炉に用済みのゴミを押し込んでいた。血塗れの腕が垂れ下がる。

少年はそれを畳んで詰め直した。髪の毛の薄い頭頂部がまだはみ出している。

少年はそれを片手で押した。皮一枚で胴と繋がっていた頭が、焼却炉の中へ転がった。

新聞紙に火を点けて入れ、少年は跳ね上げ式の蓋を閉じた。

煙突は天井を伝い屋敷の側壁へ抜けている。朝までには、全て灰になっっていることだろう。

刃渡り二十二センチの草刈り鎌についた血糊を流して洗い落とし、床の血痕を処理するためモップを濡らす。

少年の目は一仕事終えた後のように、穏やかに澄んでいた。

戻る

## 第一章 脇道の闇

### 第一章 脇道の闇

—

藤村奈美は消しゴムを置いて何気なく窓際の席へ目を移した。真鉤天が無表情に黒板の字をノートへ書きつけている。

7

彼はあまり表情を変えない。はにかんだような申し訳なさそうな曖昧な微笑をたまに浮かべることがある。それは例えば他の男子に遊びに誘われて、やんわりと断るような時だ。喋りかければそれなりに応じてくれるが話が弾むことはない。ノートはきちんとつけている方で、頼んだら快く貸してくれるが本人の成績はそれほど良い訳でもないようだ。

運動が得意でもなく、バレーボールやサッカーの試合では他のメン



バーに紛れて目立たなくなってしまう。

身長はクラスの男子では真ん中から少し上の方だ。体格はどちらかといえば痩せている。

今時の男子なんか化粧をしている者もいるのに、彼は髪を染めず整髪料も使わず、散髪は二ヶ月に一度と決めているようだった。顔立ちに歪みやアンバランスさはないけれどハンサムというほどでもなくあまり特徴はない。俯きがちで、休み時間もぼんやりしていることが多い。いつも何を考えているのだろうと奈美は思った。

ひっそりと、大人しく、目立たない。真鉤天は、そんな存在だった。

二年で同じクラスになり奈美が彼のことを知った時は単に変な名前の人だと思っただけだ。天なんてどう読むのだろう。中国人か台湾人だろうか。若死にの「夭折」なんて言葉はあるけれど。

だが二学期に入った今、奈美はこの「まかぎ よう」と読むクラスメイトのことが何と

なく気になっている。この感情を恋だなどと呼ぶつもりはない。時折、彼の瞳に寂しげな翳りを認めてドキリとすることはあるけれど。彼に直接話しかけることはしない。喋ったのはこれまでに三、四回程度だ。

そのうちに奈美はクラスの複数の女子が同じように真鉤を見ていることに気づいたのだ。どうやら彼は女子の間では密かに人気があるらしい。

だからといってヤキモキしたりはしない。奈美は取り敢えず、真鉤天を眺めているだけだった。

真鉤の昼食は大抵コンビニの袋に入ったパン二個とオレンジジュースだ。登校途中で買ってきたものらしい。

彼は徒歩で高校に通っている。結構近くなので奈美も彼の家を見たことがある。多角形で屋根が互い違いになっているような奇妙な屋敷で、二階建てなのか三階建てなのか分からない。手入れを怠っているようで壁は汚れていたし庭は荒れていた。

真鉤が一人暮らしだという噂を、奈美は聞いたことがある。家族が誰もいないのだという。本人にそれを確かめたことはない。

放課後になると、真鉤は静かに荷物をまとめて鞆に詰め、クラスメイトと軽い挨拶を交わして教室を去る。彼はどのクラブにも属していない。奈美は文芸部に入っているが幽霊部員だ。彼の少し後から奈美も教室を出た。

奈美も通学は徒歩だ。裏門の方へ出ると真鉤は二十メートルほど先を歩いている。

その真鉤に二人の男子生徒が声をかけた。

「ちょっと、その二年」

二人は三年生だった。片方は金髪で、もう片方は鼻と口に目立つピアスを入れている。

この白崎高は「やる気のある者は放つていてもやる」というポリシーから生徒に対し放任主義を通していた。自分で勉強して東大を目指す者もいれば、スポーツに打ち込む者もい

る。三年前は甲子園に出場したという。そして、少数だが、彼らのように柄の悪い不良もいる。

「何ですか」

真鉤は立ち止まった。その顔は無表情を保っている。

「これからさ、女集めてカラオケ行くとこなんだが、財布忘れてきちまってな。金貸してくれねえか」

金髪の方が言った。大人しい雰囲気でもいいカモだと判断されたのかも知れない。奈美が心配しながらも何も出来ずに見守っていると、真鉤は冷静に答えた。

「申し訳ないですが、余分なお金は持っていません」

彼らの横を他の生徒達が黙って通り過ぎていく。

ピアスが言った。

「なあ、ほんの少しでいいんだよ。まず財布見せてみるよ」

真鉤は僅かに首をかしげた。怯えている様子ではなかった。どう返事をするのが適切か、事務的に対応を考えているという感じだった。

「おい、やめときなよ先輩方」

別の場所から太い声が飛んだ。奈美も助け舟の方を見た。同じ学年の天海が歩いてくる  
ところだった。クラスは別だが彼のことは皆良く知っている。

「みみっちいカツアゲしてるなあ。どうせなら一億くらいたかってみるよ。銀行にさ」

天海東司は長身でがっしりした体格をしている。百八十五センチくらいあるだろう。肘

部分で切った制服の袖から太い腕が見えている。小学生の頃から空手やボクシングをやっ

ていたそうで、一対五の喧嘩でも勝ったという噂だ。煙草を喫ったり休み時間に教室でウ

イスキーを飲んだりはするが彼は他の生徒に迷惑をかけたらしない。校内の雰囲気落ち

着いているのは天海のお陰だし、他校や暴走族とのトラブルがあった時は頼りにされてい

るらしい。普段は誰ともつるまない一匹狼。彼に憧れる男子は多かったし、女子からはバレンタインデーには百個近いチョコを貰ったと聞く。奈美も天海にチョコをあげるべきかちょっと迷った一人だった。

「何だよ天海。俺達は別にカツアゲとかしてねえぞ。金を借してくれつつってただけだ」

金髪が反論したが、その口調は幾分自信なげだった。

「真鉤、行つていいぞ。じゃあな」

天海が手を振ると、真鉤は黙って軽く礼を返した。あのはにかんだような控えめな微笑を浮かべて。

二人の上級生は置き去りにされた。ピアスが天海を睨んだ。

「何口出ししてんだよ。二年のくせに、最近生意気なんだよてめえは。何様のつもりだ」

天海は平然と返す。

「生意気なのは最近じゃなくて生まれつきでね。それからな、俺はお前らのために思って親切心で言っただけ。あいつには手を出すな」

最後の台詞の時に天海の目が鋭く光った。彼がそんな目つきをすると凄く迫力がある。

ピアスが聞いた。

「何だよ。今の奴、お前のダチかよ」

「そつだな……。まあそういうことにしとけ。いいか、手を出すなよ」

言い捨てて天海は踵を返した。部活でもないのに校舎に戻るつもりらしい。突っ立っている奈美と目が合った。

「よお、奈美ちゃん。どうした、早く帰りなよ」

天海の精悍な顔が人懐っこい笑みを浮かべた。彼とはあまり話し

たことがないが、気さくな態度に乗せられてつい奈美も喋ってしまう。

「帰ります。でも、どうしても私のことを名字じゃなくて名前で呼ぶんですか」

「可愛い娘は名前で呼ぶことにしてるのさ。勉強は駄目だが、こういうことにはだけは記憶力がいいんだ」

天海は悪戯っぽく両眉を上げてみせた。彼がこんな台詞を使い慣れていて、別に告白なんかじゃないことは奈美にも分かっている。それでも奈美は頬を赤くしてしまった。

「じゃあな、奈美ちゃん」

天海が手を振って歩いていった。

「さようなら」

奈美も手を振り返した。他の生徒達も天海に声をかけていた。



裏門に視線を戻すと三年生二人組はいなかった。門を抜ける時にクラスメイトの島谷紀子を見かけたので「さようなら」と挨拶したが相手はソッポを向いて足早に去っていった。

島谷とは特別何かあった訳でもないが、何故か奈美は嫌われていたようだった。いや島

谷はクラスメイト全員を嫌っているのかも知れなかった。彼女は根暗な奴だと女子の間でも陰口を叩かれ、友達もいないようだった。奈美はそんな島谷を気の毒と思ったこともあるが、彼女は誰にも助けを求めなかったし、奈美も敢えて手を差し伸べるようなお節介な真似はしなかった。

奈美は気にしないようにして、自分の家路についた。

島谷紀子は藤村奈美が嫌いだった。あのお嬢さん然とした物腰が嫌いだったし、化粧もしていないのに紀子より数段綺麗なのも気に入らなかった。あんな整った顔しやがって。神は不公平だ。

何より、藤村が時折真鉤天を見ているということが、紀子が彼女を憎む最大の理由だった。

真鉤を自分のものだと主張する権利は紀子にはない。紀子が真鉤と話をしたのも数度しかないからだ。しかし、真鉤の価値を知る者は自分だけだと紀子は自負していた。

彼は真の姿を隠して、目立たないように振舞っている。それが分かるのは紀子も自分を押し殺して生きているからだ。同級生なんて目先のことしか考えない、どうしようもないクズばかりだ。教師も学校も親も社会も大嫌いだった。人間も世界もなくなってしまうばいいと思っていた。でもそんなことを誰に言っただって無駄だ。だって皆クズだから。紀子は絶望を抱え、腐った世界でクズ共に混じって生きてきたのだ。

唯一の例外が真鉤天の存在だった。彼は紀子と似たものを持っている。他の人とは違う何かを隠している。きっと素晴らしい本質を。紀子にだけはそれを見せてくれるかも知れない。彼女のためだけの白馬の王子として。もし彼女が勇気を出して告白出来たならば。

自分が告白するだけの勇気を持たないことを、紀子は薄々感づいていたが。

紀子はたまに真鉤の通学路に沿って歩いた。別に尾行しているつもりはない。彼の後ろ姿が見えたらいいな、くらいのものだ。まかり間違って声をかけられて、一緒にお喋りが出来れば最高だ。何かきっかけがあれば、きっと……。

今、コンビニのある角を曲がると真鉤天が二人の上級生に行く手を塞がれていた。金髪とピアス。

学校の裏門で真鉤に絡んでいた二人だった。さっきのやり取りを紀子も知っている。藤村奈美が緊張した様子で見守っていたことも。

「なあ、お前、天海の奴と仲がいいのか」

金髪が聞いた。横を車が行き交っているし距離も遠かったが、なんとかその台詞は紀子にも聞こえた。

二人は、天海に凹まされた腹いせに出たのだろう。

「いえ。同級生ですが、仲がいいというほどでもありません」

真鉤は丁寧な口調で応じていた。彼は誰に対してもそうだ。この状況でも全く揺るがない冷静さに紀子は痺れるような快感を覚えた。きっと真鉤にとって、こいつらなどただのゴミなのだ。

「天海がよ、お前には手を出さなって言ってるんだ。なあ、お前は天海に告げ口したりするかい」

「いいえ、そんなことはしません。先輩方は僕に手を出すつもりなんでしょうか」

真鉤の態度は変わらない。

「さあね。取り敢えず一万円ほど持ってくれば考えてやってもいいけどな」

「申し訳ないですが、そんな余分なお金はありません」

ピアスが真鉤の肩に手を置いた。

「それは、俺達にやるような金はないって、そういうことかい」

「困りましたね」

急に真鉤の雰囲気が変わった。苦笑混じりの声だ。真鉤が周囲を確認する動きを見せた

ので、紀子は慌てて物陰に隠れた。

「なるべくトラブルは起こしたくなかったです。いつもより早いけど仕方ありません。本来、先輩方のような人達を選ぶべきなんですよね」

真鉤の声音から、自然な冷酷さが滲んでいた。

「どつという意味だ」

「もう少し詳しい話をしませんか。ここではなくて、別の場所で」

会話が遠ざかっていく。紀子は慎重に三人の後を追った。真鉤の先導で脇道へ逸れていく。気づかれないように、ぎりぎり見失わない程度の距離を保った。何が起ころのだろう。

紀子は期待と緊張に胸が高鳴っていた。

古いアパートの前を過ぎ、ボロボロになった木造の廃屋が見えた。周りは草が生え放題だ。

「ここがいいでしょう」

真鉤が先に入り、二人が互いの顔を見合わせてから続いた。喧嘩が始まるんだ。紀子は理解した。きつと真鉤君は強いんだ。一対二でもボコボコにやっつけてしまうだろう。

いつそのこと、そんな奴らぶち殺しちまえ。世界と人類への憎しみが残酷な喜びとなり、期待に上乘せされる。

音を立てないように気をつけながら紀子は廃屋に近づいた。曇りガラスの割れた隙間から内部を覗いてみる。まだ陽は高く、汚れた屋内の様子がはっきり見える。奥に畳の間があり壊れたタンスなどが転がっている。三人はその手前の土間にいた。

金髪の右目から茶色いものが生えていた。

錆びついた、大きな長い釘の、頭だった。

「あ。っ」

金髪の左目がそれを見ようとしてグリグリと動いた。右目の釘も一緒に動いた。真鉤の左手が素早く釘の頭を掴んで引き抜いた。ズボンと音がして、串刺しになった眼球が一緒に抜けた。真鉤は両手に軍手を填めていた。

え、何。どういこと。

紀子は、啞然として見守っていた。

「お、おい、それ……」

金髪が、串刺しの眼球を左目で見て指差した。真鉤が右掌で金髪の顔を叩いた。ボジヤツ、と、不気味な音がした。

金髪の、首から上が消えていた。金髪の両腕が羽ばたくようにビクンビクンと揺れる。

ゆっくりと前のめりに倒れた金髪の、見えなかった首から上は、後ろに百八十度折れ曲がって後頭部が背中にくっついていていた。

死。死んだ。

これは死んでる。殺した。殺人だ。人殺しだ。



紀子の中で同じ言葉がグルグル回っていた。彼女は瞬きも出来ずその場に凍りついていた。さつきまで殺せと思ったことなど頭から吹っ飛んでいた。死んだ。殺した。心臓の鼓動がうるさいほどに響く。さつきまでの高鳴りとは全く違う鼓動。苦しい。

残ったピアスの三年が、次第に呼吸音を高い声に変えていく。

「あ。あああ、あひゅ、うわゴゲッ」

ピアスの上げかけた悲鳴が中断された。滑り寄った真鉤が血塗れの釘をピアスの喉に突き刺したのだ。刺さったままの眼球が喉と釘の頭に挟まって潰れた。気管をやられてピアスは声を出せず湿った咳を繰り返すだけだ。

その場に蹲るピアスを放って真鉤が屋内を見回した。何かを見つけたらしく奥に歩いていく。戻ってきた時には汚れた包丁を握っていた。錆びた釘も拾ったものだろう。

軍手を填めているのは、指紋を残さないためか。

彼は最初から、殺す気だったのだ。手慣れた感じはもしかして、これまでも同じようなことを……。

「災厄は、理不尽に降りかかるものだ」

感情の籠もらぬ声で真鉤は言った。その横顔は笑みを浮かべていた。たまに見せる控えめな微笑とは全く違う、仮面のように虚ろな笑み。大きく見開かれた目は薄く膜が張ったようで、ここではない別の世界を覗いていた。この世界に属する意志や感情は今の彼の何処にも見当たらなかった。

真鉤天は今、異次元の生物であった。

「慣れたお遊びが相手次第で命取りになることもある。望んだ訳でもないのに怪物に生まれてしまうこともある」

虚ろな笑顔のまま真鉤は告げた。ピアスは喉をギーギー鳴らしながら必死にポケットを探っていた。取り出したのは折り畳みナイフだ。手が震えてなかなか刃を開けないでいる。

その右手に、真鉤が屈んで包丁を振り下ろした。ゲヒューツ、とピアスの喉から高い息が洩れた。

彼の右手首が完全に切断されていた。断端から血が噴き出して土に染みていく。ピアスが目を剥いている。

一歩下がって振り返り血を避け、真鉤が言った。

「まだ左手が残っているが、どうする」

左手でナイフを使えばどうかと言っているのだ。膜のかかった真鉤の瞳に恍惚の色を認めて紀子はゾツとする。

真鉤天は、喜んでいるのだ。

ピアスは噴き出る血を左手で押さえようと努力しながら真鉤の顔を見上げた。そして、ナイフを握ったまま落ちている右手を。

決断は早かった。ピアスはナイフを諦めて口をパクパクさせた。涙を溢れさせ、助けてくれと目が哀願している。

真鉤は動かなかった。出血は続いている。ピアスは土下座して命乞いを始めた。湿っばい呼吸音。

「先輩、顔を上げて下さい」

敬語に戻って真鉤が告げた。

ピアスは、青い顔で、恐る恐る、顔を上げた。

真鉤が包丁を横に払った。ピアスの顔が上唇の辺りで切り裂かれた。何かが飛んだ。歯の三、四本くつついた歯茎の塊と、ピアスの刺さった唇の肉。

ピアスの頬が破れ、砕けた骨までが見えていた。ビビュー。気管の音。ピアスが両手で顔を押しさえようとする。ない右手から噴いた血が顔を汚す。

真鉤が無言で包丁を振り下ろした。ピアスの額に、二十センチ以上の刃が完全にめり込んだ。ピアスの目が裏返った。

力なく崩れ落ちるピアスを見届けてから、真鉤は目を閉じて大きく息を吐いた。

仮面の笑みは消え、満足げな顔になっていた。心底幸せそうな、表情だった。

人殺し。人殺しだ。彼は殺人鬼だった。紀子はパニックになっていた。見つかったら私も殺される。逃げないと。警察に。五分前までの淡い恋心など跡形もなくなっていた。逃げよう。でも怖くて足が動かない。急いで逃げないと。人殺し。逃げ……。

急に真鉤が目を開けて窓の方を見た。紀子の目と真鉤のギラつく目が合った。見つかった。ばれた。ヒッ、と紀子の口から細い悲鳴が洩れた。逃げないと呪縛が解けた。紀子は走り出した。早く庭を抜けて通りへ、人の多いところに出ないと。

だが、紀子が窓から離れて三步目を踏み出す前に強い力が彼女の口元を覆っていた。粗

い繊維の感触。軍手だ。そんな。こんなに素早いなんて。

必死で抗う紀子を真鉤は軽々と引き摺っていった。廃屋の内部へ。

「迂闊だった。昼間だから、もっと注意しておくべきだった」

死体の転がる土間で真鉤は独り言のように喋った。感情の籠もっていない声。教室で喋る声と変わらない。

左手で紀子の口元を押さえたまま、真鉤は前に立った。無表情に紀子の顔を観察している。どうやって始末するのか考えているのだろうか。右手は血塗れの包丁を握っていた。

出る前に死体から引き抜いたのだ。

「島谷さん。僕を尾けてきたんですか」

真鉤が尋ねた。彼が自分の名前を覚えていてくれたことも、紀子に何のときめきも与えなかった。

どう答えればいいのか分からない。口も塞がれている。怖い。膝に力が入らない。腰が抜けそうだった。

助けて。お願い。死にたくない。

震えている紀子の目を覗き込み、真鉤が重ねて問うた。

「君が見たことを、誰にも喋らないと約束してくれますか。勿論、警察にも」

助けてくれるの。クラスメイトだから、助けてくれるの。紀子はすぐ何度も頷いた。彼女の首の動きを確認して、真鉤はゆっくりと左手を離した。冷え冷えとした瞳は紀子から逸らさずに。

「いいですか。もし喋ろうとしたら、殺しますよ」

真鉤の右手の包丁は、切っ先から血と薄黄色の液体の混じった雫を垂らしていた。

紀子は頷き続けた。頷くついでにへたり込みそうになるのをこらえた。間違つてへたり込んでしまったら殺されてしまいそうだ。悲鳴になりそうで声も出せなかった。

真鉤天は暫く紀子を観察していたが、やがて左手で出口を指差した。

「どうぞ。さようなら」

紀子はよろめきながら廃屋を出た。草に足を引つ搔かれても気にならなかった。自然に涙が滲み出す。それは安堵のためか、恐怖のためか。

真鉤君は殺人鬼だった。どうしよう。喋ったら殺すと言った。でも警察に言わないと。大体私が通報する義務なんてない。でも怖い。あの人の気が変わってやっぱり私を殺したくなるかも知れない。それなら警察に言つて早く捕まえてもらつた方が。でも彼は私を見張つてるかも。

紀子は背後を振り返つた。真鉤の姿はない。



彼は死体を隠すのだろうか。それとも放置するのだろうか。誰も来ないような空き家だから発見されないかも知れない。彼は何人も、同じように殺してきたのだろうか。

大きな通りに出た。人の姿を認めて紀子はやっと生き延びたことを実感した。それでも涙は止まらなかった。紀子は何度も振り返りながら小走りに家に帰った。

「どうしたの紀子」

母親が紀子の泣き顔に驚いて尋ねた。紀子は久々に母親というもの存在をありがたく思った。いつもは鬱陶しいだけだったのに。そのまま泣き崩れて打ち明けてしまおうかとも思ったが、紀子はなんとか自制した。

「何でもない」

それだけ言って二階に上がった。自分の部屋に入ってドアをロックする。

ベッドに蹲って頭から布団をかぶり、紀子は暫く震えていた。

涙が出なくなつた頃には二十分ほどが過ぎていた。紀子は漸く落ち着いてきた。冷静になつて考えてみると、やっぱり警察に連絡すべきだろう。殺人鬼と同じ教室ですつと過ごすことを考えたなら、とても紀子の精神は耐えられそうにない。警察に説明して、確実に真鈎を逮捕してもらわなければ。もし逃げられたら紀子は復讐されるかも知れない。

紀子は布団をめくつてベッドから立つた。震え過ぎて体中の筋肉が痛い。何日か筋肉痛が続くかも知れない。窓から外を覗いてみる。家の前に人影はない。

よし。

親子電話の子機は彼女の部屋にもある。紀子は受話器を手に取つて、1、1、1、とボタンを押した。

0に指先が触れる寸前、カツンと赤いものが視界を過ぎた。

電話機のすぐ後ろに、それは深々と突き立っていた。電話線を切断している。

血糊を拭き残した、古い包丁だった。

それが飛んできた方向に、紀子はゆっくりと、本当にゆっくりと、目を向ける。また涙が滲んでくる。

部屋の天井に真鉤天が張りついていた。洋間のため天井には何も掴むような出っ張りがないのに、どうやってか彼は蜘蛛のように張りついていたのだ。

いつの間に、侵入したのか。もしかして最初から……。

真鉤は仮面のように虚ろな笑みを浮かべていた。唇から涎が少し垂れている。その瞳が、薄く膜を張ったような瞳が、別の世界を覗くみたいに紀子を見つめていた。

紀子が悲鳴を上げる前に真鉤が落ちてきた。

今日は島谷紀子が登校していない。誰かと遊び歩いているのでは  
と言う者もいたが、彼  
女に友人がいないことは皆知っている。家出したんだろうと言う者  
もいた。昨夜、彼女の  
家の前にパトカーが停まっていたという噂だ。詳しいことは分から  
ない。

藤村奈美は、昨日裏門で彼女が見せた敵意を思い出していた。

この辺って良く行方不明があるだろ。そんなことを言う者もいた。

島谷の机に花を置いておこうか。男子の一人がそう言うとクラス  
メイトの多くは笑った。

奈美はちよつと嫌な気分になった。

奈美は窓際の席を見た。真鉤天は笑っていなかった。彼はそんな

ことで笑ったりはしない。  
奈美は独りで安心した。

真鉤は横顔にあの寂しげな翳りを映しながら、静かに窓の外を眺めていた。

戻る

## 第二章 魔人達

### 第二章 魔人達

—

「どうして俺に頼まなかった」

休日の午後、閑散としたカフェテラス。同じテーブルの向かいで足を組む日暮静秋が言った。

「俺の家まで引き摺ってくりゃあ、その女の記憶を消してやったのに」

日暮は真鉤の黒い制服とは違い青のブレザーを着ていた。隣町にある北坂高の制服だ。

真鉤と同じ二年生。

身長は百八十センチ前後、痩せ型だが貧弱な印象はない。色白で西洋的な彫りの深い顔立ちはどこらかといえは陰性の美を備えている。髪は長い。闇色の深い瞳が真鉤天を見据えている。

二人のテーブルは中心から生えた紅白のパラソルで直射日光を免れている。日暮は何処かしら気だるそうだった。

真鉤は無表情に反論する。

「咄嗟のことで、そこまで思いつかなかった。それに、人込みの中で彼女を連れていって、途中で騒がれる危険もある」

「お前ならうまくやれるだろ。どうしても難しけりゃ電話しろ。出張してやる。余計な死人を出すよりはましだからな」

「分かった。すまない」

真鉤は頷いた。彼の前にはコーヒークップがあった。

日暮はジンジャーエールのグラスに口をつけて少し飲んだ。見つめていると、グラスの中で氷がクルクル回り出す。持った手は動かしていないのに。グラスの中に渦が出来ている。

やがて、真鉤が言った。

「僕は……君が、羨ましい」

本心なのだろう、声に苦渋が滲んでいた。

グラスの渦が静まった。日暮は黙って真鉤を見返している。

「君は、僕のように罪悪感を背負う必要がない。誰も殺さずに済むのだから」

「お前の気持ち分かるなんて、無責任なことを言うつもりはないぜ」



日暮は同情も嘲笑もなく告げた。

「だがな、宿命は背負っていくしかない。俺は俺の、お前はお前の宿命をな。背負いきれなくなったら俺に頼め。楽にしてやる」

真鉤は俯いていた。

「……まだ、死にたくはない。死にたくないからこうして苦しんでいる。僕は勝手な奴だ」

「なら苦しんで生きなよ。俺はお前のそういう割りきれないところで、嫌いじゃないぜ」

日暮は唇の片端だけを軽く曲げて大人びた笑みを見せた。

真鉤も苦笑した。はにかんだような申し訳なさそうな笑み。生き辛そうな、笑み。

若い男の呻き声が聞こえ、二人はそちらを向いた。横断歩道の手前にラフな服装の若者が三人立ち、うち一人が顔を押さえて呻いている。顎の先から鼻血が垂れている。他の二

人はあっけに取られた顔だ。

彼らを置いてこちらに歩いてくるのは南城優子だった。日暮と同じ北坂高で、同じクラスだという。長めのスカートにブーツ、薄手のジャケット。髪は茶髪のソバージュで、化粧は薄いがモデルのように整った顔立ちをしていた。天真爛漫さと姉御的な気の強さが自然に溶け合っている。

日暮静秋と対照的に陽性の輝きを持つ少女は、二人の座るテーブルまで近づいてきた。

「よう」と片手を上げて日暮が迎える。

「静秋、また制服で来てる。休日くらい私服でって言ったでしょ」

「私服なんて面倒臭いしな。それよりまた殴ったのか。拳で」

目線で若者達を示して日暮は聞いた。

「だって馴れ馴れしく話しかけてきてさ、私の肩に手なんか置くから。静秋だって私がナ

ンパされたら嫌じゃない」

「でも拳はやめろよな。女の子はおしとやかな方がいい」

「私がおしとやかじゃないみたいじゃない」

南城優子は頬を膨らませた。怒った仕草も可愛らしいが妙に迫力がある。

そんな少女に真鉤は控えめに挨拶した。

「こんにちは、南城さん」

彼女は挨拶を返さなかった。真鉤を見下ろす目にはっきり嫌悪感が浮いている。

「静秋、まだこんな奴と付き合ってるの」

真鉤は表情を変えなかった。彼女の反応を予想していたのかも知れない。

「付き合ってるってのは語弊があるが、まあこいつは俺の唯一の親友だからな」

日暮はあっさり言う。少女は呆れたように溜め息をついて、真鉤に強い瞳を向けた。

「何度でも言っとくけどね。もし私の友達に手を出したら許さないからね」

「気をつけています。顔写真つきの除外リストを作ってもらえたら確実なんです」

真鉤は頷いた後、同じ口調で言った。

「許さないというのは、僕を殺すということですか。直接手を下すのは日暮君になるでしょうけれど、君も人殺しの共犯ですよ。人殺しになった自分の姿を想像したことはありませんか」

南城優子は答えに詰まった。真鉤は更に付け加えた。

「それに、僕もまだ死ぬ気はありませんから、処刑の結果は逆にな

るかも知れません。君  
は自分の恋人を殺し合いにけしかけられるんですか」

沈黙。三人にとって街の平凡なざわめきは遠いものだった。

「わ、わた……」

何か言いかけた少女を遮って日暮が告げた。

「俺が殺す。優子を苦しめたら、俺が自分の意志でお前を殺す。それが彼氏の義務って奴  
だろっからな。お前ほどじゃないが、何人も敵を殺してきた。この  
手にお前の血がついた  
ところでどつとということはない」

日暮はジンジャーエールを飲み干して立ち上がった。

「さて、行くか。じゃあな、真鉤」

南城が鼻に皺を寄せて真鉤に吐き捨てた。

「あんななんて、大っ嫌い」

「そうですね。さようなら」

真鉤は去っていく親友とその恋人に挨拶を投げた。二人が十歩も進まないうちにさっきの若者達が立ち塞がった。一人はプラスナツクルを詰め、一人は折り畳みナイフを出している。

「鼻が折れた。どうすんだよ、これ」

曲がった鼻筋を腫らして一人が憎々しげに言った。

日暮は気楽に応じた。

「病院に行きなよ」

「おい、お前がこの女の彼氏か」

プラスナツクルの若者が聞く。

「ああそつだ。まだキスしかしてないけどな」

「馬鹿つ、そんなことペラペラと」

南城がいきなり拳で日暮の横顔を殴った。ベギツ、と凄い音がして日暮の首がへし曲がった。日暮は苦笑しつつ頬を押さえる。

テーブルに一人残された真鉤は、彼らのやり取りを静かに眺めていた。

「で、どう責任取ってくれるんだ」

「責任ねえ。じゃあそいつで俺の顔を殴ってみな」

日暮がプラスナックルを指して言った。まともにあたれば歯が折れ骨が碎ける凶器。

「俺を舐めてんのか」

プラスナックルの若者が目を細める。

「別に。まあやってみる」

若者は遠慮しなかった。凶器の填まった右拳が日暮の顔面に激突した。

日暮の首が奇妙な揺れ方をした。途中まで仰け反りかけ、顔に相手の拳をつけたまま素早く小刻みに動いたのだ。

「手首、肘、肩つてとこだ」

宣言と同時に若者の右腕がだらりと垂れた。必死に腕を上げようとするが腕は惰性で揺れるだけだ。

日暮静秋は、顔面で受け止めただけで相手の三ヶ所の関節を外してみせたのだ。南城は横で嬉しそうにしていた。強い恋人が自慢らしい。

「お前も病院に行け」

日暮が言った。殴られたダメージはないようだ。



若者達は啞然としていたが、ナイフを持った一人が我に返って叫び出した。

「な、何なんだよてめえっ」

「ナイフを受け止めるのは痛いからやめとく」

言った時には日暮の左手が伸びて若者のナイフに触れていた。パツンと刃が折れた。指

三本で挟んで折ったのだ。若者が目を剥いた。

「あれ、お前の顎」

驚いたふりをして日暮の右手が若者の下顎に触れた。親指と人差し指で顎のラインを挟む。

「お前の顎、砕けちまってるぞ」

骨の砕ける音がした。若者が言葉にならない声を上げた。

「お前も病院だな。整形外科がいいぞ」

日暮は唇の片端を曲げて冷たく笑った。

「じゃあ行く、買い物」

南城が満足げな笑顔で日暮の腕に自分の腕を絡めた。

陰と陽のカップルが去っていく。三人の若者は負傷箇所を押さえて見送るだけだ。

真鉤天は冷めたコーヒーを静かに飲み干した。

席を立ち、カフェテラスを去った。

警視庁から来たという刑事は大館千蔵と名乗った。紀子が姿を消して三日。何故今になって東京から刑事が来るのか島谷香苗には分からない。地元の警察は家出だろうと言っていたのに。

「失踪の状況が特殊なものですから。お嬢さんの捜索に協力出来るかも知れません」

大館は奇妙な雰囲気を持つ男だった。大柄で、身長は百九十センチ以上ある。のっそりとした動きは何処となく不自然な感じがした。年齢は三十代後半から四十代前半だろう。まだ寒い時期でもないのに灰色の厚いロングコートを着ている。肌の血色は悪く、コートと同じく灰色がかって見えた。オールバックにした髪の毛の生え際はやや後退して深いM字を作っていた。眠たげな目は正面や上を見る際はしばしば三白眼となる。表情は殆ど動かず、歯切れの悪い陰鬱な声で喋る。

この刑事を前にすると、島谷香苗は自宅にいるのに別の世界に迷

い込んだような気分  
にさせられた。その理由が何なのか、彼女には掴めない。

大館刑事は幾つかの点を香苗に確認した。娘の紀子が自宅に帰ってきたのが午後四時二十分前後で、ひどく怯えた様子で泣いていたこと。事情を話さず二階の自室に上がったこと。彼女がいけないことに気づいたのが午後七時過ぎで、それまで香苗は台所において、娘が一階に下りる気配は感じられなかったこと。彼女の靴がそのまま残っていること。自室の窓に鍵が掛かっていなかったこと。子機の電話線が切られていたこと。

話をしている間、大館は持参したミネラルウォーターのペットボトルに時折口をつけていた。喉が渴くのだろうか。香苗が煎茶を勧めると「いえ、お構いなく」と断っている。

「それでは、お嬢さんの部屋を見せて下さい」

ペットボトルに蓋をしてコートの内側に収め、大館は言った。

香苗が先に階段を上り、内装を見渡しながら大館がついてくる。何やら奇妙な音がする。

大館が深呼吸を繰り返している。それがリュオン、リュフュー、という高い音になって聞こえるのだ。

顎が外れるくらいに大きく開けた口は、赤く深い口腔のみで歯が一本も見えなかった。

「どうかしましたか」

香苗は尋ねた。

「血の匂いです」

「え」

深呼吸ではなくて匂いを嗅いでいたのか。それにしても血の匂いとは。香苗には全く匂わない。

刑事が無表情に案内を促した。香苗はドアを開けて娘の部屋に刑事を入れた。

「三日前に一通り見てもらったんですけど……」

刑事は黙って室内を見回していた。勉強机とベッド、クローゼット、本棚、テレビ、そして床に置かれた電話機。

板張りの床に屈み、刑事が細い筋を指差した。

「刃物の刺さった跡です。幅と深さから、料理用の包丁でしょう。古いものですね、錆が残っています。それと血液がついていたようです。丁寧に拭き取っています」

「血は、紀子の……」

床に顔を近づけて奇妙な呼吸音をさせ、刑事は首を振った。

「血液は男のもんです」

匂いだけでどうして分かるのか。しかし刑事は冗談を言っているのではなさそうだ。

大館刑事は電話線の断端も確かめた。

「血を拭いた跡があります。おそらく、包丁を突き立てて電話線を切断したのでしょう。」

それもかなりの勢いで。お嬢さんが誰かに電話しようとして、それを急いで妨害した、という事になりますか。状況からすると、警察に電話するつもりだったかも知れません。包丁を投げたのは……。」

刑事は床の傷から、天井の一角に目を移した。

「そこからです」

「て、天井……ですか」

ぶら下がるにも掴むものがない平らな天井だ。電灯は中心にあり刑事の指した場所ではない。

「失礼。椅子をお借りします」

問題の場所の下に椅子を置き、刑事の巨体に乗った。顔が天井にぶつかりそうになる。

暫く天井を睨んだ後、刑事が言った。

「三、四ミリ程度の浅い凹みが出来ています。五つが連なって、丁度手を広げた指先の位置関係です。そんな凹みもありません。犯人は指で体重を支え、天井を這って移動していた」

「そ、そんなことが、出来るんですか」

「人間には無理です」

刑事は平然と答えた。喋る時以外は口を開け、リュオン、リュフュー、と何度も匂いを嗅いでいる。

「おかしい。犯人の匂いがしない。血の匂いだけだ」

「あの、それで、紀子はどうなったんですか。その犯人に連れ去ら



れたんですか」

匂いの世界に没頭する刑事に眩暈を覚えながら香苗は尋ねた。

「そうですね。探してみましよう」

刑事は椅子から下りて室内の空気を吸って回った。そのうち部屋から出てしまい、二階の廊下を蛇行していく。香苗は黙ってついていく。

「11の部屋は」

隣の部屋を指して刑事が問う。

「幸子の……紀子の姉の部屋です。大学に行って一人暮らしになったので、今は使ってません」

「失礼」

刑事がドアを開けた。中は和室で、勉強机や棚はあるが綺麗に片づけている。刑事は匂

いを辿りながら押し入れを開けた。上の段、その天井の板を押し上げると屋根裏への通路が開く。

「懐中電灯を持ってきましようか」

「要りません」

大館刑事は屋根裏に頭を突っ込み、更には上半身も消えた。

ズル、ズル、と、重いものが滑る音がした。

息を呑む香苗の前に、大館刑事は透明なビニール袋に入った大きな塊を引き摺り下ろした。

「紀子さんです」

あまりにも冷静に、刑事は告げた。

市指定のゴミ袋に包まれて、饅頭のように丸められ畳まれた、紀子の死体だった。ビニ

ールに押しつけられた窮屈そうな横顔が、白目を剥いて香苗を睨んでいた。

絶句してその場に座り込む香苗の前で、刑事は袋を開き始めた。

「三重に密封しています。腐臭を洩らさないためでしょうが、その場凌ぎですね」

刑事は袋の中の死体に触れて手足や首を動かし始めた。

「全身の骨が砕けていますが、これは袋に詰めるためのものでしょう。死因は頸椎骨折、延髄損傷による呼吸停止です。気管も潰されています。素手でしよう。血が部屋を汚すことを恐れたのかも知れません」

袋に顔を突っ込んで刑事は執拗に深呼吸した。

「やはり、匂いがしない。これでは識別は無理だ」

暫く死体を調べた後で、動けない香苗を振り向いて刑事は言った。

「ひとまずこれで失礼します。ご協力ありがとうございました。警察に連絡しておいて下さい。指紋はおそらく出ないでしょうが、念のため採るようにも伝えて下さい」

香苗を置いて、刑事はペットボトルを取り出すと一人で出ていった。階段を下り、玄関を開け閉めする気配があった。

暫くの間、香苗は安心して座り込んでいた。娘の腐臭が漂ってくる。流れ出る涙は悲しみのためか、それとも腐臭に粘膜を刺激されたのか。

なんとか階下まで這って電話すると、警察の担当者はひどく驚いていた。

警視庁の刑事が捜査に参加するとは聞いていないということだった。

更に警視庁に問い合わせた結果、大館千蔵という刑事は存在しないことが判明したという。

月曜日の校内は事件の噂で持ちきりだった。屋根裏から見つかった島谷紀子のことはテ

レビヤ新聞で皆知っている。死体がビニール袋に包まれていたこと。首の骨が折れていたこと。どうやら犯人は家に忍び込んで彼女を殺したらしいこと。容疑者はまだ特定されていないこと。何故彼女が殺されることになったのかも分かっていない。

こりゃ恨みだよと男子の一人が言った。もしかして母親が殺したんじゃないかと別のクラスメイトが言った。あいつのことだから自殺だよと笑う者もいた。自分で袋に入ったのだと。

一時間目は緊急の全校集会が開かれ、校長から島谷紀子の冥福を祈ることと、事件につ

いて何か知っていることがあれば教えて欲しい旨の話があった。マスコミの取材には相手をしていないようにも言われた。また、二日後に告別式があるので希望者は登校扱いで出席出来るということだった。

島谷紀子の机には本当に花瓶が置かれることになった。いずれ机は取り払うと担任は言った。

彼女が死んで泣く者は一人もいなかった。でも告別式には皆泣いてみせるのだろう。藤村奈美はそんなことを思っただけで憂鬱になる。

クラスメイトが死んだということに、奈美はまだ実感を持ってなかった。世の中に人の死は溢れているが、それを身近に感じた経験は少ない。父方の祖父が亡くなった時、彼女はまだ幼過ぎた。母方の祖父母は彼女が生まれる前に亡くなっている。

こんな状況で彼がどんな顔をしているか知りたくて、奈美は真鉤天の席を見た。

真鉤はぼんやりと二時間目の教科書を開いていた。特別普段と変わらぬ様子に奈美はち

よつとがっかりするが、彼ならばそうだろうという納得の気持ちもある。彼は、他人とは少し違っている。

島谷紀子は何を望んで生き、何を思っただんでいったのだろう。他人のことは分からない。奈美には、自分が何のために生きているのさえ分からなかった。きつと皆、そうなのだろうとは思っ。

昼休み、借りていた小説を返却しに図書室に行くと、珍しく真鉤天が一人で本を読んでいた。新書だ。

奈美は、思いきって声をかけてみることにした。

「何を読んでいるの」

真鉤は顔を上げ、本を立てて表紙を見せてくれた。著者は外国人で、『善と悪の定義』というタイトルだった。

「哲学の本」

「そうですね、僕も読み始めたばかりなので」

真鉤はあの翳りのある微笑を見せた。奈美は後に続けるべき言葉がないことに気づき、内心慌てて言葉を探す。

「あの、もしかして、島谷さんの件があったからかな」

言ってからしまったと思った。こういうデリケートな話題は出すべきではなかった。

「どうなんでしょうね。自分でも良く分かりません。何となくこの手の本を読みたくなくて」

真鉤は嫌な顔もせず応じた。彼が嫌な顔をしたところをこれまで見たことがなかったが。

次の台詞に詰まった奈美に、フォローするように真鉤が聞いた。

「藤村さんは良く図書室を使っんですか」



「ええ。一応文芸部だから。幽霊部員だけど」

奈美が笑うと真鉤も曖昧な笑みで応じたが、目は笑っていなかった。僅かに眉をひそめて奈美の顔を見据えている。どうしたんだらう。何か言いたいことでもあるのだろうか。

しかし奈美は長居を避けて「じゃあ」と言ってその場を離れた。真鉤も読書を再開した。念のため図書室を出る際に振り返ってみるが、真鉤はこちらを見てはいなかった。

何だったのだろうか、あれは。気になるが、奈美の気持ちなどお構いなしに時間は進む。

放課後になった。久しぶりに部室に寄ることも考えたが、嫌な事件もあったことだし奈美はそのまま帰ることにした。

自分の下駄箱を開けると、中に紙きれが入っていた。一瞬ラブレターかと思ってドキリとする。奈美はこれまでそんなものを貰ったことがなかった。恥ずかしながら容姿にはちよっと自信があるのに、どうして誰もラブレターをくれないのだらう。自分は近寄りがた

い存在なのだろうか。

「だか問題のものは封書ではなくレポート用紙を小さく畳んだものだった。宛名もない。その場で開いてみると、ただ一文だけ書かれていた。」

『病院で検査を受ける』となっていた。

「どういう意味だろう。ドキドキ感は一気に吹き飛び、生ぬるい不安に変わっていた。私  
が病気だということなのか。体力は元々ない方だが自分では健康だ  
と思っっている。誰かの  
悪戯だろうか。一体誰が……。」

図書室で奈美の顔を見つめていた真鉤のことを思い出す。

「よう、どうした奈美ちゃん」

振り返ると天海東司がいた。右手にブランデーかウイスキーの入った小瓶を持っている。

「いえ別に……」

「お、どうしたそれ、ラブレターかい」

長身の天海は奈美の肩越しに紙面を覗き込む。彼に繊細さなどを期待しても無理というものだ。奈美は仕方なく内容を見せた。

「下駄箱に入ってたの」

天海は不精髭の伸びかけた顎を撫でて唸った。息が酒臭いが酔っ払ってはいないようだ。

「うっむ。奈美ちゃん、いい産婦人科紹介しようか」

「い、いや、そんなんじゃない、です。私は覚えありません」

奈美は慌てて否定した。顔に血が昇るのが分かる。

「ふうん。なら、体の具合はどうだい」

「別に悪くはないと思うけれど」

「誰が書いたんだろうな」

「それが分からないんです。誰の字か分かります」

角張った字体だった。天海は紙面に顔を寄せた。

「分かんねえな。筆跡出さないためにわざとこんな字にしてるんじゃないかねえのかな」

「真鉤君の字とは違うかな」

天海は意外そうに奈美を見返した。

「真鉤の字と似てるのかい」

奈美は後悔した。

「いえ。あんまり見たことないし」

「真鉤がそれっぽいこと言ってたのかい」

「いえ……。すみません、ただの思いつきです」

「ふうん。まあ、病院で血液検査とかしてもらっても、別に損はねえよなあ」

「そうですね。考えてみます」

そうは答えたものの、奈美はあまり行く気がしなかった。

「ところで奈美ちゃん、真鉤のことが気になってんのかい」

「え」

唐突に聞かれて奈美はドギマギしてしまった。

「こないだも真鉤のこと見てただろ。もしかして、告白する予定とか」

数日前の下校時、真鉤と上級生二人のやり取りのことだ。

「いえ、べ別に、そんなこと、そんなつもりじゃ……」

「あいつにはあまり近づかん方がいいぞ」

天海が真顔になって言うので奈美は驚いた。あの時も上級生達に天海はそんなことを言っていた。

「どうしてですか」

「真鉤はいい奴だが、プライベートに踏み込まれるのは嫌みたいだからな。ちょっと離れ

たところで見守るくらいが一番いいんじゃないかな」

「天海君は、真鉤君のこと良く知ってるんですか」

「あんまり知らん」

天海は苦笑したが、すぐに真面目な表情に戻る。

「というか、仲良くしたいんだが俺も気を遣ってんのさ。だから余

計なことは詮索しない  
ようにしてる。まあ、俺に出来る範囲で守ってやれたらいいと思  
ってるよ。あいつも、  
周りもな」

最後の台詞の意味は良く分からなかった。奈美は紙を畳んで鞆に  
入れ、天海に別れを告  
げた。

「それじゃあ。お酒飲んどるとこ、先生に見つかったら大変よ」

「先生らも知ってるよ。それに今日は追悼の酒でもあるんだぜ」

天海は瓶の中身を少し呑んだ。残りは半分ほどだ。もしかすると  
かなり酔っていたのか  
も知れないと奈美は思う。酔いが表面に出ない体質なのだろう。

「島谷さんのこと。早く犯人が捕まるといいけど」

「ああ、そうだな。だけど、犯人は捕まらないような気がするぜ」

意外なことを天海は言った。彼の瞳には沈痛の色があった。

「じゃあ。さようなら」

「じゃあな」

天海はいつものように片手を振って奈美を見送った。

真鉤天が校舎を出ると、天海東司が裏門のそばの塀に寄りかかって立っていた。

真鉤は無表情に、彼の前を通り過ぎようとした。申し訳程度の会釈をして。

「真鉤」

天海が声をかけた。



「仕方なかったんだな。そうなんだろ」

真鉤が立ち止まり、天海に顔を向けた。その瞳は何の感情も映していない。

見返していた天海が、やがて、目を逸らした。

真鉤天は、黙って裏門を抜けて去った。

天海は酒瓶を飲み干して気だるく息をついた。

#### 四

真鉤天の家は斜めの屋根が互い違いに重なった奇妙なデザインの建物だ。築二十年ほど

になる筈で、多少壁はくすんできている。

真鉤は郵便受けから夕刊を取って雑草のはびこる庭を一瞥し、玄関のドアを開けた。口

ツクは二ヶ所ある。一階の窓には鉄格子が填まっており、サッシ戸には小型のセンサーアラームが取りつけてある。

真鉤は居間に夕刊を置き、まず家の中を一通り点検する。台所、トイレ、浴室、応接室、物置。二階に上がって彼の勉強部屋兼寝室机に鞆を置く。別の寝室も覗く。親の部屋だったが今はベッドにもカバーがかけられている。書斎。机には何も載っていない。

三階は六畳ほどの一つのフロアになっている。窓は小さく人がぎりぎり抜けられる程度だ。ここも日頃は使っておらず段ボールなどが積まれている。

地下室は最後だった。奥の方には不要な荷物が適当に並んでいる。流しの傍らにはモップやバケツがある。フロアの中心に大型の焼却炉があった。

無表情に点検を終え、真鉤は一階に戻った。テレビを点け、チャンネルを一周させる。

緊急ニュースなどはないようだ。真鉤はテレビを流しながら夕刊を開いた。

一面の記事は首相の訪米に関するものだった。真鉤は途中を飛ばして社会面を見る。

島谷紀子殺害事件のことが載っていた。朝刊より割かれたスペー  
スは小さい。捜査の進  
展は特にないようだ。

いや。真鉤は目を細めた。

死体を発見したのは警察ではないらしい。身分を刑事と偽った男  
が屋敷内を調べて見つ  
けたということだ。犯人が死体の隠し場所を教えるとは考えにくく、  
警察は男を参考人と  
して捜しているという。

偽刑事の氏名は公表されていなかった。

真鉤は夕刊を読み尽くし、夕食の準備に移った。冷蔵庫には肉と  
野菜が詰まっている。

一週間分をまとめて買うのが習慣になっていた。

真鉤は自分で米を研いだ。ニュースを暫く観てから炊飯器のスイ

ツチを入れる。米が炊けると料理を始めた。フライパンで肉を焼き、包丁でキャベツと人参を切る。大きな皿に焼けた肉と生の野菜を載せる。ドレッシングは何もかけない。コップには水道水を注ぐ。

米と肉と生野菜だけの食事を、真鉤は黙々と食べた。栄養さえ摂ればいいと思っているような食事だった。

食べ終わるとすぐ後片づけを行い、シャワーを浴びて寝巻きに着替える。寝巻きといっても普段着として使える長袖のシャツとズボンだ。

二階の自分の部屋で机に向かい宿題に取りかかる。十五分ほどで終え、明日必要な教科書を鞆に詰めると、真鉤は一階の居間に戻ってソファに背を預けてテレビを観た。ドラマ、バラエティ、雑学番組。コメディアンのジョークに頬を緩めることもなく、一定時間ごとにチャンネルを切り替える。ニュース番組にかける時間が一番多かった。

まるで、情報を得るためだけにテレビを観ているようであった。

時刻が午後八時半を回った頃、真鉤は急に立ち上がった。リモコンでテレビの電源を切りかけて手が止まる。

慎重にリモコンを置き、真鉤は音を立てずに階段を上がり、勉強部屋の窓に寄った。カーテンの僅かな隙間から外を覗く。

屋敷の前を大柄な男が歩き過ぎるところだった。灰色のロングコートを着た背中が見えて、すぐに視界から消えた。角度的に顔は見えなかった。

リュオン、リュフュー、という奇妙な音が続いていた。風の音にも似ているが、呼吸音か。ゆっくりとした、深呼吸。時にそれは水を飲むような音に変わる。

暫くの間、真鉤はその場で凝固していた。目を細め、耳を澄ましている。

一旦遠ざかった深呼吸が、また近づいてくる。

真鉤は瞬きもせずに、窓の外を見据えていた。

カーテンの隙間を男の影が通った。ペットボトルらしきものを持つている。やはり顔は見えない。カーテンを開けば見えるだろう。

しかし真鉤は微動だにしなかった。男が近くにいる間は息さえ止めていた。

「おかしい。この辺だと思ったが」

男の呟きが聞こえた。陰鬱な声音だった。

奇妙な深呼吸を続けながら、男は通り過ぎていった。

真鉤が息を吐いたのはその二分後だった。

大館千蔵は古い廃屋の前で立ち止まった。木造で、瓦の抜けた屋根には青いビニールシートがかけてあるがそれも一部めくれている。壁が微妙に傾き、台風が来たら倒壊しそうな危うさを感じさせる。庭は草が生え放題で膝下が隠れてしまうほどだ。

口を大きく開けて深呼吸を続けながら、大館は独りで頷いた。ペツトボトルから一口飲み、草地に足を踏み入れる。足跡を探るように下を見ながら慎重に歩く。

「二人。いや、三人か。二人が中に入り、一人が……窓から覗いたのか」

大館は窓際の匂いを口から嗅いだ。

「島谷紀子がここに立っていた」

大館は背を丸めて窓から内部を見た。島谷がおそらくそうしたように。暗かったがうつ

すらすらと土間が見える。その向こうに畳の間があり壊れた家具が転がっていた。

やはり地面を見ながら壁を回り、入口から中へ入る。

土間には何も無い。だが大館は屈んで平らな土に顔を寄せた。ゆっくり息を吸う。一度、二度。

「埋めたな。しかしおかしい。血の匂いが二人分だ。島谷のとも違  
う」

闇の中、眠たげな目はどんな感情も映していない。

大館は周囲を見回した。一旦外へ出て裏手に回るとシャベルが立てかけてあった。大館はそれを手に戻る。握り部分の匂いを嗅ぎながら。

「古い匂いしかない」

大館はペットボトルを収めて土間を掘り始めた。作業に慣れてくると次第にペースが速

くなる。土がみるみる抉れていき、一メートル掘ったところで大館は手を止めた。



「死体も二つか。白崎高だな」

大館の息は乱れていなかった。

折り畳まれた制服の少年達。大館は彼らを掘り出すと、ジッポライターの炎で彼らを観察した。口で匂いを嗅ぎ、触りながら。

「やはり食べてもいない。血を吸った痕もない。殺しただけだ。…同じ包丁だな。こいつの血だった」

少年の額に開いた細い傷を見て大館は呟いた。

「二人を殺す現場を島谷は目撃した。逃げ帰った島谷を奴は追い、警察に通報しようとしたのを確認して殺した。島谷をすぐは殺さず口止めたのか。そして尾行した。何故わざわざそんな面倒なことをする。情けか。奴と島谷は顔見知りか」

状況を整理するためだろう、大館は独り言を続けた。

「足跡も体臭も残さない殺人鬼か。手間がかかりそうだ」

大館は穴に二人を戻し、シャベルで再び埋め始めた。

戻る

### 第三章 死は傍らに立つ

#### 第三章 死は傍らに立つ

—

島谷紀子の告別式には白崎高の校長と担任、それに二百名近い生徒が参加した。クラスメイトは全員だ。天海東司も来ていた。珍しくちゃんと袖のある制服で、窮屈そうに。

紀子の父親が挨拶で友人達の参加に礼を述べた。母親の方は嗚咽するばかりで殆ど言葉は出せなかった。ひどい死に方だったそうだから、相当ショックだったのだろうと藤村奈美は思う。

「出来るだけ早く犯人を捕まえることが紀子の供養になると思います。どうか皆さんも事件について何か知っていることがあったら協力して下さい」

紀子の父親はそれで挨拶を締めくくった。犯人は捕まらないだろうという天海の言葉を  
奈美は思い出した。何故天海はあんなことを言ったのだろう。犯人に捕まって欲しくないという訳でもないだろうに。

式の様子をマスコミが撮影していた。警察関係者も来ているようだった。参列者の中に犯人がいると思っっているのだろうか。

並んで座るクラスメイト達は涙ぐみ、啜り泣く女子も多かった。彼女の死が判明する前、机に花瓶を置いて笑っていた者達が今は神妙な顔で泣いている。この中に島谷紀子の友達と呼べる者は何人いることだろう。一人もいないのではないか。そう考えるとなんだか不憫になって、奈美は彼女のために少しだけ涙を流した。

僧侶の読経の間に参列者が順番に焼香していく。天海も流石に真面目な顔をしていた。

真鉤天の番が奈美より先だった。スムーズに焼香を済ませる彼も泣いてはいなかった。ただ、奈美は彼の目に痛みを見たような気がした。それは他のクラスメイトの自己陶醉に浸った悲しみとは違っていた。

最後まで、紀子の棺が開けられることはなかった。

斎場を出て貸切バスに戻っていく白崎高の生徒達を、大館千蔵が向かいのバス停にあるベンチで観察していた。距離は四十メートルほど、彼は欠伸でもするように口を大きく開けて深呼吸をしている。フヒュールと微かに音が鳴る。ベンチの下には空のペットボトルが三個転がっていた。マスコミのカメラは遺族と参列者を撮るのに夢中で大館に向くことはない。

大館の眠たげな視線に晒されながら藤村奈美がバスに乗った。天海東司がふと大館に目を留めたが、胡散臭そうに唇を歪めただけで列に続いた。真鉤天は無表情に通り過ぎた。

三白眼になった大館の瞳は彼らの姿を確認しても動かなかった。

バスが全て出発し、大館の薄い眉が、ゆっくりとひそめられてい

った。

「やはり駄目か」

ミネラルウォーターのペットボトルを片手に大館が立ち上がった時、斎場から二人の男が近づいてきた。一人は喪服でもう一人は地味なスーツを着ている。大館は小さく舌打ちした。

歩き去ろうとした大館の背に二人が声をかけた。

「ちょっと失礼ですが」

「何ですか」

大館は振り向いた。斎場を一瞥してマスコミが見ていないのを確認する。更に彼は数歩下がって曲がり角の陰に移動した。二人も同じだけ寄る。

「もしかしてあなたは大館さんではないですか。大館千蔵さん」

スーツの男が警察手帳を見せた。島谷紀子の母親から大館の外見的特徴は聞いていたの  
だろう。百九十センチ以上の長身でオールバック、今の季節に厚い  
ロングコートでは間違  
えようがない。

「これは職務質問ですか」

「ええ、そう解釈してもらって結構です。あなたは大館千蔵さんで  
すか」

「そうだったらどうします」

大館は陰鬱に聞き返す。

「ちょっと署までご同行願えますか。今回の殺人事件の容疑者とし  
てではありません。あ  
なたが勝手に刑事を名乗ったことは官名詐称と取られても仕方があ  
りませんがね。それよ  
りも、捜査のために話を聞かせて頂きたい」

「お断りします」

大館の口調は変わらなかった。刑事達の目つきが険しくなった。

「どうしてですか」

「あなた方には無理だからですよ。今回の犯人は警察の手には負えない。私は独自に犯人を探します」

「し、しかし、死体を発見して、捜査に協力してくれたじゃないか」

喪服の若い方が言う。大館は二人を冷たく見下ろしていた。

「単に私が調べたかっただけです。それでは失礼します」

「待て。なら官名詐称罪で逮捕させてもらうがそれでもいいか」

スーツの刑事の脅しにも大館は動じない。

「私に関わるなど聞いていないのですか。本庁に確認した方がいい。私は『マルキ』だ」



大館は背を向けた。その肩にスーツの刑事が手を伸ばす。

指先が触れる前に、素早く振り向いた大館の両腕が霞んだ。刑事達の体がくの字に折れ曲がって一瞬宙に浮く。刑事達の呼吸が止まった。

大館が腕を戻すと二人はアスファルトに崩れ落ちた。眼球が飛び出しそうなほど目を見開き、苦悶の表情で腹を押さえている。大館の拳は二人の鳩尾を捉えたのだ。

「手加減しましたから胃は破れていないと思います。では失礼」

大館は足早に去った。

刑事達は声を出すことも出来ず、自分の吐いた胃液に塗れて呻き続けた。

繁華街から離れた小さな喫茶店に異なる制服を着た二人の少年がいた。窓際のテーブルで向かい合わせに座る真鉤天と日暮静秋。客は少なくクラシックが控えめな音量で流れている。店の名前はトワイライト。

「秋と冬は好きだな。夜の時間が延びる」

夕焼けに染まる街を眺めて日暮静秋は呟いた。彼はクリームソーダのアイスクリームだけをスプーンでほじくり回している。

「君が張ってくれた結界が役に立った。もし見つかったらどうなっていたか、僕にも分からない」

真鉤天が言った。彼はついでに夕食にしまっつもりなのだろう、チキンドリアが目  
の前にあるがまだ殆ど手をつけてはいない。

「あの結界は意識を逸らすには役に立つが、相手がお前の家をはつきり目標にした時は無理だぞ。それにしても、今回はえらく弱気だな。いざとなったら始末すりゃあいいだろ」

「あれは人間ではなかった」

真鉤の言葉に、日暮は相手の顔を見直した。

「俺達もそつだ」

日暮の整った顔が皮肉な微笑を浮かべる。真鉤は生真面目な表情で続けた。

「殺せるかどうか、見極めがつかなかった。彼は深呼吸して、匂いを嗅いでいたようだ。多分、血の匂いを辿っていたのだと思う。僕は体臭と気配を完全に消せる」

「知ってるよ」

日暮は鼻から空気を吸ってみせた。

「彼女の死体を発見したのも彼だろう。もしかすると別の死体も見つかっているかも知れない。昨日の告別式でも外から観察していた」

「人間じゃないのに警察に協力してんのか」

「それは分からない。彼の意図が分からないから、君も気をつけた方がいい」

「ああ、とぼつちりを食わないようにするよ。俺は昼間は弱いしな」

日暮はアイスクリームを先に全部食べてしまった。真鉤もやつと本格的にドリアを食べ始める。

やがて、日暮が聞いた。

「なあ。お前、高校を卒業したらどうする」

短い沈黙の後、俯きがちに真鉤は答えた。

「まだ一年以上先のことだ」

「ああ、そうだな。だが、時間は必ず経つ。俺は社会に溶け込む自信はあるが、お前はど  
うだ」

「……。出来れば、今の身分を保っていられたなら、大学にも行っ  
ておきたい」

「人並みについて訳か。だが、その後はどうする。どうやって生きて  
くつもりだ」

「まだ分からない。外人部隊に入ろうかと思ったこともある。それ  
とも、マフィアの殺し  
屋になるかも知れない。なるべく、罪悪感を抱かなくて生きていけ  
るような、そんな仕事  
が、出来れば……」

真鉤の声は次第に低く頼りないものになっていった。

「冗談みたいだが本気らしいな。だが、殺しは殺しだぜ」

「分かっている。殺しは、殺しだ」

真鉤は頷いた。

ふと外の通りを見て日暮が言った。

「おい、可愛い娘がお前を見てるぞ。知り合いか」

向かいの歩道を通りかかった少女が立ち止まって喫茶店を凝視している。

「あつと、目を逸らしたな」

「クラスメイトだ。僕のことを気にしているらしい」

そちらを見もせず真鉤は答えた。少女は急ぎ足で過ぎていく。たまたま真鉤に気づいただけなのだろう。

「地味なふりして意外にもてるんだな。名前は」

「藤村奈美さん。必要以上に近づけないようにしている」

「なら俺が手を出してもいいか。命に別状はないんだからいいだろ」

日暮の唇の隙間から、常人より長い犬歯が覗いた。先端が鋭く尖っている。

「やめてくれ。彼女は……」

真鉤は途中で黙り込み、俯いたままチキンドリアを片づけていった。

三

喫茶店で別の高校の生徒と話している真鉤天の姿を見かけ、藤村

奈美はちよつと意外な気がした。校内には友人などいないようだったのに。

あのブレザーの制服は多分北坂高だろう。長身でハンサムだが、闇を背負っているような暗さが漂っている。

北坂高の少年が視線に気づいたようなので、奈美は慌てて喫茶店から目を離れた。真鉤を気にしているということを、本人に知られなくなかった。

今日は学校帰りに町で一番大きな本屋に寄ったところだった。それから大通りを外れたところにあるアクセサリーショップで星の形をした銀のキーリングを買った。携帯電話のストラップに繋げるつもりだ。この店はちよつとした穴場になっている。

夕飯の時間までには家に帰らないといけない。バス停へ向かう途中で奈美は真鉤の姿を認めたのだった。

どんな話をしていたのだろう。通り過ぎた後で奈美は考える。あまり楽しそうではなかった。相手に脅されているとか。いや彼に限ってそんなことはない



だろう。友人なのだとすれば、真鉤に相応しい友人であるような気がした。なんとなく。

目当てのバスが来た頃、陽も落ちて辺りは暗くなっていた。

バスには十人ほどの客がいた。空いていた最後部の席に座る。自宅近くまでの料金は確か二百六十円だった。

このバスを使うのは週に一度くらいだ。他のクラスメイトはカラオケや合コンやあまり公に出来ないことなどで遊んでいるようだが、奈美は自分でも真面目な方だと思う。

バスは決まった道を進んでいく。バスの運転手は何を考えながら黙々と運転しているのだろう。奈美はふとそんなことを思った。そういえば、同じ道を回ることが嫌になったと  
いってバスの運転手が勝手に道筋を外れた事件があった。人生は同じことの単調な繰り返しなのだろうか。奈美は自分の人生を思う。社会に出てどのように生きていくのか、未来の自分の姿がどうしても思い浮かばなかった。

島谷紀子のことも考える。クラスメイトに聞いた話だが、三年生

も二人行方不明になつて  
いるらしい。遊び好きな二人だから家族も何処かに泊まり歩いて  
いると思つていたとい  
う。もし彼らも殺されたのだとしたら、同じ犯人なのだろうか。こ  
の町には殺人鬼がいる  
のだろうか。

繁華街を離れると明かりは減つていき、所々に立つ街灯が夜の町  
をぼんやり照らす。こ  
のバスは寺のそばのバス停にも寄るのだが、その手前はカーブした  
坂道で左側がちょっと  
した崖になっている。大きなバスが道幅ぎりぎりを通るため、毎回  
奈美は落ちていきそう  
な不安を覚えるのだった。

だから奈美は窓から左側を見ないように前を向いていた。正面か  
らヘッドライトが近づ  
いてはすれ違つていく。もうすぐ坂を上り終える。

「うわっ」

いきなりバスの運転手が叫んだ。マイクの音声と肉声が混じつて  
聞こえた。ヘッドライ  
トが。前の席にいた中年女性の悲鳴。何。

凄い衝撃が来た。奈美の体が座席から浮いて前席の背もたれに叩きつけられた。痛い。

胸を打った。ガラスが砕け散る音。ギギイイ、という不気味な金属の軋み。

トラックだった。トラックと正面衝突したのだ。バスの運転手。血塗れ。トラックの運転手の姿も見えたような気がした。ハンドルに突っ伏している。

「落ちるっ」

男の乗客が叫んだ。まさか。若者が慌ててドアに駆け寄ろうとするが、大きくバスが揺れたためつんのめって金属のバーに頭をぶつけた。

まさか。崖から落ちる。そんな。

トラックに押され、バスの後部がガードレールを破ってはみ出したようだ。ゆらゆらと

不安定な感覚が奈美の背筋を凍らせる。落ちる。崖といっても高さは十メートルくらいの

筈だ。死ぬことはないかも。いや死ぬかも。後部が先になって落ち

そつだ。奈美は少しで  
も前に行こうと席を立つ。

その時、新たな衝撃が連続してバスを破滅へ追いやつた。前方からと側面から。トラックとバスにそれぞれ別の車が追突したのだろうか。ひどい駄目押しに神を恨む余裕もない。

奈美は飛ばされかけて座席にしがみつく。バスが揺れる。傾く。回る。天地が。

奈美は目を閉じて必死に背もたれの端を掴んでいた。

音と衝撃が何度か続き、頭が真っ白になった。

気を失っていたのはほんの数秒だったろう。いや、もしかして一分以上経ったかも知れない。痛み。頭がひどく痛む。体の節々も。特に腕の痛みが強い。左腕。力が入らない。

横倒しになったバスの中で、奈美は体を丸めて転がっていた。バスの内部が信じられないくらいにひしゃげ、ねじれている。変形した座席と側壁の間に奈美の体が挟まっている。

散乱したガラス片。非現実的な光景に圧倒されよりも痛みばかり気になっていた。腕は折れているかも知れない。

呻き声。奈美の目の前に若い男が倒れている。その首が曲がって肩にピツタリくっついていて。首の骨が折れている。死んでいる。忘れていた恐怖が数倍になって帰ってきた。

バスから出ないと。爆発するかも知れない。

呻き声は別の場所から聞こえている。バスの運転手。無意味に手が宙を掻いている。他の乗客は呻いている者もいれば死んだように動かない者もいた。

ここから抜け出さないと。誰か助けに来てくれないだろうか。追突もあつたので上の道路に必ず誰かいる筈だ。バスが横倒しになったせいで見える範囲に限られている。後ろの窓を見てゾツとした。

すぐ近くにタンクローリーがひっくり返っていた。トラックと思っていたがこれだった

らしい。タンクから中身が洩れている。引火すれば大爆発を起こすだろう。早く逃げないと。奈美は必死になってもがいたが椅子と壁の間から抜け出せない。挟まった腹部が痛む。

内臓破裂など起こしてないだろうか。

「助けてっ誰かっ」

奈美は声の限り叫んだ。上の道路に人影は見えない。崖の下は草が生えているだけの場所、近くに民家はない。

「誰かっお願いっ」

熱気を感じる。バスが燃えているようだ。タンクローリーから洩れたオイルに引火したら終わりだ。

「助けてっ」

何度も叫んだ。声はバスの外に洩れている筈だが、外に人がいるかどうかは分からない。

喉が痛む。奈美は生まれて初めて死を実感した。

割れたフロントガラスの向こう。闇の中で影が動いた。人影。近づいてくる。助かるかも。

「助けて。ここです」

声をかけた後で奈美は愕然とした。フロントガラスから覗き込む男の顔が、内部からの灯りによってはっきり見えた。無表情にこちらを観察しているのは、真鉤天だったのだ。

どうしてここに。たまたま通りかかっただけなのか。どういう偶然だろう。

余計なことを考える暇はなかった。奈美はもう一度真鉤に言った。

「助けて」

この状況で、真鉤はやはり無表情のままだった。急に奈美は強い

不安に襲われた。彼が  
このまま彼女を見捨てて去ってしまいそうな気がしたのだ。

と、真鉤の姿が消えた。やっぱり。見捨てられた。でも、まさか。

「嫌っ助けて真鉤君っ」

奈美は叫んだ。涙が滲み出してくる。

上の方からゴリツと音がした。バスの上に真鉤がいる。バスは右側面が上になっている。彼は非常用のドアを開けようとしているようだ。奈美を見捨てた訳ではなかったのだ。

しかしドアは枠ごと変形している。開けるのは無理かもと奈美が思った時あっさりドアが開いた。というより丸ごと外れた。真鉤は白い手袋をしている。いや軍手だ。

奈美が見ている前で、真鉤は非常用出口の外枠に触れた。嫌な軋み音をさせながら金属の枠が広がっていく。信じられない力だった。

充分な広さになった出口を抜けて真鉤天が中に入ってきた。音を



立てず奈美のそばに着地する。

「体が、挟まって……」

奈美が言っていると真鉤は変形した座席を掴んだ。それほど力を込めたようには見えなかったが、ギキユウ、と逆向きに曲がったかと思うと座席が土台から取れた。端の鉄板は外れたのではなくちぎれていた。奈美は解放された。

「掴まって」

手を差し伸べた真鉤の口調はいつも学校で聞くのと同じだった。どうしてこんなに落ち着いていられるのだろう。

真鉤の手を握ると、彼は奈美の体を軽々と抱き上げてそのまま非常用出口から抜け出した。バスの後部で炎が揺らめくのが見えた。

「爆発するかも。でも他の人がまだ……」

真鉤は黙ってバスを飛び下り、姿勢を低くして走り出した。奈美を抱えたままで呆れるほど敏捷な動きだった。

三十メートルほど離れた大木の陰に隠れた瞬間、凄まじい爆発が辺りを揺るがした。炎の舌が二人の横を過ぎていき、爆風で木がたわむ。奈美は鼓膜が破れたかと思った。耳がジンジンして聞こえが悪い。

一瞬遅ければ、爆発に巻き込まれて死んでいただろう。真鉤に下ろしてもらい、奈美はバスとタンクローリーを振り返った。

バスは内部が見えないほど激しい炎に包まれていた。草も一部燃えている。吹き飛ばされた金属の塊が落ちてきた。バスの中にいた人達は即死だったろう。助けられなかった。でもどうしようもなかった。真鉤が来てくれなかったら奈美も彼らと同じように燃えていただろう。

真鉤は、眉間に皺を寄せ険しい目つきで彼女を見つめていた。彼のこんな表情は珍しかった。

「あの……ありがとう」

奈美が礼を言つと、真鉤は緊張した声で告げた。脱出の時は平然としていたのに。

「僕が助けたことは誰にも言わないでくれ」

「え。どうして」

真鉤は理由を説明しなかった。

「皆には自力でなんとか脱出したと言ってくれ。細かいことを聞か  
れたら、夢中だったの  
で覚えてないと言っんだ」

「あの、どうして」

「そうでないと、僕が困る。誰に聞かれても絶対に僕のことと言わ  
ないで欲しい。約束し  
てくれ」

真鉤の目は真剣で、冷たかった。そして苦しげだった。

危機は去った筈なのに、急にまた不安が強くなっていた。殺されるかも知れない。彼は私を助けてくれたけれど、その彼に殺されるかも知れない。

選択肢は決まっていた。奈美は真鉤の指示に従うことにした。命を助けてもらったのだ

から、彼のために出来るだけのことをしなければならなかった。

「分かった。誰にも言わない。約束する」

奈美の言葉に真鉤は頷いた。険しさが少し緩んだ。

「ありがとう。じきに誰か来るだろう。救急車を呼んでもらうといい」

真鉤は周囲を見回した。誰もいないことを確認するかのようだった。彼の制服の右脇腹から、十センチほどの鉄片が生えていることに奈美は気づいた。さっきの爆発で飛んできて、木で隠しきれなかった部分に突き刺さったのだ。

「真鉤君、それ……」

真鉤も自分の脇腹を見て言った。

「心配ない。掠り傷だ」

真鉤は軍手を填めた右手で鉄片を摘まみ、あっさり引き抜いた。ビヂビヂと肉の裂ける

音がして、ねじくれた鉄板が脇腹から抜けた。かなり深く刺さっていたのだろう、血に塗れた部分も十センチくらいあった。

掠り傷どころではない。絶句している奈美に真鉤はもう一度言った。

「心配ない」

彼はそれを放り捨てようとしてやめ、厚い鉄板を紙屑のように丸めてポケットに突っ込

んだ。脇腹からは血が流れているが、思ったほどひどくはないようだ。彼は素早くその場

を去った。ビデオの早送りを見ているような、不自然なスピードだった。

何なの、一体。

奈美は立っていらねずその場に腰を下ろした。学生鞆がバスの中だったことに気づく。完璧に燃えてしまっただろう。体の痛みも思い出した。左腕がズキズキと疼く。

助けが来るまでの間、奈美は燃え盛る車輛をただぼんやりと見つめていた。

#### 四

藤村奈美は総合病院の救急外来に運ばれた。レントゲンの結果、左尺骨亀裂骨折と言われた。完全に折れてはいないがヒビが入っているということらしい。ギプスを巻かれ、何週間かは取れないことになった。三角巾で吊っていると首が疲れて

くる。内臓も頭の方も大丈夫だった。通学には問題なさそうだし不便だが体育以外は授業も受けられるだろう。

ただし、教科書もノートも鞆ごと燃えてしまった。教科書は買い直さないといけないし、ノートは誰かに借りないといけない。借りるべき相手は真鉤天になるだろうと思い、奈美は不思議な気がした。

病院まで両親が駆けつけてきた。心配と安堵で母は取り乱して泣いていた。生きていて良かったと父は何度も頷いた。

その後で警察も来た。乗客も運転手も皆助からなかったらしい。炎上するバスを見たので奈美も分かっている。死者は十一人になるという。バスに追突した自動車のドライバーは頭を打ったが意識は戻ったという。タンクローリーに追突した方は軽傷だったとも。事故の原因はまだ調査中だが、タンクローリー側の居眠り運転か酔っ払い運転だろうということだった。

奈美は転落の後、自力で必死に這って脱出したと説明した。細かいことは覚えていないとも。真鉤のことは言わなかった。ドア枠の変形は、元々バス全体が歪んでいたし爆発し

てグチャグチャになったから疑われずに済むだろう。警察は納得して去った。

医者は念のため何日か入院しておくことを勧めた。両親も同意した。それから、血液検査で少し異常があるから追加検査をするとも。怪我をしたばかりなので異常は当然かも知れないが、念のためだ、と医者は説明した。奈美は『病院で検査を受ける』というあの紙きれのことを思い出した。あれを書いたのは誰だったのだろう。真鉤の顔が浮かぶ。

学校を休むのは金曜日の一日だけで済みそうだ。奈美は病室でテレビを観て過ごした。バスとタンクローリーの衝突転落事故のニュースも流れていた。黒焦げの骨組みになったバスや、燃えて丸裸になった草地が映っていた。新聞でも事故のことは出ていて、左腕骨折の生存者として奈美の名前も載っていた。特に真鉤の存在は触れられておらず、奈美はちよっと安心した。わざわざ彼の心配をする必要もないのだろうけれど。

病室には担任やクラスメイトが何人か見舞いに来た。それほど仲が良い訳でもない女子が目を輝かせて事故の様子を聞いてきて奈美をうんざりさせた。担任は果物を持ってきて



くれた。後で来た母がリンゴを剥いてくれた。

土曜の午後には天海東司が見舞いに来てくれた。「食いな」と言  
って持ってきたのはひ

よこ饅頭で、天海のイメージとかけ離れていたので奈美は驚いた。

「意外だったかい」

そう言くと天海は気持ち良い笑顔を見せ、奈美も笑った。早速箱  
を開けて奈美に渡しな

がら天海は自分でも食べ始める。

「良く助かったもんだな」

奈美の話聞いて天海は感心していた。勿論奈美は真鉤のことは  
言わない。

「まあ、命拾いしたばっかなんだからゆっくり休みなよ」

「来週の月曜から学校には行くつもりなの。勉強についていけなく  
なると困るし」

「俺なんてハナからついていってねえよ。成績なんか悪くたって人間は生きていけるのさ。奈美ちゃん、顔色悪いぜ。無理しない方がいい」

天海は本気で気遣ってくれているようだった。いつの間にか彼とは親しくなってしまう  
たようで、奈美はちよつと可笑しかった。

いなくなった二人の三年生のことも話題に上った。本格的に搜索願が出されたらしい。

「このところ学校も慌ただしいもんだぜ」

天海は言った。行方不明の二人が、以前裏門で真鉤に絡んでいた者達だったことを奈美は知った。

ひよこ饅頭は十個あったが、天海は帰るまでに七個を食べてしまっていた。

日曜日のうちに退院した。結局真鉤は見舞いに来なかった。来る筈がないと分かっていたが、奈美は心の何処かで期待していたのだろう。

真鉤天の人間離れた力と、彼があの時見せた冷たい翳りのことが、ずっと気になっていた。

彼は何者なのか。あいつにはあまり近づくなと天海は言った。詮索が良いことではないと奈美にも分かっている。

でも奈美は確かめたかった。きっと今の自分なら、それが許される筈だ。

月曜日に左腕を吊って肩掛けバッグで登校した奈美を、クラスメイトは温かく迎えてくれた。多くはやっぱり事故の様子を聞きたがった。黒焦げの死体が見えたかどうかなど。

授業中は隣の席の女子が机をくつつけて教科書を見せてくれた。注文した教科書が届くまで一週間くらいかかるらしい。片手は不便だがノートを取れないこともない。体育の授業

は見学となった。体育祭が近いけれど、この分では参加出来ないだ

ろう。

真鉤天は特別いつもと変わりなく、休み時間も席を離れずにぼんやり過ごしていた。鉄

片が刺さった脇腹をかばう様子もない。無表情だがあの夜に見た冷たさは感じない。奈美

に目を向けることもなかった。でも彼だって奈美が気にならない筈はないだろう。

奈美は口実を用意していた。

昼休み、パンを食べている真鉤に近づいて奈美は言った。

「あの、真鉤君。金曜日の分のノート、見せてくれるかな。私、休んでたから」

「いいですよ」

真鉤は誰に対してもするように、穏やかに頷いた。瞳は奈美を見つめているが何の感情も映さない。

「でも日本史と数学ⅠⅡは今日なかったからノートも持ってきてま

せん。僕の家と藤村さんの家は割と近くですよ。帰りに寄って渡しますよ」

「そう。わざわざごめんね」

奈美はひとまず安心していいのか、自分がパンドラの箱を開けてしまったのか分からなかった。

放課後になった。奈美と真鉤が裏門を出ようとすると天海の声がかかった。

「おや、お二人さん、今日は揃ってお帰りかい」

冷やかし半分の口調に奈美が振り返ると、天海は悪戯っぽくウインクしてみせる。

「真鉤君からノートを貸してもらったの。天海君、お見舞いの時はありがとう」

「なあに、俺が入院した時も見舞い頼むぜ。おい真鉤、奈美ちゃんと歩いてるんだからもうちょっと嬉しそうな顔をしろよ」

天海に言われて真鉤はあのはにかんだような申し訳ないような微笑を見せた。奈美は何故だかホツとした。ただ、天海が去り際に真鉤に向けた視線はえらく鋭いものだった。何かを念押しするような。

並んで歩き、他の生徒の姿が見えなくなった頃に奈美は真鉤に話しかけようとした。

「あの……あ、ありがと。あの時……」

「話は僕の家に着いてからにしましょう」

奈美が言い終える前に真鉤が告げた。冷たい声音だった。それで奈美は黙った。

やめておこうか。やっぱりノートは要らないと言って別れてしまえば深みに嵌まらずに済む。だが、奈美は込み上げる不安を押さえつけた。以前から彼の驕りの理由を知りたかった。そして命を助けられた。だから、どんな結果になろうとも、踏み込んでみようと思っ

った。

真鉤の屋敷の前に着いた。不思議な形をした、ちょっと古ぼけた建物。郵便受けから夕刊を抜き取って真鉤は言った。

「ここで待っていればノートを持ってきますけど、中で待ちますか」

問いかけの意味が分かった。

奈美は踏み込んだ。

「中で待ってもいいのならそうするけど」

真鉤は頷いた。玄関のドアは二ヶ所に鍵が掛かっており、真鉤はそれを開けて奈美を居間に案内した。

「どうぞ。そこに座っていて」

ソファは二人掛けと一人掛けがあり、真鉤は二人掛けの方を指差した。

奈美がそこに座ると、真鉤は屋内をウロウロし始めた。何をしているのかと思っただが、  
どうやら全ての部屋を点検しているようだった。誰かが忍び込んでいないか疑っているの  
だろうか。

足音を立てないので何処にいるのか分からなかったが、程なくして真鉤は戻ってきた。

「どうぞ。日本史と数学ⅠⅠ、それから木曜に授業のあったものも君のノートは燃えてしまったでしょうから」

真鉤は数冊のノートを差し出した。気が回る人だった。

「ありがとう。コピーして明日返すから」

片手で鞆を開けてノートを収める。

「コーヒーでも飲みますか」

「要らない。それで……」



真鉤は一人掛けのソファに腰を下ろし、奈美を見据えた。

「あの……助けてくれて、ありがとう。脇腹の傷は大丈夫なの」

「ええ、もう治りました。こちらこそ礼を言います。僕のことには誰にも喋らなかつたよう  
ですな」

真鉤はニコリともせず言った。

「ええ。黙ってたけど。でも、どうしてそれが分かるの」

「僕のところに警察やマスコミが来ていないからね。それに、木曜の夜はずっと君を観察  
していた」

「え。それって……でも、どうやって」

奈美を助けた後、真鉤はすぐにあの場を去ったと思っていたが、隠れて彼女を見張っていたということなのか。

「救急車が来るのも見た。救急車がどの病院に向かうかも聞いた。君が治療を受けている間、僕は壁の向こうで様子を窺っていた。君が寝つくまで、僕はベッドの下にいた」

真鉤は淡々と異常な事実を告げた。奈美は啞然としていた。そんな馬鹿な。信じられない。病室で、私のベッドの下に。気持ち悪い。気づかなかった。医者も看護婦も、誰も気づかなかったのだろうか。

「薄気味悪いだろうと思うが、僕は自分の安全のために実行した」

「どうして、そこまでして。皆に知られたら困るの」

「理由を聞きたいですか」

口調は丁寧語に戻ったが、ピリピリと緊張感が高まるのが分かった。彼も迷っている。でも言い出そうとしている。抱えていたものを吐き出して、楽になるうとしてくるかのよう。

奈美は、そんな真鉤を見ながら、黙って頷いた。

真鉤天は暫くの間、下を向いて動かなかった。膝の上に置いた手が時折ビクリと震えた。その震えは次第に大きくなり、全身に広がっていく。歯を食い縛っているようで顎の筋肉が盛り上がった。

やがて、顔を上げた真鉤は冷静な表情に戻っていた。震えが止まり、彼はいつもの声音で告げた。

「僕は特異体質だ。もしかすると人間じゃないかも知れない」

唐突な内容だった。面食らいながらも奈美は問う。

「特異体質って、どんな……」

「一つは筋力だ。僕は中学の頃、十トントラックを片手で押して横転させたことがある」

それが本当だとしたら凄い力だった。彼にとってバスのドア枠など曲げるのは造作もなかったろう。

「それに、人に気づかれずに尾行したり、壁や天井伝いに部屋に忍び込むことが出来る。怪我の治りも早い。君のその腕、治るまでに数週間はかかるだろうけど、僕だったら数分以内に元通りになる」

真鉤は本気で言っているらしかった。彼の主張をどう受け止めるべきか奈美が迷っていると、真鉤は台所に行つて包丁を持ってきた。

腰を浮かしかけた奈美の前で、真鉤は左手を開いて掌を奈美の方に向けた。包丁の先を手の甲につける。

ブゾリ、と、掌の中心から血塗れの切っ先が顔を出した。それでも真鉤は包丁を止めず、刃の大部分が掌側に抜けた。彼は眉一つ動かさなかった。

奈美が凍りついていると、真鉤は包丁を引き抜いた。その際に新たに肉が切れて傷口が広がった。出血は意外に少なく、流れ出た血の雫は手首までで止まった。

真鉤は掌の傷を奈美に向けたままにしていた。奈美は目を背けることが出来なかった。  
パツクリと開いた傷口が少しずつ閉じていく。自然な筋肉の動きだろつか、いや、違う。

傷をなぞる血液を、真鉤はティッシュペーパーで拭いた。傷口は薄い線としか残っていない。  
なかつた。

真鉤は何度か手を握ったり開いたりしてみせた。傷は開かず出血も既がない。

改めて差し出した掌には、傷は全く残っていないなかつた。

非日常的なものを見た不安感と興奮が、奈美を饒舌にさせた。

「す、凄い。真鉤君って不死身なの。スーパーマンみたいな」

「そんないいものじゃない」

真鉤は苦い笑みを見せた。

「人に知られたら困るっていうのはそのためなの。政府に捕まって  
秘密研究所で実験材料  
にされたり」

「そうじゃない。いや、それも少しはあるけれど、一番の理由は別  
にある」

今度は真鉤は笑わなかった。奈美の瞳を覗き込むように、瞬きも  
せず見据えながら、彼  
は言った。

「島谷紀子さんを殺したのは僕だ」

え。どういうこと。意味が分からない。奈美はそう言おうとして  
口が動かなかった。興  
奮が一気に冷えた。

殺した。告別式にも出て焼香もしていたのに。本当に殺したの。  
クラスメイトを。どう  
して。

「ど……ど……」

ローテーブルに置かれた包丁に奈美は目をやった。まだ血がついている。奈美の視線を  
追い、しかし包丁には触れずに真鉤は言った。

「島谷さんは警察に僕のことを通報しようとした。だから殺した。何故そうなったかとい  
うと、僕が上級生二人を殺すところを彼女が見たからだ。誰にも言わない約束で解放した。僕は尾行し、彼女が自分の部屋で110番しようとしたのを確認して殺した」

上級生二人とは、下校時真鉤に絡んでいた、行方不明になっていたあの二人のことだろ  
う。真鉤が殺したのだ。

「わ、私も……殺す、の」

奈美は少しでも真鉤から離れようとしたが、腰が抜けてしまった  
ように全く力が入らな  
い。体が勝手に震え始めた。

真鉤は首を振った。

「君は殺さない。誰かに喋ったりしない限り。それと、さっき天海君が声をかけてきたの」

は、君のことを心配したのだと思う」

「で、でも……どうして……どうして、殺すの」

真鉤の顔は滅多に表情を変えない。ただその瞳だけが、救いを求めるように奈美を見つめていた。

「分からない。そういう体質なんだ。定期的に、大体二週間に一度くらい、人を殺さないとやっていけないんだ」

「そんな、そんな体質って、あるの」

「信じられないだろうし、僕も信じたくなかった。でも現実にそう  
だ。一人殺しさえすれば落ち着く。でもまた日が経つと苦しくなってくる。我慢していた  
こともあるが、限界を  
超えると頭が真っ白になって、手当たり次第に殺してしまう。だから、僕は、自分でコントロール出来るように、相手と状況を選んで、やってきた。これまでに殺した数は、三百  
人を超えると思う」



三百人。物凄い数だ。この町は行方不明者が多いと聞いたことがある。でも三百人も殺してはならないのは変ではないか。

奈美の疑問を察したように真鉤は続けた。

「この町に引越してきたのは小学三年の時だ。前の町で騒ぎになったから、父が配慮したんだ。それから、僕は出来るだけ死体を隠したり処理するようにした。父が処理を手伝ってくれたこともある。学校ではトラブルを起こさないように気をつけていた。上級生二人を殺したのは学校を出た後も向こうが絡んできたからだ。時期が迫っていたから丁度いいと思ったけれど軽率だった。島谷さんがついてきていたことに気づかず、結局彼女も殺すことになってしまった。……僕の能力は、人を殺すためにあるみたいだ。そういう生き物に、生まれついてしまったんだ」

「そんな……」

殺人は犯罪だ。彼は体質だと言っけれど、それでも殺人なのだ。体質だから許されるっ

てことにはならない筈だ。人を殺さなくても済むような、何か方法はある筈ではないのか。

「おそらく君は、心の中で僕を非難しているだろう。確かに、悪いことだとは分かっている。でも、どうしようもないんだ。代わりに犬や猫を殺したこともある。半殺しで済ませようとしたこともある。でも、それでは駄目だった。僕は、人を、殺さないで、駄目なんだ」

真鉤は感情を表に出さないように努力しているようにも見えた。そんな態度が逆にリアリティを感じさせた。

「聞いた話ではこの世には人食い鬼も実在するらしい。でも僕は人を食べたいとは思わない。人を殺したくなるだけだ。親は普通だったのに、僕だけこうなった。突然変異かも知れない」

「あの……警察に自首とか、考えたことは」

「未成年だから死刑にならないとか、そんなまともな対応はあり得ない。闇に葬られるか、モルモットにされるだけだ」

それで真鉤は黙り込んだ。奈美は息苦しさを感じながらも、彼が次の言葉を吐き出すのを待った。彼の本質をもっと確かめておきたかった。

真鉤は、また、喋り出した。

「僕が最初に人を殺したのは三才の時だ。細かいことは覚えていない。ただ、僕は血塗れの果物ナイフを持って、母のそばに立っていた。母の首が大きく裂けて、血がカーペットに染みていた。帰ってきた父がそれを見つけて、怖い顔をして僕の手を洗った。警察は強盗殺人だと判断したようだ」

彼は淡々と、母親殺しを告白しているのだった。

「……お父さんは、知ってるんだ。真鉤君のことを、どう思ってるの」

「愛してくれていたと思う。何度も僕を守ってくれた。同時に憎んでもいた。心中するつもりだったのだろう、首を絞められたり、包丁で刺されたりしたこともある。でも僕は死ななかつた。最後は斧で首を切り落とされた」

真鉤は指で自分の首を横になぞってみせた。傷痕など何も無い。

「それって……でも、真鉤君は生きてる」

「放っておいてもちぎれた体が引き寄せ合っみたいだ。父を殺したのは小学五年の時だ」

それはどんな人生なのだろう。両親を殺し、彼はここに独りで住んでいる。奈美はぎこちなく、他のことを尋ねた。

「生活費はどうしてるの」

「親の遺産がある。学校を卒業するくらいまでは食べていけると思  
う」

「あの……」

奈美は、次第に強まっていた疑問を口に出すことにした。

「あの、なんで……その、なんで私に……そこまで、話すの」

真鉤はちょっと驚いたようだった。瞬きを何度かして、彼は言った。

「分からない。多分、誰かに知って欲しかったんだと思う。理解してもらえとは思えないけれど、一般の人に僕のことを聞いて欲しかった。そうでないと、僕がこの世に存在していないような気がしたんだ。君は僕のことを誰にも言わなかったし、信用出来ると思っただから」

「あの、私が真鉤君のこと喋ってたら、やっぱり、殺してたの」

「……。僕には、君を殺す権利がない」

「どづいう意味」

真鉤は説明しなかった。奈美は急に、下駄箱のメッセージのことを思い出した。

「先週、私の下駄箱に紙きれが入ってて。病院で検査してもらえって書いてた。あれ、真

鉤君じゃないの」

やはり真鉤は答えなかった。

「医者は追加検査すると言っていたね。結果は出ましたか」

彼が医者を知っているのはその場に潜んでいたのだから当然だ。

「結果は明日、母さんと聞きに行く予定だけど……。もしかして、私も特異体質とか」

「医者にすっかり話を聞いた方がいい。……。それから今後、もしかすると僕のことについて尋問されることがあるかも知れない。身の危険を感じたら、隠さず喋ってしまったって構わない。その時は僕に脅されていたと言えればいい。監視されていたから誰にも言えなかった」と

「え、でも……通報されなくなかったから島谷さんを、殺したんでしょ。なのに、私が喋ってもいいの。どうして」

「状況が変わってきた。警察以外で僕を捜している者がいるようだ。こいつも人間じゃない。多分、僕を捕まえるためなら拷問でも何でもやるだろう。だから、危ないと思ったら喋ってもいい。それに……」

真鉤は最後まで無表情に続けた。

「自分を守るために島谷さんを、クラスメイトを殺したというのに、僕は特別何も感じなかったんだ。そんな自分にちょっと、嫌気が差してきた。君が喋るなら、それも運命かも知れない。簡単に捕まるつもりはないけどね。あ、そうだ、ノートを返すのは急がなくていいから」

真鉤は立ち上がった。話は終わったということだろう。奈美はまだ頭の中がまとまっておらず、何か大事なことを聞き損ねているような気がした。と、一つ思い出した。

「天海君は、真鉤君のこと知ってるの。つまり、その……」

人を殺しているということ。同じ学校の生徒を殺したというこ

とを。

「感づいていると思う。彼は鋭い感覚を持っている。でも彼は頭がいいから確かめたりしない。だから僕も彼には何もしない」

それで話は終わった。奈美はノートの礼だけ言って、真鉤邸を出た。

詰め込まれた情報が混乱していた。クラスメイトが不死身の殺人鬼で、三百人以上殺して、同じクラスメイトや上級生も殺して、天海もそれを薄々察して、奈美を心配して、真鉤は奈美を殺す権利がないという。全てが冗談なのではないかという気もする。でも、彼が包丁で刺し貫いた手は、あつという間に治ってしまった。あれは手品とかではなかった。

何が何だか分からない。でもそれを誰にも相談出来ない。

確かなのは、彼も苦しんでいるということだ。だから奈美に打ち明けたのだ。



奈美はひどい重荷を背負い込んだような気分になった。

## 五

天海東司は校舎の屋上で黙々と腕立て伏せをこなしていた。千回までやったら休憩して

ワンカップを開けるつもりだった。鍛錬には褒美も必要だ。

上半身はシャツ一枚だ。汗を掻いたら柔道部か空手部のシャワー室を使わせてもらおうとにしている。部に入らないのは群れるのが嫌いだからだ。わざわざ学校でトレーニングをするのは家が嫌いだからだ。

下に通じる鉄の扉が開いて、女子生徒が姿を見せた。同級生だと思いが名前は知らない。天海は好みの娘しか覚えないうようにしている。

彼女を横目にして腕立てを続ける天海に、女子生徒は声をかけた。

「天海君、あの……」

「どうした」

八百三十六回で天海は腕立てを中断した。残りは百六十四回だが回数を覚えていられるかどうか。

「校門のところで変な男が学校覗いてるの。なんか、朝からずっといたみたいで、キョウウコの話だとずっと変な深呼吸しながら学校の周りウロウロしてたって」

キョウウコというのが誰かは知らないが、天海もその辺は突っ込まない。

「ふうん。女子高生の発散する若い空気を堪能してるんだろ」

「もう、天海君ったら」

彼女は下品な声で笑った。

「それで気味が悪いし、大男だしちょっと怖いから、天海君なら對抗出来るかなって」

「よし分かった任せろ。見てきてやろう。ヤバかったら逃げるけどな」

などと言いながら逃げるつもりはなかった。天海はニヤリと笑ってみせ、半袖に切った上着を着てワンカップをポケットに押し込んだ。胸のボタンは填めない。

「どっちの門だ」

「今は正門にいる筈」

面白そうに女子生徒はついてくる。

天海は校内ではトラブルシューター的な役割になっており、それを自認してもいた。面

倒な役割を引き受けることは彼の誇りであり、単なる暇潰しでもあ

る。

階段を下りて校舎を出る。グラウンドではサッカー部や野球部が練習をやっていた。チムプレイや見せかけの純真さなど天海東司には無縁のものだ。

正門を抜けて見回すと、右手の曲がり角に大柄な男が立っていた。天海は素早く全身を観察して品定めを行う。

身長は百九十センチ台後半、体重は百二十キロ前後というところか。肥満ではなくみっしりと筋肉がついている感じた。まだそんな寒い季節でもないのに分厚いロングコートを着ている。本人は地味なつもりかも知れないが目立ちまくりだ。左手にミネラルウォーターのペットボトルを持っている。髪はオールバックで、M字型の額は後退しかかっている。年齢は三十代後半から四十才前後というところか。えらく血色の悪い顔で、天海はゾンビを連想した。

薄い眉の下で、死んだ魚のような目が天海を見つめていた。

この不気味な男に天海は見覚えがあった。島谷紀子の告別式の時、バス停にいた男だ。

常人とは違う気配を天海は敏感に感じ取っていた。

こいつは何者だ。嫌な予感を覚えながらも天海は自分の役割を果たすことにした。

「おい、そこのおっさん。うちの学校になんか用かい」

言いながらコートの男に近寄っていく。男はその場を動かさずペットボトルからトプンと一口飲んだ。女子生徒は正門のそばで見守っている。

身長百八十六センチの天海を眠たげに見下ろして、男は歯切れの悪い声で応じた。

「別に用はない。君はここの番長か」

古臭い表現に天海は吹き出してみせたが、体は固く緊張していた。この男は強い。いざ喧嘩になったら到底叶わないだろう。武器を使っても無理だ。

天海がそんな感じを抱く相手はこれまで二人しかいなかった。一人が真鉤天で、もう一人は名前は知らないが北坂高の男前。どちらも近づくと危険だと分かっていた。目の前

のこのコートの男もそうだ。それでも天海は慎重に危険域を探りながら会話を続けた。

「今時番長なんてのはいねえよ。だが用がないってのは嘘だろ。葬儀場でもあんたを見たぜ。何を嗅ぎ回ってんのか知らねえが、うちの生徒様が怖がってるんでな。どっか消えちまってくれねえか」

その時、コートの男は口を大きく開けていた。顎の先が胸につきそうなくらいに。赤い口腔に歯が一本も見えない。そんな異様な口を天海に近づけて深く息を吸う。リュオン、という空気の唸り。こいつはどんな気管を持っているのか。

「おい、気持ち悪いな。やめろよ」

天海が手で払いのけようとすると男はゆらりとそれを躲す。リュフー、と息を吐き終わって男は言った。

「やはり違うか。進展がないから別の件を優先するが、また近いうちに帰ってくるつもりだ」

もしかして、匂いを嗅いでいたのか。

男の無表情は真鉤天のそれとは違い、偽物の皮膚をかぶったようにも見えた。出来の悪いホラー映画の特殊メイクみたいに。

「そりゃお疲れさん。二度と来なくていいぞ」

男は黙って背を向けた。ペットボトルの水を飲みながらのっそりと歩き去っていく男を、天海は苦々しい思いで見送った。

振り返ると、正門である女生徒が笑顔で親指を立てグッドジョブのジェスチャーをした。コートの男との会話は聞こえていなかったようだ。

やれやれ。

天海東司は首をかしげ肩を竦めてみせた。

その夜、大館千蔵は列車の到着を待ちながら駅の構内で蕎麦を啜っていた。顎の動きからすると、噛まずにそのまま飲み込んでいるようだ。

片手に持った夕刊には福岡で発見された変死体の記事が載っていた。二人の若い男が今朝、紫色に膨れた死体となって見つかったという。昨日まで生きていたことは確認されている。それぞれ首と腕に噛み傷があったが、どの動物によるものかは調査中という。

「どうせ調査結果は報道されないだろう」

大館は陰鬱な声で呟いた。蕎麦は汁まで全て飲んだ。自動販売機でミネラルウォーターを二つ買う。



やがて博多行きの新幹線が到着した。大館は右手にペットボトルを、左手に大型トランクを持って乗り込んだ。

戻る

## 第4章 宿命

### 第四章 宿命

一

高校生にもなつて母親に付き添われることに恥ずかしさを感じながら、藤村奈美は整形

外科ではなく内科の外来を訪れた。

入院中に一度だけ会ったその内科医は、まず腕の痛み具合を尋ねた。もう疼かないと奈

美が答えると血液検査の説明に移った。白血球が普通の人より多いが今のところは心配な

いし病気という訳でもない。ただ、念のため月に一度くらいは検査に来て欲しい、という

ことだった。真鉤天の言葉を思い出し、奈美はえらく拍子抜けした。しかし、奈美は先に診察室を出され、母親だけが残された。母が

出てくるまで十分近く

かかり、医者が母に何を話していたのか奈美は気になった。

「先生何か言つてた」

尋ねると、母は笑顔で答えた。

「次の診察日を決めてただけよ。それから元々白血球が多い人もいるそうだからあまり心配は要らないって」

無理をしているような笑顔だと奈美は思った。

隠し事をしている。月に一度の検査つて、良く考えてみれば面倒だし、頻繁な検査が必

要なほどの問題があるのだ。でも母に問い詰める勇氣はなかった。本当の病名を知るのが

怖いというよりも、母を傷つけるような気がして。

不治の病ということを知って奈美が悲しめば、母はそんな奈美を慰められないことに傷つくだろうから。

いや、勝手に妄想を進めていることを自覚して奈美は苦笑する。

不治の病なんて、薄幸の少女を気取るみたいだ。

母の運転する車で高校まで送られる間、大した会話はしなかった。授業には四時間目からの参加となった。隣の席の子に教科書を見せてもらった。

昼休みになつてすぐ、奈美は借りていたノートを真鉤に返した。話をしたい奈美の気持ちをを感じ取っただろうが、真鉤は余計なことは言わなかった。奈美にあれだけのことを告白しておいて、彼の日常はいつもと変わりはない。奈美はちよつと憎らしくなった。

真鉤天。三百人以上を殺したという、不死身の殺人鬼。

真鉤にそれほど恐怖を感じていない自分が意外でもあった。殺人鬼だと頭では分かっていても、穏やかな物腰とのギャップがあつて実感出来ないのかも知れない。いや、内心は彼が殺人鬼だと認めたくないのだろうか。実際に彼が人を殺すところを目の当たりにしたらそれも変わるのだろう。

放課後になり、荷物をまとめて下校する真鉤の横に、奈美は黙って並んだ。横目で一瞥

ただだけで真鉤は何も言わない。クラスメイトが怪訝な顔で見ている。藤村奈美と真鉤天

という珍しい組み合わせだ。奈美はノートがどうか言い訳せず、微笑して彼らにさよな

らを告げた。真鉤もいつもの丁寧な口調で挨拶する。

学校の敷地を出て、辺りに生徒の影がなくなると、歩きながら奈美は言った。

「検査の結果だけど、白血球が普通より多いだけで心配ないって」「そうですか」

真鉤は意外そうな顔もしなかったし、異常のないことを祝うような顔でもなかった。そ

れが奈美を不安にさせ、同時に真鉤への憎らしさがぶり返した。

「もしかして昨日も、病院での話を聞いてたの」

「いやそんなことはしてない」

真鉤は慌てた顔で手を振った。演技ではない本物の表情が見えたので奈美は胸のモヤモ

ヤが軽くなったような気がした。だがそれで問題が解決した訳ではない。

「心配ないけど念のため、月に一度検査に来て。内科の先生とお母さんだけで話して

て、何か隠してるみたいだった。……ねえ、私の病名って何なの。

隠さないといけない病  
気」

「僕にはどんな病気かは分からない」

「じゃあ何が分かるの」

奈美は立ち止まった。きつい声になってしまって自分でも驚いていた。疎らにいた通行

人がこちらを見ている。恋人同士の痴話喧嘩などと思われたらどうか。

真鉤も立ち止まり奈美を見返した。感情の痕跡は既に消え、仮面の無表情に戻っていた。

イライラする。奈美は真鉤の瞳を覗き込み、最も大事な問いを發した。

「ねえ。私、死ぬの」

不死身の殺人鬼は、奈美を見て何に気づいたのか。何を警告しようとしたのか。

真鉤天は黙っていたが目は逸らさなかった。瞳の奥で何かが動いた。それが何なのか、

奈美は確かめようとした。何百人もの死を間近に見てきた瞳。殺す権利がないとはどうい

う意味なのか。獲物の資格がないということなのか。憐れみなのか。死にゆく者への憐れみなのか。

やがて、真鉤は言った。

「人はいつか必ず死ぬ」

「そんなことを聞きたいんじゃない。ひどいよ。散々人を振り回しておいて」

奈美は真鉤を置いて歩き出した。涙が滲んでくるのを手で拭いながら。しゃくり上げて  
しまいそうなのを必死に抑える。

彼が助けてくれなかったら自分が今頃生きていないことも分かっている。彼が奈美のた

めを思っただけで警告してくれたことも分かっている。それでも、何も知らない方が幸せだった

と思う。いや、自分は何に怒っているのだろう。真鉤は不死身の殺人鬼と言いながら冷静

で、苦悩しながらもそれを受け止めていて、自分は訳が分からなくて、自分の立っている

場所も分からなくてただオロオロしているだけだ。そんな自分が情けなくて、でもまだ高

校生なんだから仕方がないとも思っただけ、でもやっぱり自分がみつともなかった。

いつの間にか真鉤が追いついて横を歩いていた。  
「すまない」

彼は言った。困っている、動揺している声音だった。

「別に、真鉤君が謝ることないよ」

そんな真鉤に対し苛立つと同時に、救われたような気持ちにもなるのはどうしてなのだろう。

「僕に分かるのは大まかなことだけだ。もし君が自分の体のことをきちんと知っておきた

いのなら、僕の知り合いに会わせる。彼ならもっと詳しく分かると思う。どうするか、考えてみてくれ」

そう言い残すと真鉤は足を速め、まだ泣いている奈美から離れて去った。

## 二

翌日の放課後、奈美は一旦自宅に戻ってから私服に着替えて出発した。友達とカラオケ

に行くのだと言うと、珍しいわねと母は笑った。検査結果を聞く前までの笑顔とは何処か違っているような気がした。

真鉤の屋敷までは歩いて十分もかからない。玄関の呼び鈴を押すと真鉤も私服で出てき

た。深い緑色のズボンに灰色の長袖シャツという予想通りの地味な服装だった。

二人はバスで街に向かった。それぞれ一人掛けのシートに座る。着くまでの間どちらも

無言だった。帰りのバスは事故に遭ったあの坂道を通ることになる。落ちていく感覚を思

い出し、奈美は嫌な気分になった。料金を払う際、左腕を吊った奈

美が財布を出すのに手間取っていると真鉤が二人分払ってくれた。奈美がありがとうと言った。真鉤は黙って頷いた。

繁華街に着くと真鉤は携帯で誰かに電話を入れた。真鉤が携帯を持ってるのは少し意外だった。カラオケボックスに入り、待ち合わせだと説明すると店員は端の一室に案内してくれた。

防音の扉を開けると早速歌声が流れてきた。ボックス内には二人の客がいた。マイクを持って歌っているのは奈美と同学年くらいの少女で、透き通る声とまでは行かないまでも音程も外さずなかなか綺麗な声だった。切なげなメロディは何度か聞いた覚えのある古い曲だ。

もう一人の方が真鉤と奈美に片手を上げて挨拶した。北坂高の制服を着た、以前喫茶店で真鉤と一緒にいた少年だった。背は高いが痩せていて、でもちょっとした動作がきびきびしている。髪は長く、学校で先生に注意されないのだろうか。西洋人っぽい顔立ちで、唇の片端だけを上げた淡い笑みは大人びていた。ボックス内の薄暗さに彼は調和していた。

闇こそが彼に相応しいというように。少女の方は歌いながらこちらを見て僅かに眉をひそめた。特に真鉤に向けられた視線は厳しいものだ。薄手の白いジャケットを着て、アイドルやモデルで通りそうな整った顔をしていた。マイクを持つ指もすらりとしている。

真鉤は先客と向かい合わせのソファに腰を下ろした。奈美も真鉤の隣に座る。

曲が終わると少年が多少おざなりな感じのする拍手を贈り、真鉤がそれに倣った。奈美も片腕を吊った状態で軽く拍手をする。

「じゃあ、密談でも始めようか」  
機械を止めて少年が言った。早速隣の少女がその脇腹へ肘鉄を食らわせる。

「先に自己紹介からでしょ」

真鉤が奈美を紹介した。

「僕のクラスメイトで、藤村奈美さんだ。昨日電話で話した通り、彼女は僕の素性を知っている」

「殺人鬼と同じクラスなんて大変ね」

少女が奈美に向かってにっこり微笑んだ。内容は真鉤への皮肉だが。

少年が自己紹介した。

「俺は日暮静秋だ。北高の二年だから君らとは同学年だな。君が信用出来るかと判断して告

白するが、俺は吸血鬼だ」

「え」

あまりにも自然に言うので奈美は聞き違えたかと思った。少女の方が補足する。

「だから吸血鬼。夜毎に女の子の家に忍び込んでチューチュー血を吸ってるの。ひどい奴でしょ」

日暮は苦笑した。

「チューチューとは吸ってない。提供者は十数人キープして順番に吸ってるし、毎日吸う

必要はないから健康上問題はないぜ。まあ献血程度のもんさ」



「『提供者』だって。勝手に押しかけて催眠術で記憶いじってるだけでしょ。血を吸う以外にこつそり何してるか分かったもんじゃないわよね。ねえ、怪しいでしょ」

同意を求められても奈美は困ってしまふ。

「血を吸わせない女がゴチャゴチャ言ってるが気にしないでくれ。キスしかさせてくれないんだぜ」

「またそれを言う」

いきなり少女が日暮を殴りつけた。拳で顔面をモロだ。ベチツではなくメチイツという音がした。

この人達は何をやっているんだろう。もしかしてどつき漫才のつもりなのか。奈美はあ

つけに取られていた。真鉤の方を見るが彼は無表情だ。

「暴力的な彼女、君の番だ」

日暮に促され、少女が奈美に顔を向けた。

「ええつと、私は南城優子。横の吸血鬼と同じクラスね。代々巫女の家系だったみたいで、

巫女って言っても邪教の神だったんだけどね、術とか呪いとかが効かない体質みたい。元

々静秋が私の血を吸いに来て、催眠術が効かないから殴ってやったら彼、びっくりして。

あの情けない逃げっぷりは写真に撮っておきたかったわ。まあ、それ以来の腐れ縁ね」

「付き合ってる男の前でオフコースの『さよなら』を歌うような女さ。すぐ殴るんで『北

高の鉄拳女』と呼ばれてる。まあ、彼女とまともに付き合えるのは俺くらいのもんだ」

「また人の綽名をすぐばらす」

彼女がまた日暮を殴った。これも骨の軋むような凄い音がする。

日暮は首が斜めになっても平然としていた。

奇妙な自己紹介が済んだことになるが、奈美は納得行かなかったので日暮に尋ねた。

「あ、あの、吸血鬼って、やっぱり日光に弱いんですか。学校にどうやって行ってるんです」

やっぱりと言いたげな顔で南城が日暮を見た。日暮が説明する。

「一応生き物だから、日光で灰になる訳じゃない。昼間はだるくて力が出ないし、直射日光を長く浴びてると肌が火膨れになったりはするけどな。鏡にも映る。ニンニクは苦手だ

が十字架は効かないぜ。あつと、心臓に杭を打てばなんて言わないでくれよ。遺伝だから、

血を吸った相手が吸血鬼になるってことはない。幾つか特殊能力もあるが、まだ君が信じ

てないかも知れないから俺の十八番を見せてやるっ」

日暮はテーブルに置かれたグラスを右手で触れた。中身は飲みかけのジュースだ。炭酸

入りの薄茶色はジンジャーエールか。

全員が黙って見守るうち、グラスの中の氷がゆっくりと回り始めた。それは次第にスピ

ードを上げ、ジュースが渦を巻いてくる。日暮は掌で触れているだけで、グラスを持ち上げても揺らしてもいないのに。

日暮が手を離すと、渦は平たくなっていき数秒で消えた。

「素ではこのくらいだが、血を使うと」

日暮が右手人差し指の先で親指の腹をこすった。爪で切ったのか血の玉が湧いてくる。

彼は血の雫をグラスの中へ落とし込んだ。二滴落としてやめ、親指をペロリと舐める。血は止まっているようだ。

再びグラスに手を伸ばすが、今度は触れなかった。

グラスの中身が揺れ始めた。さっきよりも激しく、生き物みたいにグネグネと動いている。

と、中身が丸ごと塊となってグラスから飛び出した。日暮が左掌を差し出すとその上にジューズの塊が乗った。零れずその場に留まっている。

氷を含んで蠢くアメーバのような塊を、日暮は軽く投げ上げた。

落下場所は大きく開けた彼の口で、ジューズはツルリと吸い込まれて消えた。

「ブフツ」

日暮がむせた。渋い顔で片手を上げる。

「悪い、ちよつとしくじった。ケフツ」

奈美は笑って良いものかどうか迷った。南城が呆れている。日暮は二、三度むせただけで後はこらえ、無事に飲み終えた。奈美はグラスの方を確認してみる。空っぽで底も乾いているようだ。

「まあ、こんなところだ。液体を操るのが得意だね。血液、特に自分の血ならうまく行く。

やろうと思えば相手の体に触って脳出血や心筋梗塞を起こすことも出来る。取り敢えず、信用したかい」

日暮静秋は伝説の吸血鬼とは違っているようだが、彼が只者でないことは分かった。奈美は頷いた。

彼は誰かを脳出血や心筋梗塞にさせたことがあるのだろうか。

「言つとくが、俺達のこととは秘密にしておいてくれよ。では本題に

入ろう。医者は異常な  
いと言ったんだって」

ソファーに背を預けたまま、日暮は全てを見透かすような目で奈美を観察していた。その物腰はまるで暗黒街の帝王だ。

「いえ、白血球が多いけど心配はないって言われました」

「でも毎月検査するんだろ。普通じゃないよな。で、真鉤の奴から正確な診断を頼まれた

訳だが、俺は血にうるさい方だね。相手の体質のかなり詳しいところまで分かる。ただ、先

に聞いとくが、もし救いようのない結果が出たとして、それを受け止める覚悟はあるのか

い。俺は気を回すなんてのは苦手だね、聞かれたら全部正直に言っちゃまうぞ」

その覚悟はしているつもりだったが、奈美は「覚悟があります」と答えた後で息苦しさ  
を覚えた。自分の心臓の鼓動を感じる。

真鉤は無表情に見守っていたが、膝の上で手が僅かに動いた。手を上げて引込め  
たみたいだ。彼はどう思っているのだろう。奈美のことをどう思っているのだろう。

「じゃあ、首を出しなよ」

言った日暮の脇腹に鋭い肘鉄が入った。また南城の仕業だ。

「血を吸うのは首じゃなくてもいいでしょ」

「じゃ、じゃあ指を出してくれ」

可笑しさと不安の入り混じった気持ちで、奈美は自由な右手を差し出した。それを日暮

が両手で持ち、顔を近づけた。口を開けると彼の犬歯が長く尖っているのが分かる。

日暮は奈美の人差し指の先に口をつけた。痛みは一瞬で、採血の

時より軽かった。ソク  
リ、と背中に寒気のような震えのようなものが走る。血を吸われて  
いる。

それはほんの二秒ほどだったろう。日暮は口を離し奈美の右手を  
解放した。人差し指を  
確かめるが傷口は殆ど分らない。

日暮は吸った血を飲み込まず、口の中で捏ねるようにして味わっ  
ている。不気味な仕草  
だが顔は真面目だ。

十数秒してやっと日暮は飲み込んだ。更に考え込むような沈黙の  
後で、日暮はあっさり  
病名を告げた。

「慢性骨髄性白血病。初期の初期だな。この年代なら急性リンパ球  
性の方が多いんだが。  
医者も判断に迷ったんじゃないか。多分、数ヶ月以内に治療が必要  
になってくるだろう」

白血病。奈美が予想していた病名の一つだった。悲劇のヒロイン  
が良くかかる病気だ。

自分がそれほど動揺していないことに奈美は気づいた。

「それで、治る見込みはあるんですか」

「昔は不治の病と言われてたがな。最近は骨髄移植とか化学療法が  
発達して割と治るそう

だ。ただ、問題は別にある。君の親戚って癌で死んだ人が多いんじ  
ゃないか」

薄闇の中で、日暮の瞳は底光りして見えた。奈美の心臓を抉るよ  
うな、光。

奈美は覚えていることを口にした。

「私の叔父さんが大腸癌で死にました。三十代だったと思います。

それから、祖父も、祖

母も癌だったそうです。あ、それと、母さんに妹がいたそうですけ

ど、小学生くらいの時

に腎臓の癌で死んだって……」

「君は遺伝的に悪性腫瘍が出来やすい体質のようだ。免疫系と細胞の増殖制御、複数の欠

陥だと思う。両親から別々に受け継いだんだろうな。今回は白血病だが、健康診断は小ま

めにやっていた方がいい。全身の何処からでも癌が出来る可能性がある」

日暮は感情を抑えて淡々と話した。横の南城はさっきまでの威勢もなく神妙な顔になっ

ている。

「じゃあ、長くは生きられないってことですか」

奈美が尋ねると日暮は肩を竦めた。

「俺にも寿命までは分からんな。真鉤、どう思う。お前にはどう見えた」

日暮は真鉤にバトンを渡した。それまで俯いて聞いていた真鉤天が奈美を見た。

彼はまだためらっているようだった。この期に及んで気遣いなど必要ないだろうに。奈

美が頷いてみせると、真鉤は漸く口を開いた。

「君と図書館で話した時に、初めて気づいた。僕はあれを、死相、だと思っている。多分、

人を大勢殺してきたせいなのだろう、死の近い人間が分かることがある。感覚的なもので

うまく説明は出来ないけれど。あれは、決められているというサインだから、僕が手を出

してはいけないのではないかと考えていた」

殺す権利がないというのはそういうことだったのか。決められているというのは誰が決

めたと真鉤は考えているのだろう。奈美の死を誰が決めたのか。

「その死相つてのはどのくらい正確なんだ。残り時間は分かるのかい」

日暮が重ねて問う。ちらりと彼の方を見て真鉤が説明する。

「詳しくは分からない。事故か病気かも分からない。バスの事故で君を助けた時、原因は

これだったのかとも思ったが、やはり死相は消えなかった。……僕の経験した限りでは、

死相を見た三日後に自殺した人もいるし、二年近く生きていた人もいる。ただ、その人は

ずっと入院していた。通りすがりの人など最後まで確認の取れない人も多いから、あまり

参考にはならないと思う」

南城優子が微妙な表情で言った。

「あのさ、別に、早死にすると決まった訳じゃないんだし、たまに、ほら、末期癌が治っ

ちゃった人とかいるよね。私なんか元気一杯だけど、車に轢かれてコロッと逝っちゃっ

ともあるかも知れないしね。人生何が起こるか分かんないから、体質が変わることもある

かも知れないし、遺伝子治療とか最近流行ってるし、その……まあ、今を楽しんで生きれ

ばいいんじゃない」

慰めようとしてくれたのだろうが、最後の言葉は逆効果な気がする。

「聞いて後悔したか」

日暮が尋ねた。

「聞かなければ良かったと思うなら、催眠術で君の記憶を消すことも出来る。白血病のこ

と、癌体質のこと、俺達のこと。真鉤の正体についての記憶もな

「いえ、後悔はしてません」

奈美は答えた。忘れたってどうなるものでもない。深刻な事態を前に、自分を誤魔化し

て能天気生きるのは嫌だった。

日暮は頷いた。

「そうか。隣町だし、君が希望するなら時々体調をチェックしてやつてもいいぜ。相談事があるなら乗ってやる。思いやりとか気休めの言葉を期待しなければな」

半端な慰めよりも日暮の中立的な態度の方が奈美にとってはありがたかった。彼は手帳を破って電話番号を書きつけた。「あ、私も」と言って南城が自分の番号も足し、奈美に手渡した。

「ありがとう」

奈美も自分の携帯の番号を二人に教えた。滅多に使わない携帯だが。

「これからもよろしくな。俺達の素性を知っている者は少ないんだ。それが君の特権かも

知れない。ところでどうする。折角だから時間まで歌っていくか」

「こんな状況で歌える訳ないでしょ」

南城の突っ込みが拳で入る。

「いえ、やめときます。また。今日は本当にありがとうございました」

奈美と真鉤は自分の分の代金を払ってカラオケボックスを出た。

闇の世界から陽の当たる

世界へ。さっきまで別の世界にいたような気がする。だが、言われたことはきつと事実だ。

「どうしますか」

真鉤が尋ねた。まだ街に来て三十分も経っていない。



「本屋に寄ろうと思ったけど、もう帰ります。そんな気分じゃないから」

「そうですか。僕も特に用事はないので」

二人は同じバスに乗った。あの坂道と事故のことを思い出す。あの時真鉤が助けてくれ

なかつたら奈美は生きてはいない。残りの時間をおまけみたいなものと考えればいいのだ

ろうか。いやそんなふうには割り切れない。いつ死ぬか分からないのに人生を楽しんだり出来ない。

真鉤天は通路の反対の席に座り、無表情に前を向いていた。

皆、所詮は他人事なんだと奈美は思う。真鉤は不死身だし、日暮は吸血鬼だ。死の恐怖

なんか感じたことないのだろう。自分はちっぽけな人間で、更にはいつ病気で死ぬか分からない。

誰も頼れる者はいない。奈美は自分がこの世界で一人きりになってしまったような気がしていた。

目的のバス停に到着し、降りたのは奈美と真鉤の二人だけだった。

「今日はありがとう。さよなら。また明日」

自分でも感情の籠もらない挨拶だと思いながらも奈美は真鉤に言った。

バスが去っていき、真鉤は言った。

「嫌な思いをさせることになってすまない。僕に手助け出来ることがあればいつでも言うてくれ」

警察に通報させないために機嫌を取っておこうという訳ね。そんな考えが浮かんで奈美は自分を嫌な女だと思う。

「手助けって、私の嫌いな相手を殺してくれるの」

だってあなたは殺人鬼だもの。ああ、私は嫌な女だ。

「君が望むなら」

真鉤は表情を変えずに答えた。きっと彼は本気だ。奈美は慌てて訂正する。

「いや、今の嘘。別に殺したいほど憎い人もいないし、私のために誰かが死ぬのは嫌だもの」

「僕は定期的に人を殺さないと生きていけない。どっちにしても、また近いうちに誰かを

殺すことになる。同じ殺すのなら、誰かの役に立つ方がいい」

奈美はそんなことに加担するのは御免だった。真鉤は自分の罪悪感を少しでも軽くしようとしていたのか。奈美は急に腹が立ってきた。

「なら私を殺したら」

奈美は言った。

「どうせ長生き出来ないんだから。あちこち癌になって苦しんで死ぬんだから。今殺してもらった方が楽かも」

「それは出来ない」

真鉤の瞳の翳りが強くなった。一瞬、彼が泣き出すかと思った。でも泣きはしなかった。

「どうして。真鉤君なら簡単に出来るんじゃないの。私を殺さないのなら、誰も殺さないで。もうこんなことにはうんざり。さよなら」

奈美は真鉤を置いて自宅に向かった。昨日されたことの仕返しの意味もあった。振り返らなかつたので真鉤がどんな様子だったかは知らない。

私は嫌な女だ。カラオケボックスで受けた宣告よりも、真鉤の見た悲しげな表情の方

がずっと心に残っていた。

### 三

翌日の学校で藤村奈美は真鉤天と特に会話を交わすこともなかった。左腕を吊った生活にも慣れてきて、それほどの不便は感じない。

体育祭が来週の日曜に行われるため練習の時間が増えていた。白崎高の体育祭は真夏を避けて秋の初めにある。奈美は競技に参加出来ないから見学だけだと思っていたら、担任の提案で式の間アナウンス役をやることになってしまった。つまりはウグイス嬢だ。余計な配慮だと思ったが仕方がない。奈美はこの恥ずかしい役をこなす覚悟を決めた。

もしかしたらこれが人生最後の晴れ舞台になるかも知れない。いや晴れ舞台というほどでもないが。数ヶ月後には入院しているかも知れない。来年にはもう生きていないかも知れない。そんなことを考えていると、これまで退屈だった日常が妙に眩しく感じられるのだった。

午前中は全学年の練習だった。入退場に行進の仕方、実際に競技はしないまでも細かい段取りが確認されていく。生徒達は気だるそうに従っている。今時体育祭に燃えるような生徒は滅多にいない。

騎馬戦のリハーサルとなり、男子全員が上半身裸となった。運動系クラブなど見事な体

格をした者もいれば、折れそうな胴や肥満体の者もいる。女子は見物しながら小声でちょっとした品評会をやっていた。

学年で三番目に長身の天海東司は凄い体をしていて、盛り上がり、引き締まった筋肉の

束が一つ一つはつきり見える。酒ばかり飲んでいたようなのに贅肉は全くついていなかった。

た。天海の体を語る女子達の声は高くなっていた。

奈美は真鉤天の姿を探した。異常な筋力を持つ彼はどんな体格をしているのか。身長は

平均から少し上の筈だが見つからない。こんな時は本当に目立たない男なのだ。

白崎高の体育祭は何故か学年対抗で、当然騎馬戦もそうになっている。三年生が優勝する

ことはほぼ間違いないのだが、卒業していく彼らに花を持たせてやるうとかいうことらしい。

ただ、何年前前は二年生が優勝してしまい、大変気まずいことになったと聞いた。

まず一年と二年が戦い、次に一年と三年、最後に二年と三年という順番らしい。今日は

騎馬を組むだけで実際に戦いはしない。三人が馬になり一人が上に乗る。天海は上に乗り

たがっているようだ。

「おい、真鉤」

天海が大声で列の真ん中辺りに声をかけた。皆が怪訝な顔で振り向く。

「こつち来て俺の馬になつてくれねえか。ちよつと乗り心地が悪いんだよ。地味ーなお前

の人生に、一度くらい勝利って奴を味わわせてやるよ」

奈美はあっけに取られた。天海が何故こんなことを言い出したの

か分からない。彼は真鉤の正体を感じていて、刺激しないようにしているのではなかったか。

真鉤天の姿を発見した。彼は珍しく戸惑いを表情に出していた。彼の体は特別筋肉隆々

という訳でもなく、なんとか貧弱という表現を免れる程度のものであった。根本的に筋肉の質が違うのだろうか。奈美を助けた時に鉄板が刺さった脇腹は、勿論傷痕など残っていない。

騎馬の指導をしていた教師が天海に言った。

「身長差があるからやりにくいだろう」

「いいんですよ。祭りなんだし楽しくやろうじゃないですか。これで三年の大将をあつさりやつつけてみせますから」

天海のことなげな言い方に、向かいで列になっていた三年生はカチンと来たようだ。

特に、天海と当たることになる一番背の高い生徒が怒りに顔を歪ませた。

「天海、俺を倒すつてか」

奈美もこの三年の名を知っている。柿沢といって学校で最も忌避されている男だ。ヤク

ザの息子で本人も卒業したらヤクザになるだろうと皆予想している。暴走族を率いて若い

女性を拉致したとか、轢き逃げしたとか、中学時代は担任に日本刀を突きつけたとか、色

々とひどい話を聞いていた。白崎高の不良達のボス的存在だが、柿沢がのさばることが出

来ないのは天海がいるからだ。これまでに二回やり合って、二回共天海にこてんぱんにの

されたと影で噂されている。二回目は大人数でかかって返り討ちにされたとも。二人共公

言はしないが、柿沢が天海に対しあまり強い態度に出られないのはそのためなのだろうか。

「おや、柿沢先輩、その体重で上に乗るつもりかい。馬の人も大変だな」

天海がニヤリとする。彼の指摘通り、柿沢は二メートル近い身長に加え肉もたっぷりついているので馬の人も大変だろう。

「偉い奴は上と決まってるんだよ」

不機嫌に柿沢が答える。早速天海が切り返す。

「へえ、先輩偉かったんだ。まあベッドの外で野郎同士、上とか下とかはあんまり興味ないな」

男子達がどつと笑った。柿沢もちよつと笑っている。

「なら天海、お前も馬になったらどうだ」

「いや今回は別ですよ。先輩がみつともなく負けるところを全校生徒に見せてやりたいからね」

柿沢の笑みが凍った。悪辣さがこびりついたような顔が更に陰しさを帯びる。

「てめえ、覚えとけよ。本番では大恥搔かせてやるからな」

「そりゃ楽しみだ」

天海は両手をひらひらさせた。会話から取り残された真鉤が立ち尽くしていると、天海が再び声をかけた。

「こつち来な、真鉤。馬の頭になってくれよ」

真鉤は教師を見た。教師は適当な笑みを見せて言った。

「ま、いいか。行ってやれ」

その時真鉤は、仕方ないなあともいうような、しかしちよつと

嬉しそうな顔をした。

真鉤が天海の組に入り、押し出された男子は一つ下の組に入り、一人ずつずれ込んでいった。騎馬を作ってみると、体格差にちょっと違和感があるがそれほど不便はなさそうだ。

真鉤は片手でトラックを転がしたそうだから、天海の体重くらい余裕で支えられる筈だ。

どうして天海はこんなことをしたのか。真鉤の人生が地味とは思えないが、おそらく一生表舞台に立つことなく世間から隠れて生きていくのだろう。そんな真鉤に少しでも光を当ててやるうという配慮なのだろうか。いや、単に真鉤の上に乗ってみたいという単純な悪戯心だったのかも知れない。

何にせよ、体育祭で真鉤が本気を出すことはないだろう。たとえ負けることになったとしても。

#### 四

福岡市、漸く風の涼しくなった繁華街を仕事帰りのサラリーマンや遊びに来た若者達が歩いている。その中に、滲む汗をせわしなくハンカチで拭いているスーツ姿の男がいた。

年齢は三十代半ばほどか、背は低く小太りの体格だ。丸縁の眼鏡をかけた優しげな顔立ちをしていた。

小太りの男は居酒屋や屋台に寄ることもなく地下鉄へ入った。定期券を使って改札口を

抜ける。客の多い列車内で男はドアの近くに立ち、新しいハンカチを出して汗を拭いた。

ワイシャツがじつとりと濡れている。

同じ車両で近くのシートに座っていた若い女が、小太りの男に気づいて「あっ」と声を

上げた。男は痴漢を摘発されたみたいにビクリとして女を見返し、続けて周囲の視線を確

認した。

「あの時の」

「え」

小太りの男は女の顔を見つめるうちに誰なのか思い出したようだった。だが男の表情は

喜びよりも困惑に変わった。

「へえ、地下鉄使ってるんだ。何処で働いてんの」

女は馴れ馴れしく話しかける。

「いや、あの、天神で」

「ふうん、サラリーマンなんだ」

「あの、ここではちよっと……」

大勢の乗客がいることを男は気にしているらしい。

「ああ、分かる分かる」

女は納得顔になったがまだ男に話しかけたがっているようだ。女は二十才前後だろう。

茶髪に耳ピアスをしてやや化粧はきつく、遊び好きそうに見えた。

目的の駅に到着し男は急ぎ足で列車を降りた。しかし女は面白がつてついてくる。

「この辺に住んでんだ」

「ええ、まあ」

小太りの男は振り切るのを諦めたようでも歩みも普通に戻る。ハンカチで汗を拭くのは相変わらずだ。



「こないだは助けてくれてありがとね。私、歩いてると良く絡まれて困るの」

女が言った。並んで歩くと男より背が高い。

「いえ。助けたというか、代わりに連れてかれたというか……」  
人通りが少なくなり、小太りの男も次第に落ち着きを取り戻してくる。

「で、あの二人、あなたが殺したの」

女は単刀直入に聞いた。丸縁眼鏡の向こうで男の瞳が不気味な光を帯びた。闇の奥から

どす黒い本体が顔を覗かせたような。

黙っている男の態度を、女は不安と緊張によるものと判断したようだ。

「心配要らないって。私喋ったりしないから。見かけによらず、あなた強いんだね。一対

二で勝っちゃうなんて。でもあの二人、凄い死に方だったって。なんか水死体みたいに膨れてたって新聞に書いてたけど」

「本当に、誰にも喋らないで下さいね」

男の声は低かった。街灯の疎らな薄暗い通り。人の気配はない。

いや、男は振り向いた。長身の男がこちらに歩いてくる。距離があるので会話は聞こえなかった筈だ。

「ねえ、どうやって殺したの。毒とか使ったの。注射器持ち歩いてんの。噛み傷とかなってたけど、まさか噛んだんじゃないよねえ」

女は調子づいて喋り続ける。小太りの男は後方を気にしながら歩く。右の脇道を見た。

道筋を変えるか迷っているらしい。左側には木の生い茂る公園がある。

長身の男との距離が縮まりつつあった。奇妙な音が聞こえる。リ

ユオン、リユフユー、  
という、風に似た音。長身の男の呼吸音。小太りの男は足を速める。  
「ちよつと、そんなに急がなくても」

何も知らず女が言う。

カチャリ、と、微かな金属の響きに小太りの男は再度振り向いた。  
長身の男のシルエツトが、右手に奇妙なものを握っていた。

それは壊れた傘の骨のようにも見えた。だが軸は太く、先端部から握りへ向かつて生えた数本の棒は逆棘に似ていた。

一体、何のために作られた道具なのか。

長身の男の歩みはゆったりしていたが実際には普通の人の全力疾走ほどに速かった。街

灯の淡い光に照らされて、男の姿がはっきり見えた。灰色のロングコートを着た大男。や

や後退したM字額と、死んだ魚のような無感動な瞳。男の右手の道具が見えた。傘ではな

かった。鉄パイプなどを材料に自作したのだろうか、折り畳み式の銚だ。

男は、大館千蔵だった。

小太りの男の顔が緊張に引き攣った。女を置いて走り出す。こちらも外見に似合わぬスピードだ。

だが大館も加速する。無表情に追ってくるのが異様だった。

「ど、どうしたの」

あっけに取られる女の横を大館がすり抜けた。小太りの男は走りながら左右を見回している。

大館との距離が十メートルを切った時、小太りの男が跳躍した。

五、六メートルの高さ

がある倉庫の屋根まで届こうかというその時、一直線に飛んできた

銚が男の背中を貫いた。

ドギヤリと音がした。血がしぶく。

「うえっ」

小太りの男が空中でひっくり返りアスファルトに落下した。なんとか左手をついて頭を

打つことは免れる。眼鏡が外れて割れた。

「痛い、痛い……」

男は手を回して銚を抜こうとしたが、深く食い込んでおりビクともしない。何本もの逆

棘は内臓を抉っているだろう。起き上がれぬ男の前に大館千蔵が立った。

「何なんだ、お前は」

苦悶の顔で小太りの男は問うた。

「それはこつちが聞きたい。毒はどうやって注入した。口の中に毒腺があるのか」

「な、何を言ってる」

「とぼけるな。お前の体臭は人間のものじゃない」

大館は歯切れの悪い声で告げ、小太りの男を蹴転がした。一瞬男は宙に浮き、地面をバ

ウンドする。銚の刺さった部分で出血が続いている。女は遠くからポカンと口を開けて見ていた。

大館はコートの内側に手を入れた。隠していた長い金属棒を取り出す。握りのボタンを

押すとカチャリと先端が開いて逆棘が飛び出した。

「お前の親や兄弟も同じ体質か」

大館が二本目の銚を振りかぶった。小太りの男は答える代わりに突然顔を上げた。口を

すぼめて黄色の液体を噴き出したのだ。咄嗟に顔面をかばう大館の左前腕に液体が付着す

る。大館の舌打ち。右手の銚を容赦なく男の胸に突き刺して貫通させ、アスファルトに縫い止めてから後方へ跳ぶ。素早く脱いだコートの内側には更に二本の銚が吊られていた。

コートもシャツも溶けてはいないが、まくり上げた前腕の皮膚が溶けて径十センチほど

の潰瘍を作っていた。見ている間にも肉が泡を立てて溶けていく。

大館が目を剥いた。眼球が半分以上せり出すほどに。

「俺の皮膚が、畜生」

忌々しげに呻きながらベルトの鞘からハンティングナイフを抜く。刃渡り二十センチ以

上あるそのナイフで、大館は潰瘍部分と溶けかけの肉を素早く削り取った。肉のスライス

がアスファルトに落ちる。

前腕の抉れた肉はすぐに盛り上がっていき元通りになった。だが表面の皮膚は大きく傷

口を開けたまま変化しない。少量の血液が滲んだ。

「やってくれたな屑が。皮膚は治りにくいんだぞ」

大館の顔が蠢いていた。表情を変えろというレベルのものではない。皮膚の下で小動物

が暴れているような、異様な動き。大館は左手で顔を押さえた。飛び出しかけた眼球も押し戻す。

「どうして、こんなことをするんだ」

胸の中心を貫かれても小太りの男はまだ生きていた。男の言葉はたどたどしく、聞き取

りにくくなっていた。顎が変形して、全体的に大きくなり前にせり出している。まるで顎

の骨が折り畳み式であるように。先端に小さな穴の開いた牙が二本、前方を向いて生えて

いた。これも置まれていたものか。

「僕は、誰にも迷惑をかけずに、生きてきたのに。人を殺したのも、今回が初めてだ。女の子を、助けようとしたただけだ。それなのに、問答無用で、僕を殺すのか」

小太りの男はアスファルトから銚を引き抜こうと四苦八苦していた。伸びた顎がカツンカツンと空を噛む。銚の握り部分には鏝が溶接されており、前にも後ろにも抜けなかった。男を中心に血溜まりが広がっていく。大量の汗が爬虫類のように肌をぬめらせ、丸く開かれた目は怨念を込めて大館を見上げていた。

大館は左手を離れた。顔は本来の無表情に戻っている。ナイフを収め、肉を削った左前腕にハンカチを巻いた。置いてあったコートから三本目の銚を取り上げて逆棘を開く。

「好きで、こんなふうになんて生まれてきた訳じゃないんだ。それでも、ただ生きることさえも、許さないというのか」

男の言葉は大館の耳に届いていただろうか。毒の噴射を用心しているらしく、大館は五メートル以上の距離を保って銚を振りかぶった。

「末代まで崇つてや……」  
銚は小太りの男の左目から後頭部まで抜けた。脳漿を撒き散らし痙攣する男を、大館は冷静に観察していた。

「随分と古風なことを言う。だが無駄だな。俺に子孫はない」  
大館が呟き終えた時、小太りの男は全く動かなくなっていた。それでも大館は四本目の銚を取り、死体の背後から回り込んで近づいた。

振り下ろした鋸は、男の頭部を下手なスイカ割りみたいに叩き潰した。

大館は女に目を向けた。女はその場から動くことも出来ず、ただ膝を押さえて必死に立っている。

「あ、あの……私、だ、誰にも言わないから……」

大館は無造作に鋸を投げた。女の顔が爆ぜた。

「運が悪かったな」

大館は女の死体に告げた。小太りの男を貫いて地面に刺さっていた鋸をあつさり引き抜く。アスファルトの一部が剥がれた。足で死体を踏んで更に引くと、肉を裂いて完全に抜けた。他の鋸も同じようにして抜く。

大館はコートを畳み、取り出したペットボトルの中身を一口飲むと、四本の鋸と二つの死体を引き摺って夜の闇へ消えた。

## 五

ギプスを巻いた腕が痒い。掻けないもどかしさで藤村奈美の日常はイライラしたものとなっている。

月曜日、真鉤天は登校してこなかった。風邪で休むと学校に電話があったらしい。奈美には彼が風邪を引いたとは信じられなかった。

真鉤が学校を休むのは初めてのことだ。極力目立つことを避けている彼は判で押したような生活が続けてきたのだから。今回は何か特別な事情があるのだろうか。

まさか、天海東司に騎馬戦で指名されたのが負担になって、体調不良を理由に辞退するつもりなのだろうか。いやそんなことをしたら逆に波風を立てることになるだろうし、体育祭は日曜だから休むのが早過ぎる。

それとも、殺す相手を求めて何処かを彷徨っているのだろうか。この町では行方不明者が増え過ぎたため、都会へ出稼ぎに行つたとか。いやわざわざ平日に学校を休んでまで行くことはしないだろう。そんなことを冷静に考えている自分に奈美はちよつと驚いたりもする。

私を殺したら、とあの時奈美は言った。そうでなければ誰も殺さないでとも言った。勝手なことを言ってしまったと今は後悔している。真鉤が人を殺さないと生きていけないのならば、それは死ぬと言うのに等しかったのではないか。奈美は自己嫌悪に浸る。

この数日で体のだるさを感じ始めていた。体温を測ってみるが平熱だ。白血病が進行しているのだろうか。体の中で悪い細胞が増えていく様を想像して気分が悪くなる。実際には過敏になっっているだけなのだろうか。宣告を受けた直後からだし。なるようにしかならない。奈美はそう思おうとした。病院には定期的に検査してもらおうし、気になったら日暮静秋に診てもらってもいい。頻繁でなければ彼も引き受けてくれるだろう。

日暮もまた、あまり近づきたいとは思えない存在だった。殺人鬼の真鉤よりはましかも

知れないが、闇の住人であることには変わりがない。

いや、既に奈美自身も、そちら側の世界に足を踏み入れているの  
だろうか。

昼休みに三年の岸田が教室を訪ねてきた。岸田は文芸部の部長で、  
色白でひよろりと瘦

せていて一昔前の文学青年といった趣きの男だ。でも書く小説は陰  
惨なホラーだったりす  
るので良く分からない。

暫く部活に参加していなかったことを奈美が詫びると、岸田は別  
段怒るふうでもなく言  
った。

「聞いたよ。凄い事故だったんだって。何はともあれ、生きてて良  
かったなあ」

「はい。体育祭には出られなくなってしまいましたけど」

奈美が左腕のギプスを軽く上げてみせると岸田は首を振った。

「いやいや、文芸部にとっては体育祭なんかどうでもいいんだよ。

それより大事なのは文  
化祭だよ」

文化祭は十一月にある。去年の文芸部では機関紙を配布しただけ  
だった。三年の引退前  
の最後の行事だ。

「今年は何か特別なことやるんですか」

奈美が尋ねると岸田は頭を掻いた。

「いやあ、特別なことって訳でもないけど、やっぱり機関紙だよ。  
今回は学期分のは別

に、文化祭用に分厚いのを作ろうと思ってね。だからメンバーを総  
動員したいんだよ」

「すみません、幽霊部員で」

奈美は苦笑する。

「どう、何か書かないかい。小説書いてみたいって言ってたよね」



「それが、あれから全然進んでなくて。文化祭には間に合いそうもないです」

「分かる分かる。書き出せるようになるまでが大きな壁だからね。なら、詩の方はどう。」

去年の三学期分に載せた詩はなかなか良かったよ。『夏の夜空に』だったっけ」

「いえ違います。確か……ええっと……」

と、自分で書いた詩の題名を思い出せないことに奈美は呆れてしまった。取り繕うように

に岸田が言った。

「ま、まあ、だから何か新しく詩でも書いてよ。締め切りは取り敢えず十月一杯だから。」

いや出来れば中旬くらいまでがいいけど。考えといて」

「はあ……」

「それからたまには部室に来なよ。皆の熱気に触れるのもいい刺激になるよ。いや、そんなに熱気はないかなあ。あっはっはっ」

気の抜けた笑い声を上げながら岸田は去っていった。

重苦しかった空気が少し軽くなったような気がした。そっだ。部活をしよう。高校生ら

しいことをしよう。幼稚でもいいから詩を書いてみよう。生きているうちに何か残してお

こう。自分が生きてきたという証を……。駄目だ、また暗い考えになっちゃった。

放課後になり徐々に部室に行ってみると、狭いスペースにいつもより多くの部員がいた。

文芸部のメンバーは七、八人だったと思うが、見覚えのない部員もいる。一年生の新入部

員、といってももう二学期なので新入というほどでもないが。私がぼんやりしている間に

皆は着々と成長していたのだと奈美は感心する。部長の岸田はノートパソコンでカタカタ小説を書いているが、ここで創作活動の出来る図太い人はそうはいないので、部室は小説談義や互いの作品を批評する場となっている。奈美も皆のやる気に心を打たれて、自宅に戻ってから詩を書き始めてみる気になった。

だが、いざ自分の部屋で机に向かい、レポート用紙を睨んでみても何も言葉は浮かばなかった。取り敢えず題名に「秋」という言葉を入れようと思い、シヤープペンシルでそう書いた。でも秋だからどうなのかということになるとやっぱり何も浮かばない。なら「体育祭」はどうだろう。奈美は「秋」の字を消して「体育祭」に書き直した。末尾に「の」を加えてみた。やはり何も思い浮かばない。奈美は仕方なく宿題を先にやることにして、レポート用紙を引き出しに仕舞った。

宿題を済ませた後も、奈美はレポート用紙を出す気になれなかった。白紙に向かったところで何も出てくる筈はない。まずは内容を考えなければ。題材を探して本棚のコミックを読んだりテレビドラマを見たりしているうちに夜も更けてしまい、奈美は溜め息をついた。まだ猶予はある。じっくり考えていこう。その猶予はあつという間になくなってしまふいそうな気もしたが、奈美はひとまず自分に言い聞かせた。

翌日の火曜、真鉤天はまた休んでいた。どういふことなのだろう。奈美は流石に心配になってきた。風邪はあり得ない。誰かを

殺しに行って返り討ちになってしまったのだろうか。いや、でも学校に電話したのだから少なくとも生きていることは確かだ。

ひよっとすると。奈美は気がついた。

誰も殺さないでなどと奈美が言ったために、真鉤はずっと我慢しているのではないか。

我慢し過ぎると頭が真っ白になっておかしくなるとか言っていた。

二週間に一度くらいは

人を殺さないといけないとも。島谷紀子が死んでどのくらい経つただろう。もう二週間は

過ぎている筈だ。彼は自宅で独り、苦しんでいるのだろうか。殺人を我慢することは彼に

とってどんなに苦しいのだろう。アルコール依存症の人が酒を我慢するより苦しいのだろ

うか。根性とか意志の力とか、アルコール依存症という病気にそんなものは通用しないと

専門家がテレビで言っていた。

いや、奈美の推測は外れているかも知れない。全く関係ない別の事情なのかも知れない。

本当に風邪を引いているという可能性だってゼロではない。

奈美は、確かめてみようと思った。

午後になると雨が降り始めた。一応折り畳み傘を鞆に入れているが、片腕を吊った状態

では使いにくいだろう。やんでくれればいいのだが。

放課後になり、雨は更にひどくなっていた。奈美は部室に寄らず下校した。詩が全く書

けていない状態で行きにくいということもある。部活と疎遠になっ

ていたきっかけもそう  
いうことだったような気がする。自分が情けなくて、駄目な人間の  
ような気がしてくる。

とにかく今日は真鉤のことが優先だ。奈美はそう自分に言い訳した。

右手で傘を握り、肩掛けバッグと吊った左腕を雨からかばう。景色はどんよりと濁り、大粒の雨が傘にぶつかりバラバラと凄い音をさせる。風は強くなかったので助かったがスカートは濡れだ。

真鉤の家はこの辺だ。傘を傾けて視界を広げる。あの奇妙なデザインの屋敷が見えた。

門は開いている。郵便受けを覗いてみると新聞が幾つも重なって入っていた。

いないのだろうか。まさか、死んでいるなんてことは。いやそんな筈は……。

奈美は玄関に立ち、傘を置いて右手で呼び鈴のボタンを押した。

鐘の音に似た電子音が

雨の音に混じる。インターホンではないので奈美はただ待った。

屋内に動く気配はなかった。声もしない。やはりいないのだろうか。

奈美はもう一度ボ

タンを押した。三十秒ほど待つ。やはり反応がない。

もう帰ろうか。奈美はそう思い始めていた。最後の駄目押しに三

度目のボタンを押した

時、上の方から押し殺した声が聞こえた。

「……………」

雨のせいで良く聞き取れなかった。真鉤の声かどうかも分からなかった。でも上からだ。

二階だろうか。奈美は傘を持って数歩下がって見た。二階の窓は半開きでカーテンがかかっている。

カーテンの僅かな隙間から、血走った目が一つ、覗いていた。

総毛立つという感覚を、奈美は初めて味わうことになった。カー

テンから覗く目は一杯

に見開かれ、極大の狂気と冷たい殺意を放射していた。

低い呻きの後で、二階のものが言った。

「カエ・レ」

それは真鉤天の声だったが、いつもの穏やかさは微塵もなかった。万力か何かで搾り出したような、不気味な声音。

真鉤天が、おかしくなっている。

「アブ・ナ・イ」

帰れ、危ない、と、真鉤は言っているのだ。殺される。奈美は直感した。急いでこの場

を離れなければ。奈美はお義理程度に挨拶の言葉を喋ろうとした。

だが口が動いても声が出ない。息もしていないような気がする。

奈美は、傘の角度を変えて狂気の視線を防いだ。そのまま三歩後ずさる。背を向けるの

が怖いが後ろ向きに歩いて転ぶのも怖かった。奈美は、真鉤を刺激しないように、ゆっくりと踵を返し、門を抜けた。

走ったら危険だと思った。奈美は一步一步注意して足を進めた。

踏み締めている筈の地

面の感触が鈍い。雨の音も何処か遠く感じていた。

奈美は後悔した。真鉤のことを理解しようとしたのが間違いだった。彼は奈美を殺さな

いと言ったが、実際はそんな生易しいものではなかった。とても自分の手には負えない。

でも、帰れと警告したのは、奈美を守るためではなかったか。

三十メートルくらい歩いただろう、通行人の姿が見えてきた。買物袋を提げた主婦。

傘がないので走る青年。肩が濡れるのも気にしていない相合傘の高

校生カップル。

これでもう安心だ。思った時、後方から荒々しくドアの開く音が届いた。ドアが吹っ飛んだのではないかというくらい激しい音だった。

奈美は、振り返った。全身の筋肉が強張っていて、背骨がギシギシと音を立てた。

真鉤天が、土砂降りの雨に晒されながら、傘も持たずに突っ立っていた。長袖のシャツとズボンがみるみる濡れていく。彼は裸足だった。

真鉤は、自然と垂らした右手に、大きな鉈を握っていた。先端の方が少し膨らんでいて、刃渡りが三十センチくらいありそうだった。

濡れた髪が額にへばりついていて、何日か食べていなかったのか頬がこけていた。その頬が笑みに緩んでいた。全く可笑しそうには見えない、ピエロの虚ろな笑み。

真鉤の瞳は大きく開かれたまま瞬きもせず、町も人も通り越した別の世界を見つめているようだった。薄く膜が張ったようにも見える。

奈美は死が具体的な形を取って目の前に現れたのを感じた。バスが落ちた時は、あれは事故だった。だが今度は……。

真鉤が、こちらに向かって走ってきた。濡れた地面を裸足で走っても音はしなかった。

或いは雨の音に紛れたのかも知れないが。そんなことより真鉤が近づいて、くる。通行人がいるのに。目撃者が……。

奈美は逃げようとして、緊張のあまりバランスを崩してよろめいた。傘を離して右手をつく。傘が転がる。服が濡れてしまった。鉈が。

風鳴りが奈美の頭上を通り過ぎた。鉈。外れた。痛くない。外れた。それともわざとなのか。次の攻撃が……。

刃は来なかった。鉈を持った真鉤は奈美の横を駆けていった。雨を避けて軒下沿いを走っていた青年が、真鉤に気づいてキョトンとした顔になった。いきなりこんな非日常に出くわせば誰だっただろうか、青年は真鉤を振り返っている。

その青年の横を真鉤が駆け抜けた。鉈が踊った。刃が青年の顔辺りを過ぎたように見えただが、錯覚だったのだろうか、青年は真鉤を振り返っている。

青年の、その、頭から、大きな塊が落ちた。塊にはスイカの断面のようなものが見えた。いや、中身はピンク色で他にも色々詰まっていた。

青年が、それに気づいたのだろう。落ちたものを確かめようと向き直って下を見た。青年の顔の正面が見えた。彼の頭部は顔の右側、頭頂部から右耳の下にかけての線で、斜めに輪切りにされていたのだ。断面から血が滲み出し、雨に打たれて混ざった。青年は、そのまま地面に崩れ落ちていった。先に転がっていた外れた頭部に、青年の右手がぶつかって中身を潰した。

「ん。どうしたの」  
少女の声。相合傘のカップル。倒れた青年に気づいて立ち止まった二人の前で真鉤天が減速した。

「あ」  
傘の角度を上げて、少年の方が目の前に立つ相手の顔を確認しよ

うとした。カップルの制服は北坂高のものだった。

真鉤が鉈を横殴りに振った。刃はあっさりカップルの首を通り抜けた。ゼリーを切るように、あっさりと。

切断された二人の首と傘の軸が、ふわりと一瞬間を浮いた。二人の身長が違っていたため断面は少し斜めだった。仰向けに倒れた二人の死体から血が噴き出して濡れた地面を染めていく。二つの首は向かい合わせに転がっていた。

あからさまな光景を前にして、主婦が買い物袋を落とした。叫びかけたその喉に、逆手に握った真鉤の鉈が深々と突き刺さった。深過ぎる。先端は首の後ろから抜けただろう。

刃側が天を向いている。真鉤は鉈を刺さったまま上に振った。主婦の頭が縦に真つ二つになり、左右に分かれた状態で倒れた。

視界に入る生きた人間は、アスファルトに座ったままの奈美だけとなった。そこで真鉤は行為を止めた。

四つの死体に囲まれて、真鉤天は立ち尽くしていた。虚ろな笑みは消え、瞳の中に恍惚の余韻を残しながらも意志の光が甦ってくる。我に返ったのか。果然と、周囲を見回して、今の状況を確認しようとしているようだった。殺した本人が呆然としてどうするのか。果然としたのはこっちだ。

四つの惨殺死体はもう動かない。死体を見るのは初めてではない。バスの事故の時も。

いやあの時は炎の奥に影を見ただけだ。それよりも、実際に真鉤が



人を殺すところを見る

のは、これが初めてだった。殺人鬼だと告白された。彼の異常な筋力も、掌の傷があつたという間に治っていくのも見た。吸血鬼の友人も紹介された。近づくと死に怯えなければならぬ自分の体質も指摘された。

だが、それでも奈美は、真鉤が殺人鬼であることを本当の意味で実感していなかったのだらう。信じたくなかったのかも知れない。

もう、信じた。

真鉤が握る鉈の切先から、雨で薄められた血液が滴り続けていた。どうするつもりなのだらう。死体の処理は。でも日中なのに。まだ通行人も来るだらうし。

「うわっ」

右手にあるアパートの、ベランダのない二階の窓が開いていた。

三十代くらいの男が窓から顔を出して道の惨状に凍りついている。主婦の上げた短い叫び声が聞こえたのだらう。

真鉤が数歩走って跳躍した。二階の窓まで簡単に届いた。慌てた男が顔を引っ込める前

に鉈が閃いた。通り過ぎた真鉤は猫のようにしなやかに着地する。

男の顔が、お面のようにずれていく。粘着力に重力が勝り、外れて地面まで落ちていつ

た。残った頭部に脳と筋肉と骨と空洞が見えた。男がクニヤリと前のめりに崩れ、喉が窓枠に引っ掛かって止まった。

五人目の殺人人において真鉤は冷静だった。目撃者を消すために行われたのだ。でもここを通る人達を片っ端から殺すつもりなのか。

真鉤が奈美を見た。私も殺されるかも。恐怖は半ば麻痺していた。真鉤が近づいてくる。

鉈は……。

鉈は振られなかった。彼は奈美の傘を素早く拾い、動けずにいる奈美を両手で抱え上げ

た。真鉤は周囲を確認しながら自宅に駆け戻り、開け放しになっていた玄関をくぐった。

奈美を床に下ろしてドアを閉め、内側からロックした。

真鉤は、ドアを背にしてその場に座り込み、頭を抱えた。鉈が床に落ちた。

「やってしまった……」

真鉤は、虚ろな声で呟いた。

「どうなるかは、分かっていた筈なのに……やってしまった……もう、メチャクチャだ……」

……

奈美は、何も言えなかった。ただ座って息をして、自己嫌悪に陥っている殺人鬼を見守

るだけで、他には何も出来なかった。

二人共ずぶ濡れで、汚れていて、ひどい気分だった。

戻る

## 第五章 体育祭の昼と夜

### 第五章 体育祭の昼と夜

—

どのくらいの間そうしていたのだろうか。やがて真鉤天は立ち上がり、帰っていいよと

奈美に告げた。服が濡れてしまったね、乾燥機を使ってもいい、シヤワーを浴びてもいい。

真鉤の声は優しく、疲れていた。服がずぶ濡れのまま帰るのはためらわれ、奈美は真鉤の

提案通りシヤワーと乾燥機を借りることにした。真鉤は奈美にバスタオルを差し出して、

蛇を洗面所で洗った後は二階に消えた。奈美に配慮したのだろうか。

バスルームはタイル張

りで、浴槽はあまり使っていないようだった。ギプスに湯をかけないよう気をつけたが既

に雨で濡れてしまっていた。乾燥機は古いものだったがしっかり働いてくれた。

ある程度乾いた制服を着直して出ていこうとすると真鉤が黙って見送ってくれた。彼は

別の服に着替えていた。

「明日は学校に来るの」

奈美が尋ねると、真鉤は言った。

「分からない」

雨の音は軽くなっている。代わりに、外の通りから人のざわめきが聞こえていた。さっ

きはパトカーのサイレンも鳴っていた。日中の通りで起こったこと

なのだから当然のことだ。

真鉤は、今日見たものを誰にも喋らないようにとかは何も言わなかった。奈美のことを信用しているからだろうか。それよりも奈美には、彼が疲れ果てて、投げ遣りになっっているように見えた。

現場はすぐ近くだ。きっと刑事が聞き込みはこの屋敷を訪れるだろう。その時、真鉤は何と答えるつもりなのだろうか。

「さようなら。また明日」

奈美が伝えると、真鉤は黙って頷いた。

通りは何台もパトカーが停まっっていて、警官が紐を張って野次馬を遠ざけていた。まだ

雨が降っているのに大きな人ばかりが出来ていた。

「俺、見たんだぜ。生首が転がってた。畜生、画像撮るときゃ良かった」

興奮して携帯に話す若者がいた。彼らは真鉤の屋敷も奈美も見ようとはしなかった。奈

美は傘を差して彼らの後ろを過ぎ、別の道を通って家に帰った。

「サイレンが聞こえてたわよ。この近くみたいだけど何かあったのかしら」

母が言った。

「近くで殺人事件があったみたい。テレビのニュースに出るんじゃないかな」

奈美は冷静に答えることが出来たと思った。自分の部屋で私服に着替え、少し眠った。

六時のニュースでは大々的に報道されていた。被害者は五人で、首や頭部を鋭利な刃物

と思われる凶器で切断されていたこと、それが極めて短時間を通り

魔的に行われたらしいことなどを伝えていた。被害者のうち三人は身元が判明していた。北坂高の二人の名前も出ていた。同じ二年生。彼らの人生があまりにもあっけなく絶たれたことをどう解釈すればいいのだろう。人生は理不尽だ、とでも。

死体発見者や近所の住人のコメントも流れていた。発見者は凄惨な死体だった、人間業じゃないと話していた。住民は悲鳴が聞こえたような気がするが大雨のせいではつきりしなかったと言った。真鉤と奈美を目撃した人はいないようだった。もしいれば真鉤が見逃す筈がない。

警察の発表はまだない。事件から二時間ほどしか経っていないのでそんなところだろう。島谷紀子の事件との関連性も疑われることになるだろうか。これから町一帯に聞き込みがあるだろう。奈美の家にも刑事が来るかも知れない。

もし聞かれたら、奈美は何も見えていないと答えるつもりだった。真鉤はどうしているのだろうか。自分に捜査の手が及ばないか、二ユースに目を光らせているのだろうか。それとも、また頭を抱えて蹲っているのだろうか。あの憔悴した顔が奈美は気になった。

真鉤は、奈美が言ったことを守ろうとしたのだ。彼は登校する余裕をなくしてまで必死に我慢を続け、おかしくなってしまい、結局今回の殺戮を引き起こすことになったのだ。すると奈美にも責任の一端があるのだろうか。奈美の発言は殺人という行為への嫌悪感か

らだった。

だが、殺人への嫌悪感は、真鉤本人もずっと抱いていたのではないか。

翌日の学校でもやはり事件のことは話題になっていた。

「藤村さんとこの近くでしょ」

クラスメイトが聞いた。

「そうなの。何も知らないけど」

奈美は無難に返した。天海東司は何と言っただろうか。奈美は天海に出くわさないことを祈った。

真鉤天は、また学校を休んでいた。

奈美の心配は、昨日までとは違うものに変わっていた。

放課後になり、奈美は急ぎ足で下校した。天海の姿は見えなかった。

重くのしかかってくるような曇り空の下、奈美は真鉤天の屋敷の前に立った。

現場の道はまだ通行止めになっていた。何やら調べているらしい警官の姿が見えた。犯人がすぐ近くに住んでいることを、彼らは想定しているだろうか。

郵便受けには新聞が一部のみ入っていた。今日の夕刊だ。奈美は二階の窓を見上げた。

閉まっていて相変わらずカーテンがかかっているが、隙間から覗く目はない。

細い煙が上がっている。良く見ると壁から煙突が出ているようだ。暖炉か何かあるのだろうか。

考えてみると、随分と深入りしてしまったものだ。奈美は玄関に立ち呼び鈴のボタンを押した。屋内に鐘の音が響く。

やはり反応はなかった。奈美は三度試して諦めた。引き返そうと

してふと思いつき、ド  
アノブに触れてみた。  
ノブが回る。

もう一つの鍵も掛かっていなかった。昨日乱暴に開けたためか、  
傷んだ蝶番が情けない  
軋みを上げながら開いた。

人の気配はない。ただし、病室のベッドの下にまで潜り込むよう  
な男だから、すぐそば  
に隠れているのかも知れない。

「真鉤君」  
一歩足を踏み入れ、奈美は奥に呼びかけてみた。屋内は物音一つ  
ない。

ここまで来たのだから。奈美は意を決し、靴を脱いで上がった。  
居間に行ってみる。テ  
レビとソファ。かつて真鉤に告白を受けた場所。今は真鉤はいな  
い。台所にもいなかった。

「真鉤君」  
一階にはいないようだ。奈美は階段を上って二階に進んだ。真鉤  
の勉強部屋を見た。散  
らかつていなくて本棚などもきちんと整理されている。学生服がハ  
ンガーで吊られている。  
靴もあった。ベッドを見る。毛布に乱れはない。

ベッドの下から何か顔を出していた。木製の柄。鞘に収まった  
大型の鉈が転がってい  
る。昨日使われた凶器だ。もっとしつかり隠すべきではないかと奈  
美は余計な心配をして  
しまう。

勝手に他人のプライバシーを覗く後ろめたさを感じながら別の部  
屋を見る。使われてい

ないらしい寝室。彼の両親の部屋だったのだろうか。彼が殺した両親の。書斎も使われて  
いる様子はなかった。

三階は段ボールが積まれているだけで何もなかった。

真鉤がない。出かけているのだろうか。でも真鉤の靴は上がり口にあった。別の靴を

履いていった可能性はあるが。

そういえばあの煙は何処から出ているのだろうか。暖炉はなかった。隠し部屋でもあるの

だろうか。一階に戻ってみるとあっさりドアが見つかった。見落と  
していただけだ。

ドアの向こうは地下への階段だった。地下室から光が洩れている。階段は剥き出しのコンクリートで、冷たさが靴下越しに伝わってくる。

殺風景なコンクリートの地下室は、中央に大きな焼却炉が設置されていた。煙突が天井を伝って壁へ抜けている。

焼却炉のそばにポリタンクが置いてあった。二十リットルくらい入るものだ。中身は空だ。近づいてみると灯油の匂いがする。

何かを焼いているのだろうか。覗き窓がついていないので焼却炉の内部は分からない。

取っ手は熱くなかった。奈美は右手でそれを握り、噴き出す炎にやられないように慎重に、焼却炉の蓋を上を開けた。

灰の上に、黒焦げになった人間が膝を抱えて座っていた。体の所々が燃えているが、炎

の勢いは既に弱くなっていた。まともな皮膚はなく、髪はなくなり頭蓋骨の一部が見えて

いる。焼けた人肉の嫌な匂いが奈美の鼻と喉を突いた。



それは、眠っているように、目を閉じていた。

何なのだ、これは。真鉤が新しい死体を始末しているところなのか。でも昨日五人も殺

したばかりだ。それとも……焦げていて良く分からないが、この顔立ちは……まさか、自殺……。

それが瞼を開いた。バリツと音がして右の瞼は外れて落ちた。絶句している奈美に、それが、掠れた声で告げた。

「閉めてくれないか。まだ、生焼けなんだ」

真鉤天の右目は白く濁っていたが、左目は潤いを保っていた。冷たく澄んだ瞳が奈美を見上げている。

「……ど……どういうつもり」

やっとそれだけ声が出せた。

「閉めてくれ」

真鉤は言って左目を閉じた。右目も裏返った。

彼は死ぬつもりなのだ。独りで静かに。生きたまま焼かれるという、苦痛に満ちた方法で。

三百人以上殺した殺人鬼の末路が、これなのか。散々人を巻き込んで、自分も苦しんで。

何一つ救われぬまま、最後がこれか。

奈美の中に訳の分からない怒りが込み上げてきた。それは珍しく強い衝動となって奈美を動かした。

「馬鹿っ」

焼却炉の中に右手を突っ込んで真鉤の頬を叩いた。炭化した肉が零れた。かなり熱かった。

真鉤も目を開き、少々面食らったようだった。

「触らない方がいい。火傷する」

「もう……馬鹿」

もう一回叩こうとして奈美は諦めた。掌が痛い。確かに火傷してしまっただけかも知れない。

視界が滲んだ。涙がどんどん溢れ出し始める。焼却炉の煙のせいではなさそうだ。奈美

は腹立たしいような情けないような、なんだかどうしようもない気分になっていった。

「消火器は何処」

迷った末、真鉤が答えた。

「玄関の下駄箱の横だ」

奈美は一階に戻って消火器を取ってきた。ギプスの左腕が少しだけ痛む。説明書きを読

みながらロツクを外し、焼却炉の中に吹きつける。粉が充満して真鉤がむせる。血の混じ

った唾が出た。炎が消えた。

「早く出なさい」

白塗りになつた真鉤に奈美は告げた。

「服がない。燃えてしまったから」

「じゃあ取ってくる。何処にあるの」

「二階の僕の部屋にタンスがある。でもそこまで世話を焼かなくて  
も……」

「馬鹿。あなたが世話を焼かせるんでしょ。言っとくけど、私は  
あなたのお母さんじゃ

ないんだからね」

「分かつてる」

私は何をしてるんだらう。急に馬鹿馬鹿しくなったりもしたが、  
怒りやら自分でも訳の

分からない感情やらに押されて奈美は二階から真鉤の上着とズボン

を取ってきた。涙はまだ止まらない。ああ、他人に「馬鹿」なんて言ったのは何年ぶりだろう。

焼却炉の中で座っている真鉤にそれを手渡して、奈美は言った。

「下着は後で自分で履いて。私は一階に上がってるから」

「ありがとう」

真鉤の掠れ声は少し治っていた。

居間のソファーに腰掛けて待っていると、五分ほどして服を着た真鉤がやってきた。片

足を引き摺っている。消火器の粉は洗い落としたようだ。炭化した部分は剥がれて、赤い肉が見えていた。

全身大火傷のゾンビのような真鉤が、奈美に言った。

「コーヒーでも飲みますか」

この状況でこの台詞。奈美は思わず吹き出してしまった。それからまた涙が出た。奈美

はハンカチで何度も涙を拭いた。

「ええ。淹れてくれるの」

「インスタントしかないけれど」

「それでもいい」

真鉤は台所へ消えた。

やがて盆に二つのコーヒーカップとスティックシュガーを載せて戻ってきた。

「ありがとう」

奈美は礼を言って受け取った。真鉤も黙って自分のカップに砂糖を入れる。スプーンで

掻き混ぜて、一口啜る顔の皮膚はピンク色になっていた。なくなっていた右の瞼も出来か

かっている。破壊が止まったため本来の治癒力を発揮し始めたようだ。

奈美も少し飲んで、真鉤に尋ねた。

「いつからああしていたの」

「午前九時を少し過ぎていたと思う」

すると七時間以上も燃え続けていたのか。焼けた部分が治り、また焼けるという過程を

延々と繰り返していたのだろう。凄まじい真鉤の生命力に奈美は呆れた。

「君はどうやって僕の家に入れたんだ」

「だって、玄関に鍵が掛かってなかったから。あの、勝手に入ったのは悪かったけど、そ

の前に何度もベルを鳴らしたんだから」

真鉤は毛のない眉を上げて驚きを示した。

「ロツクし忘れてたのか。初めてだ。いつも用心してたのに」

骨が見えていた部分は既に新しい肉が覆い、頭には産毛が生えていた。この分だと一時

間もせずに完全に元の姿になるだろう。再生の材料は何処から出てくるのだろう。物理法

則を無視しているような気がする。質量保存の法則とか色々。

「死のうと思つたの」

奈美は聞いた。

真鉤は暫く黙つたまま、何度かコーヒーを啜つた。

「真鉤君」

「僕が生きていても、誰のためにもならない。害になるだけだ。僕自身にとつても」

真鉤は他人事のようにそれを言った。

「死ぬのは怖くないの」

「これまでは怖かった。でも、もう死んだ方がいいような気がしてきた」

「……皮肉ね。私はまだ生きていたいのに、いつ癌で死ぬか分からない。あなたは自殺し

ようとしても不死身なんだから」

奈美の言葉を真鉤は非難と取ったかも知れない。

「僕が死ぬことで君が助かるのなら、僕は何度死んでもいいよ」

奈美は苦笑した。

「ありがたいけど、それは関係なさそう」

また暫く、沈黙が続いた。

コーヒーを飲み終えてから、奈美は言った。

「明日は学校に来て」

「分かった。そうする」

真鉤は頷いた。

翌日の木曜日、真鉤はいつもの姿で教室に現れた。クラスメイトの男子が「ひどい風邪だったんだな」と言い、真鉤は「ええ。かなり」と答えた。

本番を三日後に控え、体育祭の練習が行われた。騎馬戦はなかったが、学年練習で天海が「間に合ったな」と真鉤に告げた。真鉤は天海の馬になるのだ。「ええ」

真鉤は笑みを見せた。はにかんだような申し訳なさそうな微笑は、いつもより翳りが濃かった。

天海の笑みも彼らしくなく、真鉤と似たり寄ったりのものだった。

## 二

奇妙な呼吸音を聞いた瞬間に嫌な予感がした。リュオーン、リュフュー、という風に似た響き。気道の形状がまともではないのだろう。

日暮静秋が角を曲がると三十メートルほど先に大柄な男が這いつくばって地面に顔を寄

せていた。身長百九十センチ台後半、体重百二十キロ以上。厚いロングコートの合わせ目から太い金属棒が覗く。髪はオールバックで額の生え際はやや後退し、肌の色は慢性的な血行不全を示している。皮膚と肉が互いに軽い拒絶反応を起こしているようだ。首と手の筋肉から、日暮は彼が人間でないことを瞬時に読み取った。彼が何者であるのかも。

偽刑事は真鉤の家のある通りで、今日封鎖解除されたばかりの殺人現場を調べているのだった。

内心舌打ちしながら日暮は引き返そうとした。気づいた偽刑事が身を起こしてこちらを向く。顔を見られる前に曲がり角の陰に隠れることが出来た。

偽刑事の判断は早かった。こちらに凄い勢いで駆けてくる。日暮も全速力で走った。姿

を見られるとまずい。次の角を素早く曲がり塀を越えて内側を走り、屋根から屋根へ飛び

移る。偽刑事の気配も同じルートで追ってくる。繊細さに欠ける動きだが身体能力は日暮

より上か。少しずつ距離が縮まっている。日没にはまだ時間がある。今やり合つのは避け

たかった。というより勝つても得のない戦いはしたくない。向こうの意図がどんなものか

はつきりしないが、追ってくる様子からも友好を結びたい訳ではなさそうだ。人の少ない

方へ逃げるか、多い場所へ駆け込むか。相手にどれほどの覚悟があるかだ。向こうだって

騒ぎは避けたいだろう。そう判断して日暮は屋根から飛び降りて大通りに向かった。なん

とか駅前の人込みに紛れることに成功する。

向かいの歩道から偽刑事の気配がこちらを窺っていた。日暮は顔を見せぬよう注意しながら歩いた。視線を感じる。あっさり識別されたようだ。あの呼吸音は匂いを嗅いでいるらしい。体臭を覚えられたか。真鉤のようにには行かない。非常にまづいことになった。

偽刑事が近づいてくる。このまま歩いていれば人込みもばらけてしまう。試しに足止めしてみるか。心を決めた日暮は、コンビニ前で地べたに座って談笑していたヤンキー達に声をかける。

「よお、久しぶりだな」

「何だ」

胡散臭そうに彼らが顔を上げた。どいつも二十才前後だろう、五人いて二人はニツカボツカを履いていた。

「あれ、俺のこと覚えてないのか。ほら、この目を見りゃ分かるだろ。よく見てくれよ」

「なーに言ってん……」

彼らが一斉に日暮の目を見つめた。二秒もすると彼らの顔から表情が消えた。個人差も

あるが大概の相手は五秒以内に術に掛かる。吸血鬼の特権だ。

「いいか、あのでかい男を皆でボコレ」

立てた親指で肩越しに後方の気配を示し、日暮は命じた。

「その後俺のことは忘れろ」

若者達は立ち上がった。彼らの目には植えつけられた意志の光が湧いている。日暮は足早にその場を離れた。

「おい、てめえ」

若者達が偽刑事に絡んでいる。肉が肉を打つ音の連続。彼らは頑張っているようだ。相手のダメージは全くなさそうだが。偽刑事はまだ反撃していない。多くの通行人が見ているのか。音と気配でそれを判断しながら日暮は五十メートル以上の距離を確保した。そのまま逃げるか。いや、結果を見届けたい。日暮は三階建てビルの屋上まで二度の跳躍で届いた。左手人差し指の爪で右手首を切り、静脈から流れ出る血で自分を囲む円を描く。きっちり五百cc使って出血を止めた。十秒もあれば傷口は塞がる。

敵の意識から自分の存在を隠すための結界だった。常人相手なら直接姿を見られても認識されることはないが、強力な相手であるほど成功率は低くなる。相手が明らかに日暮を目指している場合は更に確率が下がる。逆に血を多く使うほど結界の効果は強くなる。狭い範囲にこれだけ大量の血を使ったのは初めてのことだ。日暮はその場に蹲り心身の活動レベルを下げる。

「私をボコるそうだな」  
ここから見えない六十二メートル先で偽刑事の声がした。歯切れの悪い声音は口腔内の構造も人と違うようだ。

「ああ、そうだ」  
息を切らしながら一人が言う。催眠術に操られた彼らは無駄な戦いにも怯んでいない。

「なら人が見ていない方がいいだろう。どうだ、続きは裏でやらな  
いか」



偽刑事はその気になったようだ。ヤンキー共を深入りさせたか。だが遠隔操作出来る訳ではないので見守るしかない。

偽刑事は脇道へ歩いた。こちらに近づく方向だ。彼を蹴りながら若者達がついていく。

日暮は耳を澄ます。

人気のない裏通りに彼らは回り込んだ。カチャリ、と、金属部品が噛み合うような響きがした。

「何だそれ」

一人が聞いた。戸惑いが術の強制力に勝つたらしい。

偽刑事は無言だった。ただ風鳴りの音がした。同時に、グワシャツ、とでもいうような、

肉と骨がまとめて潰れる音が。即死以外あり得ない音だ。

別の若者の悲鳴が上がった。その悲鳴が破壊音で掻き消された。二人目。いやまとめて

もう一人。飛び散った血と肉片が地面に落ちる音を日暮は聞いた。

残った二人が流石に逃げようとした。ドブビュツ、と凶器が相手の胸を貫く音。それが

ブジャリという音に続く。貫いた凶器で胸を引き裂いたのだ。次は、凶器が肉に叩きつけ

られ、丸い塊が地面を転がる音だった。潰れた気管が一瞬洩らした細い呼気からも、首を

飛ばされたことが分かる。

これで五人が全滅した。あっけない殺戮だ。

偽刑事は彼らを殺さずに軽くあしらえた筈だ。或いは無視して日暮を追っても良かった。

なのに何故わざわざ殺したのか。

答えはおそらく、日暮への当てつけだ。

あんたがどういふ奴か良く分かったよ。日暮は自分のせいで死ん

だヤンキー達の冥福を  
ほんの少し祈った。

偽刑事は死体を放って裏通りを歩いた。リュオン、と深く息を吸って匂いを嗅ぎながらこちらへ近づいてくる。結界がうまく効いてくれれば、日暮の血臭は意識を逸らす方に役立つってくれるだろう。いざとなったら全力で逃げ出さねばなるまいが、身構えることで気配を悟られる恐れもある。日暮は全身の力を抜いていた。

「こいつらはお前が殺したも同じだ」  
偽刑事が陰鬱に告げた。足音は日暮の潜むビルから四十メートルほどだ。

「吸血鬼だな。お前の仲間も五、六匹仕留めた」  
偽刑事は「匹」という言葉を使った。挑発のためか。だが日暮はそれに乗ったりはしない。  
三十メートルに近づいた。

「この町の殺しは、お前がやっている訳じゃないだろう。白崎高の三人に、通り魔で五人。実際はそれ以上殺している筈だ。犯人を知っているか」  
二十メートル。

「教えてくれたらお前は見逃してやってもいい。吸血鬼など、どうせ人の生き血を吸うだけの社会的には無害な連中だ」

偽刑事に見逃すつもりがないことは日暮も分かっている。五、六匹仕留めたと今言ったばかりではないか。

十メートル。凶器から滴る血が地面にぶつかる音。  
「どうだ。協力する気はないか」

日暮のビルから五メートルの地点で、偽刑事は立ち止まった。リ

ユオン、リユフュー。

気に障る深呼吸。ここで僅かでも動けば危険だ。日暮は飽くまで冷静だった。

数秒で、偽刑事は歩みを再開した。

「ふん。お前は後回しだ。吸血鬼などより大物がいるからな。奴のような殺人鬼を放つて

はおけない」

お前も殺人鬼だろ。日暮は内心でそう反論した。

偽刑事はビルを通り過ぎた。

十メートルまで離れた時、偽刑事は低い声で言った。

「お前の匂いは覚えたぞ」

コンビニの裏から若い女の悲鳴が聞こえてきた。店員が死体を見つけたらしい。

偽刑事の足が速まった。

その気配が消え、パトカーがやってきて現場検証を始めても、日暮静秋は用心のため、

数時間その場で動かずに耐えた。

### 三

日暮静秋が真鉤天の屋敷を訪れたのは夜十時過ぎだった。

「電話で済ませるより直接言った方がいいと思ってな。その分厄介な奴に出くわしちまったが」

ソファアで足を組んで日暮が言った。

「知っている。それにニュースも見た」

真鉤は無表情に頷いた。這いつくばって匂いを嗅ぐ刑事を、真鉤は自宅から観察していたのだらうか。

「今日の犠牲者、警察はお前のせいにするかもな。しかしありゃあ強い。一対一じゃ敵いそうにねえ」

「……二対一ならどうだろうか」

真鉤が聞くと、日暮は唇の端を歪めて笑った。

「さあな。だが俺はリスクを冒す気はねえ。ほとぼりが冷めるまで家に引き籠もっていいよ  
うかと思ってる」

ほとぼりが冷めるまでというのは、真鉤が始末されるまでということだろうか。だが真

鉤は淡々と応じるだけだ。

「そうか。それがいいのかも知れない」

「だがその前に」

日暮が急に厳しい表情を見せた。

「北坂高校二年八組、葛西美智子。誰のことか分かるか」

真鉤は答えなかった。その名を知っているのかどうか、表情からは読み取れない。

日暮が解答を告げた。

「お前がおととい殺した五人のうちの一人だ。そして、優子の数少ない友人の一人だ。彼女がシヨックを受けてる」

「……そうか。すまなかった」

真鉤は頭を下げた。日暮の瞳は冷たかった。

「謝って片づく問題じゃないことは、分かってるだろ」

「分かっている。それで、今日来たのか」

「ああ。約束した通りだ。受けるか」

「君とやりたくはない。だが、僕には受ける義務がある」

南城優子の友人を殺した場合は日暮が彼を殺す。前に日暮はそう宣言していたのだった。

「いつやるかだな。今夜零時かと思ってたが、もう時間がない。気

持ちの整理もつけとき

たいだろつから、明日の夜零時でどうだ」

「すまないが、少し延期してくれないか。日曜に体育祭があるんだ」

「出しておきたいのか」

日暮は意外そうな顔をした。

「騎馬戦で、馬になるように頼まれているから。約束は果たしておきたい」

「三日後か。まあ、いいだろう。じゃあ、体育祭の終わったその夜の零時でいいな」

「それでいい」

「場所は、瀬川町病院って知ってるか。数年前に潰れて今は廃墟だ。たまに暴走族が入り

込むが、問題なければそこでやろう。また電話する」

「分かった」

真鉤の返事を聞いて日暮は立ち上がった。

「お前に悪気がなかったことは分かってる。だが、結果は結果だ。こうなっちまったから

には責任を果たさなきゃな。どっちが死ぬにしても」

真鉤は黙って日暮を見送った。玄関を出ると日暮の姿は夜の闇に紛れ、すぐに消えた。

#### 四

高校生にもなると体育祭を観に来る父兄も少なくなるものだが、観客席は盛況だった。

大声で応援する親は流石にいないもののデジカメやビデオカメラを構える者は多い。天気

も快晴で、暑いとかめんどくせえとか言いながらも生徒達は楽しんでいた。

点数に関係のない演舞などもあるが、百メートル走やリレー、棒倒しなどは全て学年対抗で点数が加算される。今年の体育祭で皆が気にしているのは、二年生と三年生のどちらが勝つかということだった。

昨年の体育祭で優勝したのはやはり三年だったが、一年と二年の点差はかなり接近していた。今年は天海東司が活躍していて、障害物競争でも一位を獲り、棒倒しでは真つ先に棒に飛びついて勝ちに貢献した。天海が同級生を煽ることはなかったが、彼の熱気が皆にも伝染したらしい。

棒倒しは攻め組と守り組に分かれて相手方の一本の棒を倒し合う競技だ。学年の男子が全員参加するためゴチャゴチャに入り乱れて何が何だか分からない状態となる。学年対抗なので一つの学年が他の学年と一回ずつ勝負を行うのだが、その二回共、二年生の棒はびくともしなかった。守り役には真鉤天がいた。

綱引きでも二年生が完勝だった。三年生は必死に顔を歪めて引いていたが、二年生は楽々と相手を引き摺って一気に勝負を決めた。学年内に誰かとんでもない力持ちがいるんじゃないかと同級生は冗談を言い合った。

アナウンス役をこなす藤村奈美は満更でもないようだった。予め用意された文面を読み上げ、競技中には適度なタイミングで劣勢の組を励ますことになる。最初のうちは気恥ずかしげな様子だったが、次第に彼女の口元には微笑が浮かぶようになっていた。

最近の彼女の顔に真鉤天と同種の翳りが染みついていたことに、奈美自身は気づいていないだろうか。

昼休みとなり、生徒達はバラバラと散っていく。父兄が弁当を作った待っている者もあ

れば、いつものように学食で食べる者もいる。藤村奈美は両親が来てくれた。途中で天海

とすれ違い、彼女は言った。

「天海君、今日は凄く頑張ってるね」

「まあね。たかが高校の体育祭だが、一度くらいは本気を出してもいいかってな」

天海はニヤリと笑ってウインクしてみせた。

奈美は真鉤の姿も見かけた。体操服姿は一見貧弱であったけれども、彼は集団競技でこ

つそりと異常な筋力を発揮させているようだった。彼にしては珍しいことだ。

奈美と目が合うと真鉤は微笑した。時折見せるあの申し訳なさそうな微笑とは違って、

本当に、嬉しそうな笑みだった。奈美はちょっと驚いた顔をして、それから彼女も微笑んだ。

藤村奈美の母親は豪華な弁当を作ってきていた。

「フォークダンスも参加出来ないの。残念ね」

奈美の吊った左腕を見て母親が言う。

「今年はフォークダンスはないのよ。プログラムにそうなってるでしょ」

「あら、そうなの。ねえ、奈美。一緒に踊りたい相手とかいなかったの」

「え、いや、その……」

奈美が顔を赤らめっていると父親が渋い顔で言う。

「母さん、今日は体育祭なんだから、そういうことを話す日じゃないだろう」

「まあそうだけど、奈美にもそろそろ好きな男の子の一人や二人いてもおかしくないですよ」

「二人もいたら困るだろう」  
父親が言って、皆で笑った。

真鉤天はいつものようにコンビニで買っていたパンを教室で食べていた。教室で食べる

生徒は七、八人いた。そのうちの一人の男子が真鉤に声をかけた。

「真鉤んとも親、来てないのか」

「ええ」

真鉤は穏やかに答える。

「うちは俺を置いて北海道旅行だよ。ひでえよな。真鉤んとこの親はどうしてんだ」

「両親共死にしましたから」

真鉤は淡々と答えた。男子生徒は平手打ちを食らったような顔を見せた。彼は噂を知らなかったのだろう。

「そうか。悪い」

「いえ、気にしないでいいですよ」

男子生徒は机に尻を載せてコンビニ弁当を食べていたのだが、真鉤の発言に自分の座つ

ている机が誰のものか思い出したようだ。

それは、島谷紀子の席だった。

「こいつも、死んじまったけどな。まあ、今になってみると、嫌な奴って訳でもなかったな」

そんなことを言いながらも彼は机から尻をどけようとはしなかった。



「いい奴でもなかったけどな。でも、まあ、殺されるほど悪い奴でもなかったよな」

男子生徒は少ない語彙を駆使して、彼なりに自分の気持ちを表現しようとしていた。

「そうですね」

真鉤は頷いて、食事を再開した。

午後の集合時刻が近づき、真鉤が一階に下りると男子トイレから天海東司が出てきた。

「やられたぜ」

真鉤に気づいて天海は自嘲気味に語った。彼の顔は青ざめていた。午前中までの覇気が消えている。

「下痢ですか」

真鉤が聞いた。

「というより下剤だ。ジュースに目一杯入ってたらしい。昼前からちょっと変だったんだ

が、休み時間になってからずっと大洪水さ。朝方に一年の女が応援だつて持ってきてくれ

たんだが、柿沢の回しもんだつたようだ」

柿沢とは三年の不良で、天海とは対立関係にあった。騎馬戦での対決を前に、柿沢は手

段を選ばないことにしたらしい。

「信用して全部飲んだんですか。君は勘がいいのに、らしくないですね」

真鉤は微笑していた。優しくてちょっと意地悪な微笑だった。天海も弱々しく笑った。

「俺はな、女の子の期待は裏切らないようにしてるんだよ」

「でも、大丈夫ですか。後半出られます」

「なんとかやってみるさ。さっき保健室で正露丸五十個ほど飲んだし、少し楽になったみ

たいだ。いや、嘘。ちつとも楽じゃねえ。先生にはオムツ履いて出たらなんて言われたぜ」

「履くんですか」

「いや、死んでも履かねえ」

「じゃあ、午後の競技は休みますか」

「それも嫌だね。俺は一度始めたことは最後までやり通す主義なんだ。必死でケツに力を入

れてりやなんとか洩らさずに済みそうだ。……だが、悪かったな。

折角馬になつてもら

うのに、負けるかも知れねえ」

「構いませんよ。僕はそんなに勝ちたい訳じゃないですから」

「それだけじゃなくて、ひよっとすると俺の洪水をまともにかぶるかも知れんぞ」

「それは困ります」

流石の真鉤も慌てていた。天海の笑みはまた青ざめていきトイレへ駆け戻る。

午後の部が始まり、天海東司はなかなか姿を現さなかった。二年

生の演舞が始まるぎり

ぎりで校舎から駆けてきたが、本番での動きはかなりぎこちないものだった。退場すると

すぐにまた校舎へ消えた。そんな天海を目ざとく柿沢を見つけ、取り巻き達と指差して二

ヤニヤ笑っていた。

体育祭のプログラムも佳境に入り、騎馬戦が開始となった。男子生徒は皆上半身裸とな

り鉢巻きを締める。寸前でげっそりした顔の天海が到着して真鉤を先頭とする馬に跨った。

近くにいた者達は天海の腹が鳴る音を聞いた。

「どうした天海、緊張し過ぎて腹壊したのか」

隣の三年の列から張本人の柿沢がからかった。百三十六キロの彼

を乗せた馬は苦しそ  
うだった。

天海は柿沢を非難する代わりに軽口で応じた。

「勝利の女神が先輩にハンデをやれってさ」

柿沢が鼻で笑う。

「オムツしてなくて大丈夫か。皆の前でお洩らししないように気を  
つけるよ」

「心配ご無用。洩らす時は先輩の顔の上でするからよ」

そんなやり取りの間も天海の腹は鳴り続けていた。

勇壮な音楽に乗って騎馬達が入場していく。二年の先頭は天海の  
騎馬で、通りかかると

同年の女子が「頑張って」と声援を送った。天海は左手で自分の  
腹を撫でながら右手を

振って返す。アナウンス席から藤村奈美も小さく手を振った。天海  
は余裕のなさを隠して

ウインクし、真鉤は淡い微笑を浮かべていた。

場内に三学年の列が並び、体育教師の合図で三年が脇へ寄って一  
年と二年が対峙した。

太鼓の音が次第にペースを上げる。ただしカセットテープだが。

笛の音と共に騎馬達が向かいの敵へ突進した。自然と雄叫びが上  
がる。肉と肉がぶつか

り合う響き。白崎高の騎馬戦は相手の帽子を奪うようなソフト化さ  
れたものではなく、相

手の体をねじり倒して地面に落とした方が勝ちという昔ながらの荒  
々しいものだった。観

ている方にも自然と力が入ってくる。

ある程度体勢が崩れて勝負あったと思われるものには教師が割っ  
て入り判定をつけてい

く。負けた方は騎馬を解く。やがて、全ての勝負が終わった。

天海東司の騎馬は勝者として残っていた。彼は腸を刺激しないよ

うに浅い呼吸を小刻みに続けながら、不敵な笑みをキープしていた。かなりの苦戦だったが勝ったことには変わりがない。

「天海、洩らさなくて良かったな」

柿沢があからさまな大声で言った。薄々事情を察し始めた二年男子達の顔には天海への同情と柿沢への敵意が湧く。

負けた者達も騎馬を組み直し、二年と三年の列が入れ替わった。一年と三年の対決となる。

その間、天海は目を閉じて自分の内臓と戦っていた。

勝負が終わった頃、天海は目を開けて大袈裟に驚いてみせた。

「おや、柿沢先輩、勝ったのか。勝負の前に重みで勝手に潰れると思ってたぜ」

しかし台詞の後半はかなり苦しげなものになっていた。余裕の笑みは引き攣っている。

馬の後ろになっている二人は心配そうに天海の尻を見ていた。

柿沢は何も言わず、残忍な笑みを浮かべていた。

一年が引き下がり、三年の前に二年の騎馬が並んでいく。ここで初めて天海の騎馬と柿沢の騎馬が向かい合うことになった。

柿沢に、天海の瞳は限界まで研ぎ澄まされたような鋭い視線を送っていた。馬の頭を担

当する真鉤は無表情に天海の体重を支えている。

観客が固唾を呑む中、体育教師が笛を鳴らし、男達は雄叫びを上げながら駆けていった。

天海は勿論黙っていた。柿沢の馬は乗り手の体重のため足が遅く、素早く回り込んだ天海の馬が真横からぶつかっていく。

「死ね馬鹿っ」

柿沢が右拳を振り回した。明らかに天海の腹を殴ろうとしていた。天海はなんとか手で

払ったが、前屈みになった彼に柿沢が体重をかけてのしかかる。拳のルール違反に体育教師が注意しようとする。天海と柿沢が絡み合った。天海の苦悶の表情。

片方が馬から転げ落ちた。客席からどよめきが上がった。

落ちたのは柿沢だった。出産間際の妊婦のような呼吸をしながら天海自身も驚いている

ようだった。仰向けに転がる柿沢は白目を剥いて悶絶していた。二年の女子のどよめきが

歓声に変わった。教師が柿沢の頬を叩くが目を覚まさない。

「脳震盪だろう」

教師が言った。全ての騎馬の勝敗が決まった頃、柿沢は担架で運ばれていった。男性教

師が六人がかりだった。柿沢の股間が濡れていたのを見つけた二年が早速失禁の噂を広め

始める。「大の方じゃなくて良かったな」と誰かが笑った。

退場の際、天海は声援に応えて手を振っていたが、天海の騎馬だけが本来の出口より手

前で運動場を出ていった。天海の腹が悲鳴を上げ続けているためだ。天海は馬から降りて一言、真鉤に言った。

「やったな」

真鉤が答える前に、天海は尻を押さえてトイレに飛び込んでいた。真鉤は微笑していた。プログラムが続き、三年との点差について

皆がざわめいている間も、真鉤はずっと淡い微笑を浮かべていた。今日という日が彼にとって至福の時であるかのように。

優勝は二年だった。最後までトイレに入り浸っていた天海も満足

げだった。柿沢の姿はなかった。意識は戻ったが不貞腐れて早退してしまったらしい。表彰式の後で校長の手短な挨拶があり、藤村奈美の「それでは皆さん、お疲れ様でした」というアナウンスで体育祭は幕を閉じた。

体育祭の様子をデジカメで写した父兄の一人が奇妙な画像を見つけた。騎馬戦における二年と三年の大将同士の対決。天海を押し潰そうとのしかかる柿沢の左頬に、何かが重なって写っているのだ。ぶれているのか元々そうなのか、靄のような半透明のそれは、人間の右手首にも似ていた。だが天海の両手はきちんと写っている。彼は暫く首をかしげて吟味した末、その画像を削除した。

一瞬だけ後ろの馬から手を離し、柿沢を超高速の平手打ちで気絶させたのは真鉤天だった。

## 五

瀬川町病院は郊外にあった三百床ほどの総合病院で、当時は割と繁盛していた筈だ。院長が不祥事を起こしてやむなく閉鎖となったらしいが、そんなことはこれから行われる殺し合いとは全く関係ない。

夜空には月が出ていた。半月と満月の中間くらいで、窓越しに充ちた光が差し込んでくる。尤も、ここで待ち合わせる二人には僅かな光さえも不要だが。

殺人鬼・真鉤天は灰色のシャツと深い緑色のズボンという服装だ

った。軍手を填めてい  
る両手は何も持っていない。

彼は、どんな表情も浮かべず、元病院の外来受付の広間に、静かに立っていた。

内部は散らかっていた。空のペットボトルや缶ビール、スナック菓子の袋、待合用の長

椅子には汚れた毛布が載っている。面白がって廃墟を訪れる客や暴走族の仕業だろう。玄

関の自動ドアは半開きの状態で止まっている。喧嘩があつたのか、受付カウンターに血痕

が残っていた。古いものだ。

真鉤は少し顔を俯かせて耳を澄ましている。

ロック音楽が移動している。カーオーディオを大音量でかけながら誰かが病院周辺を回

っているらしい。若者達の喋り声も聞こえる。病院の門の近く、五、六人。

真鉤は腕時計を見た。安物のデジタル時計が二十三時五十九分五十九秒を指し、次の瞬間、全ての数字がゼロに変わった。

「よお、お前ら、久しぶりだな。俺の顔覚えてるか」

門の近くで新しい声。

「誰だっけ」

別の男の笑い声。

「良く見てみるよ。ほら、この目には見覚えあるんじゃないか」

十秒ほどして声が言った。

「お前ら、今夜はここに近寄るな。どっか他のところで遊べ。それから俺のことは忘れる」

若者達の声が聞こえなくなった。やがて、大音量のロックも遠ざかって消えた。

黒い影が病院玄関に近づいてくる。長身の影の動きは悠然として

優雅でさえあった。

自動ドアの間を抜け、吸血鬼・日暮静秋が到着した。  
「少し遅れたか」

日暮が言った。黒の長袖シャツと同色のズボン、更にウォーキングシューズも黒で固めている。彼は素手だった。

「一分だけだ」

真鉤が応えた。

「お前は早くから来てたみたいだな」

「十五分前に来た。遅刻するのが嫌いだから」

それを聞いて日暮は口の片端を軽く上げて笑った。

「悪かったな。俺に有利な時間にさせてもらって」

「日暮君」

真鉤が珍しく相手の名を呼んだ。

「僕を簡単に殺せるとは思わない方がいい」

冷たい声音に、得体の知れないものが含まれていた。

差し込む月光を背に、日暮静秋の長い髪が逆立っていた。首や手の皮膚も粟立っている。

日暮の両目が赤い光を発した。彼は両掌を互い違いに向かい合わせ、人差し指の爪で両

手首に切り込みを入れた。流れ出す血液がスルスルと動いてまとまった形を取り始める。

それは長さ一メートルほどの細い鞭となった。二本の赤い鞭は地面に触れることなく蛇のようにうねった。日暮の指は鞭に触れるか触れないかという状態で自然に垂れている。

真鉤は両手を背中に回し、シャツの下に隠していた二つの凶器をシュルリと音をさせて抜き出した。右手に握るのは刃渡り三十センチの剣鉞で、ものを断ち切りやすいように切



先側が少し膨らんで重心が前にある。左手は刃渡り二十センチ超の鎌だった。木製の柄には洗っても落とせない血痕が残っている。刃は草を刈りやすいようにギザギザになっていく傷口を作るのに役立つだろう。真鉤はその二つの凶器を腰の高さで、少し外側に向けた形で保持していた。

「始めようか」

目を光らせて日暮が告げた。真鉤は動かない。

「決められたサインだとか、手を出してはいけなとか、えらく表現を工夫したもんだな」

囁くように日暮が言った。カラオケボックスで真鉤が使った言葉だ。

「流石に正直には言えなかったか。死にかけを殺しても気持ち良くないってな。なあ、真鉤」

真鉤は、無反応だった。

日暮が音もなく動き出した。滑るように、僅かに回り込みながら真鉤に接近していく。

真鉤は目だけで日暮の動きを追い、体はまだ微動だにしない。既に腰は浅く落としていく。

日暮に停滞はなかった。両者の距離が次第に縮まって、五メートルを切った時にいきなり

真鉤が動いた。鋭い呼気はどちらのものか。血の鞭が風を切る音。二人は一瞬ですれ違

い、再び向かい合いながら距離を取った。

「四十六cc」

日暮が告げた。

真鉤の右手首でミミズのようにのたくるものがあつた。鉈で切り払った鞭の切れ端が、  
軍手と袖の間に取りついて皮膚に潜り込もうとしているのだ。それが素早く自分の体内へ  
消えるのを、真鉤は黙って見つめていた。

日暮が言ったのは、真鉤に入った自分の血液の量だった。

「まずいことになったな、真鉤」

気楽な口調で喋る日暮の左頬には、抉れたような深い傷痕が走っていた。真鉤の鎌がや  
つたのだ。しかし血は流れない。

「俺の血はお前の中で拡散して血流を悪化させる。もう少し量を足せば血管や内臓を破つ  
て回ることだって出来るんだぜ。いきなり終わっちまったな」

月の光だけで常人には識別困難だろうが、日暮が説明している間にも真鉤の唇がチアノ  
ーゼを呈し始めていた。

だが、真鉤天はその唇の両端を笑みの形に吊り上げた。全く笑っていない瞳は薄く膜が  
かかったようで、赤い悦楽の世界を覗いている。

「そうは思わないな」

真鉤は小さな声で言った。

上体が床に触れそうなほどに姿勢を低くして、今度は真鉤が接近を始めた。

藤村奈美の携帯電話が鳴り出した時、既に夜の十一時半を回っていた。  
いた。

体育祭は楽しかったが家に帰ってみるとかなりの疲れを自覚した。他の生徒と違ってテ

ントの下だったから直射日光は避けていられたのに、やはり体力が

落ちていようだと奈美は思う。今日は勉強も早めに切り上げて寝るつもりだった。詩も全く進んでいないが後回しだ。

携帯の呼び出しメロディに虚を衝かれ奈美はドキリとした。電話番号はクラスメイトなど何人かにお義理で知らせてはいるが、長話は苦手だったし、実際に電話がかかることなど滅多になかったからだ。

誰だろう。嫌な予感がする。画面を見ると『南城優子』となっていた。恋人の吸血鬼を良く殴っていた彼女だ。この間番号を覚えてもらったので登録しておいたのだった。

彼女から奈美にかけるような用事はないと思うのだが。奈美は少し迷った末、携帯を取り上げて通話ボタンを押した。

「藤村です。南城さん……」

「そう、南城優子。こんな時間に悪いわね」

南城優子の声はカラオケボックスで会った時とは違い、不安げなものだった。

「いえ。でもどうしたんですか」

「静秋の奴がいないのよ。あつと、日暮静秋。あいつの家にかけたら執事が出て、静秋は

出かけてるって言うし。携帯は切ってるし」

どうしてそんなことを言うってくるのか、奈美には分からなかった。「はあ。でも、誰かの血を吸いに行ってるとかじゃないんですか」

「いや、あいつが血を吸う日は決まってるから。そりゃ、吸血鬼だし、気紛れに夜中に出

かけることはあるけど、今夜は多分、違うと思う」

「違うってというのは」

「あのさ、五日前、真鉤が殺したでしょ、五人。コンビニの事件は違うみたいだけど。いやそれでね、真鉤が殺した人の中に……私の親友が、いたの。美智子っていつてね」

「そうだったのか。奈美はちょっと驚いたが、クラスメイトだった島谷紀子のことを思い出し、衝撃はすぐに薄れていった。この一ヶ月ほどで色々経験し過ぎたようだ。」

「それにしても南城の話は妙に回りくどかった。結局何が言いたいのだろう。」

「そうだったんですか。でもそれで、どうして私に電話を」

「……。多分、静秋の奴、真鉤を殺しに行ってる」  
「えっ」

「真鉤天と日暮静秋は友人ではなかったのか。でも真鉤も南城の友人を殺したのだから。」

「でもそんなに簡単に殺し合えるものなのか。二人共人間じゃないから、いや、そういう問題ではない筈だ。」

「そんな時は真鉤を殺すって、静秋、約束してたもの。事件の後、張り詰めた顔してたから私も気になってたけど、私……何も、言えなかった」

「彼女は後悔しているのだろうか。自分の恋人が人を殺すことをか、それとも……。」

「じゃあ、日暮君は真鉤君の家に」

「いや、きつと別の場所で決闘してる。前もこんなことがあったから見当はついてるの。」

「瀬川町病院って知ってる。もう潰れたけど」

「名前は聞いたことありますけど、場所は良く知りません」

「大丈夫、私知ってるから。ねえ、一緒に行ってくれない」

「え、どうして私が」

奈美は面食らった。そりゃあ全く関わりがないこともないが、二人の殺し合いに立ち会

ったところて何が出来る訳でもない。奈美はただのか弱い人間なのだ。

「だって、私一人じゃ怖いもの」

南城優子の答えに奈美は呆れた。やっぱり最初のイメージと違う。南城が続ける。

「それに、あなただって真鉤と付き合ってるんじゃない」

「いや、別に、付き合ってるという訳じゃ……」

奈美は何故かドギマギしてしまった。

「あら、そうなの。まあ、でも関係者でしょ。このまま真鉤が死んだら後悔するわよ。だから一緒に来て」

南城の強引さに背中を押される形で、奈美は仕方なく承諾した。

南城の口調が切迫していたのと、決闘が本当ならば真鉤を見ておかねばならないと思ったからだ。正直、凄惨な

場面はもう見たくない。でも、自分には立ち会う義務がある。或いは権利が。焼却炉の中で膝を抱えていた真鉤の姿を奈美は思い出した。

パジャマを私服に着替えた。テレビの音が聞こえるから両親はまだ起きている。念のため毛布の下にクッションを入れて膨らみを作り、電灯を常夜灯に切り替えた。忍び足で廊下を歩き玄関の扉を開閉し、外から鍵を掛けた。自分が無事に戻ってこられるように祈りながら。

十五分ほど歩くと、待ち合わせの場所に南城優子が立っていた。彼女も私服で、緊張していた。

「行きましよう」

南城は言った。持ち前の天真爛漫さが消え、整った顔を濃い不安の影が覆っていた。

「前にもこんなことがあったって、真鉤君のことですか」

並んで歩きながら奈美は尋ねた。急に拳が飛んでくると困るので少し距離を取っている。

「いや、静秋はこれまで色々変なのと戦ってきたからね。人食い鬼とか黒魔術師とか同族

とか、私の父親とか。そういうのに全部勝ってきたから、私は心配してないんだけど」

友人と殺し合うということについては彼女は何とも思っていないようだった。そういえばカラオケボックスでも真鉤に対し嫌悪感を露わにしていた。

「心配してないんだけどね。心配してないけど……ほら、真鉤……あいつ、私にも分かる

んだけど、あいつ……化け物よ。あんな得体の知れない奴……ああ、静秋が死んじゃった

らどうしよう」

南城は単に恋人の身を案じているのだった。自分はどんなのだろう。奈美は思う。決闘

なんてあまり実感が無い。真鉤が死んだら自分はどう感じるのだろうか。焼却炉の中の真鉤

をまた思い出す。そして、道に転がる幾つもの惨殺死体を。

真鉤が死ぬ筈はない。彼が不死身なのは奈美も良く知っている。でも日暮も不思議な力

を持っている。それに、もしかすると、真鉤はまだ、死にたがっているかも知れない……。

「止められそうですか」

奈美は聞いた。南城は首を振る。

「分かんない。静秋が勝つんなら別に構わないんだけど。大体、真

鉤がミツチを殺したか

ら悪いのよ。互いに不可侵条約を結んでたのに」

途中、不良っぽい服装の男が二人、奈美達を見て追いかけてきた。「ねえ、君ら、何処行くの」

ヘラヘラ笑って尋ねた相手の顔面にあっさり南城の拳が打ち込まれた。

「邪魔」

啞然としているもう一人も正拳突きで倒し、南城は停滞なく歩いていく。奈美も慌てて

ついていきながら振り返ると、一人の鼻は潰れて曲がっていた。

空地の横に病院の廃墟が見えてきた。勿論灯りなど点いていない。腕時計を見ると午前

零時十三分だった。

「やつぱりやつてる……」

南城が呟いた。奈美にもその音は聞こえた。素早い足音や、金属が固いものとぶつかる

響き。月光の下、それは意外なほどに静かでささやかだった。

正面玄関のガラス戸越しに二つの影が動いているのが見えた。南城の歩みが遅くなる。

これ以上近寄って、どうするということなのか。奈美の心臓は鼓動を速めていく。

南城優子が、玄関から足を踏み入れ、奈美もそれに続いた。

広間は血の海だった。バケツ一杯の血をひっくり返したようなひどい有り様だ。どちら

の血なのか。

「静秋っ」

南城が叫んだ。影の一方がこちらを振り向いた。もう一方が光るものを振った。前者が

素早く離れるが、その体から何か塊が飛んでいく。追いつがろうとした影が急に転びそう

になった。二つの影は充分に距離を取る。

「よう、来たのか」

南城に声をかけたのは日暮静秋だった。彼の瞳は豆電球が入っているみたいに赤く光っていた。顔には幾つもの傷が走っていた。刃物によるもの。血は止まっているようだが、

頬などは大きく抉れて白い骨が見えている。顎の下にも傷があった。日暮の右腕が肘の部分で断ち切られていた。今の攻防で失ったのだ。断端から数本の細

い糸が伸びていく。赤い糸だ。それは生き物のように動いて、床に落ちた右腕に繋がった。

糸に引つ張られて持ち上がり、魔法みたいに元の部分に吸い寄せられて繋がった。日暮は

左手で右腕をしっかり押さえた。彼もまた、真鉤のように異常な治癒力を持っているらしい。

ただし、日暮の左手がさっきまで触れていた場所、シャツの破れた脇腹はパツクリと

裂けて内臓が見えていた。それでも出血がないのは血を操るといっ彼の能力のためだろうか。

対する真鉤天は、頭から血をかぶったように全身が染まっていた。元の色が分からなく

なった衣服はあちこちがズタズタに破れている。袖の端や髪の毛の先から血の雫が落ちる。

赤い軍手は右手に大きな鉈を握っていた。彼が通行人を殺した時に使ったもの。左手には

草刈り鎌があった。どちらの刃にも血はあまりついていなかった。

血みどろの顔はとろけるような笑みを浮かべたまま凝固していた。異世界の虚ろな笑み。

血で覆われた眼球はちゃんと見えているのか分からない。



一応その目が動いて飛び入りの奈美達にも向けられたが、虚ろな笑みには何の変化もなかった。やはり来るべきではなかった。奈美は後悔した。

左目からは血が流れていた。下瞼を押して勢い良く溢れていたが見ているうちに止まる。

首筋の小さな傷から噴いていた血も止まった。

日暮と真鉤の中間の床に、奇妙なものが落ちていた。長い部分で十五センチくらい、厚みが二センチくらいの白い板。スポンジのように見えるそれに赤い棘が沢山生えている。

棘は血で出来ていた。スポンジのような板は、真鉤の靴底の一部だった。真鉤が体勢を崩したのはこのせいだったらしいが、日暮がどのようにこれを行ったのかは奈美には分からなかった。

「ご、ごめん。今の、私のせいだよね」

南城が血の気の引いた顔で日暮に謝った。右腕を切られたことだ。「危ねえぞ。離れて見てろ」

日暮が南城と奈美に言った。まだ右腕は押さえたままだ。南城は黙って頷き、真鉤から

目を離さず壁沿いに歩いて広間の端に移動した。奈美もそれに倣う。どちらかという日

暮と近い距離になってしまったが、別に日暮の味方をしている訳でないことは真鉤に分か

つて欲しい。いや、今の真鉤は何も考えていないかも知れない。奈美は真鉤の応援をした

い訳でもない。ただ、こんな馬鹿らしい戦いはやめて欲しいだけだ。だが、既にそれを言

い出せる状況ではなかった。

日暮が向き直るのを待っていたかのように、真鉤が二つの凶器を

翳して襲いかかった。

真鉤天と日暮静秋。二人の魔人は、自分の命を削りながら相手を死へ追い込むゲームをいつ果てるともなく続けていた。

日暮は血の鞭を使い真鉤の体に少しずつ自分の血を打ち込み、全身の動脈を破壊して出血を持続させた。心臓も脳も傷つけたし頸動脈も十数回は破った。目の血管を破壊し網膜を荒らし、真鉤の視力はかなり落ちている筈だ。肺に血を溢れさせ呼吸を妨害もした。肝臓も腸も腎臓も破壊した。脊髄を幾度も傷つけ、血管沿いの神経も何十回となく切断した。脳の血流を停止させたりもした。

だが、それでも真鉤は死ななかった。皮膚と肉を引き裂いて噴き出す血液もすぐに勢いが弱まり傷が塞がってしまう。脳や脊髄の損傷も彼の動きには殆ど影響がないようだった。血液を操る日暮の力は距離が近いほど強くなる。日暮は一度真鉤の首に直接触れて血で延髄をほぼ切断した。だが真鉤の動きが止まったのは一秒ほどで、続けて脳を破壊しようとした日暮の攻撃は三度目で左腕を掴まれることとなった。無理矢理引き剥がした際に肉を百グラムほどちぎられた。真鉤の不死身ぶりは底なしのようであった。流失した血液もリアルタイムに再生しているらしい。逆に、自分の血液を使っているため日暮も貧血に近づいていた。既に二リットル以上を消費した。日暮の全身の血液は約

五リットルで、常人なら短時間に三分の一を失えば致命的となるが、日暮の場合は残りも五分の一でもなんとか生存は可能だ。だが今のやり取りを続けていけば確実に死へ近づくことに変わりはない。

真鉤の戦術は単純だった。強大な腕力を使って相手の急所に武器を振り下ろすのみだ。スピードは必ずしも日暮に劣っている訳ではない。だが繰り出した刃は八割方空を切る。

真鉤の動きを読んでいるかのような、日暮の見事な反応だった。なめらかで優雅にさえ見える日暮の動きに比べ、真鉤の動きは単刀直入で地味だ。それでも鈍と鎌は時折日暮の皮膚を裂き肉を削っていく。日暮は刃を身に受けながらも上体を反らしたり身をひねったりしてダメージを最小限にしてしまう。腹壁を裂いたが内臓までは達せず、左頸動脈を切断しても致命傷にはならなかった。血管の切断は日暮にとってはダメージとならない。彼は

自分の血液の流れを完全にコントロール出来るのだから。真鉤は繰り返し破壊される重要臓器の修復と失われる血液の再生にエネルギーを奪われている。少しずつながら真鉤の再生速度が遅くなっていくことに日暮は気づいているだろうか。再生には材料が必要だ。四日前に自分の体を焼いて体重が半分になった。食べることで二十キロは戻ったが、本来の余力はない。ただ、それは大館と出くわして結界に大量の血を使った日暮も同じことだ。

互いにそんなことを言い訳にしたりはしない。二人はただ黙って殺

し合う。

日暮は自分の能力が及ぶ距離をキープしていた。真鉤が突進してきた際には直接相手の体に触れてダメージを大きくする。と、闘牛士のようにぎりぎり日暮がすれ違った瞬間、

真鉤の鎌が後ろざまに振られた。余裕を持って躲した筈が左頬から鼻筋を切り裂かれ、削

られた骨片が飛ぶ。日暮が驚愕の表情を見せる。真鉤のシャツの左袖が妙に短い。いや、

腕が伸びているのだ。真鉤は戦いが始まってから十数分の間に、秘かに左腕を骨格ごと十センチ近く伸ばしていたのだ。彼は体格を自在にコントロール出来るらしい。

間髪入れず向き直った真鉤の大鉦が日暮の脳天へ振り下ろされた。上体を反らして避けるには近過ぎ、体を左右にずらしても肩から胸深くまで割られるだろう。日暮の赤い目が細められた。

肉と肉の打ち合わせられる音が、静寂の広間に響いた。

日暮は、振り下ろされた鉦を両掌で挟み、真剣白刃取りをやってみせたのだ。僅かでもタイミングがずれていたら即死だったろう。いや、刃には赤い鞭が幾重にも巻きついていてる。まず鞭を当ててから手で挟み込んだものか。

だが真鉤の筋力を支えきれず日暮の両膝が崩れた。真鉤の鎌が長い左腕によって横薙ぎに打ち込まれる。と、鉦に巻きついていて鞭の先端が素早く動き、刃の硬度と鋭さで真鉤の右手人差し指から小指まで四本、関節部分で切断してのけた。真鉤の手から鉦が落ちる。

瞬間、日暮が後方へ跳びすさる。鎌は肋骨を一本切っただけで通り過ぎた。真鉤が右手を振ると何かが日暮の顔面へ飛んだ。

「うつむう」

呻きが日暮静秋の口から洩れた。

藤村奈美には二人の攻防を殆ど把握出来なかった。要所での腕の動きは霞んで見えるほどだ。

彼女はただ息を詰めて目を凝らし、立ち入ることの出来ない部外者として見守るだけだ。

どちらが優勢なのか分からない。飛び散る血と肉片がどちらのものかも分からない。

ただ、互いの体を傷つけ合うようなことはもう、やめて欲しかった。既に何人も人が死

んだ。これ以上死者を増やしてどうしようというのか。確かに原因は真鉤にある。でも、

二人は友人同士の筈だ。こんなことはすべきではない。「やってしまった」と呆然と呟いた真鉤の顔を思い出す。焼却炉でのことも。

いい加減にしてと叫びたかった。しかし今の彼女には、ここで見守るしか出来ない。

奈美と南城が来て戦いが再開されてから、どれだけの時間が経ったのだろう。三、四分

かも知れないし、もう二十分近く過ぎたかも知れない。腕時計を見るために彼らから目を離すのはためわれた。

徐々に両者が大きく距離を取り、二人の姿がはっきり分かるようになった。日暮はいつ

の間にか真鉤のものだった鉞を左手に握っていた。

右手は、傷だらけの顔の、右目辺りを押さえていた。そこから何かを摘まむ。ブジュツ、と嫌な音をさせて細長いものが出てきた。

「意外に器用なんだな。親指だけで挟んで投げたのか」

日暮が床に放り捨てたのは、根元から断ち切られた人間の指だった。軍手の布地に巻か

れているから真鉤のものだと分かる。人差し指か中指だろう。日暮の声は、何処かから息が洩れているような不気味なものになっていた。喉に開いた裂け目のせいか。

日暮の赤く光る瞳は、一つだけになっていた。右の眼窩には潰れた肉が詰まっている。

「器用なのは君だ。あんなふうに鉞を止められるとは思わなかった」真鉤天が初めて喋った。仮面の笑顔でいつもの口調なのが逆に不気味だった。彼はさっ

きよりも痩せて見えた。右手の指が親指以外ない。彼はその場に屈み込み、鎌を持った左手で落ちた指を拾い集めた。元の位置に押しつけていく。一本がうまく繋がるまで約十秒。

切断の痕跡は軍手の切れ目だけとなる。

「時間がかかっているな。流石のお前にも体力の限界があつたか」

ゆっくり動かして確認する指の間から、血の膜で覆われた真鉤の瞳が日暮を見つめてい

る。人差し指がない。日暮の横に落ちたのがそうだろうが、拾いに行くことはしなかった。

「君もかなり血を使っている。そろそろ危ないんじゃないか」

「大丈夫だ。お前を殺した後で補給する」

日暮が鉞を右手に持ち替えた。戦いが再開されようとしている。タイミングは今しかなかった。奈美は深呼吸して勇気を奮い起こ

し、二人の魔人に言った。

「あ、あの……もう、やめませんか」

声がちよつと裏返ってしまったが恥ずかしいと思う余裕はなかった。

日暮が振り向いた。真鉤は動かない。

「何をだい」

日暮の声はむしる優しかった。

「あの、殺し合いを、です。こんな、馬鹿馬鹿しいこと、もう、やめませんか」

「確かに馬鹿馬鹿しいが、やめることは出来んな」

日暮は答えた。

「でも、真鉤君だつて、悪気があつてやったことじゃないんだし。彼だつて、苦しんで……」

「分かつてるさ。だが俺も今、悪気があつてやってるんじゃない。

俺も苦しんでる。それ

でも、やるべきことはやらなくちゃな」

「藤村さん、ありがとう」

真鉤が奈美に言った。彼は相変わらず血塗れだったが、異様な笑みは消えていた。

「でも、彼の言う通りだ。やるべきことはやらねばならない。……どちらかが死ぬにしても」

奈美は南城優子に助けを求めようとした。だが振り向いてみると南城は水中で息を止めているような、珍妙な表情で固まっている。緊張と心配のあまり思考停止してしまっているのか。

なんとかしなければ。だが奈美が口を開くより早く真鉤が走り出

した。一直線に日暮の方へ。

日暮が右手の鉈を構えるかと思えた刹那、その手から銀線が飛ぶ。真鉤に投げつけたのだ。だが鉈は何もない空間を通り抜けた。

真鉤が跳躍していた。激突を避けようと日暮が横にステップする。「おっ」

空気の洩れる声で日暮が驚きを示す。

真鉤はまだ落ちていなかった。右手の指先だけが触れた状態で、あり得ない角度で天井にぶら下がる真鉤を奈美は見た。

天井を蹴って改めて真鉤が跳んだ。日暮も横に避けたが間に合わず、二人の体が床に倒れた。

真鉤の右手が日暮の右足首を掴んでいた。日暮が振りほどこうとして真鉤の指が二本ち

ぎれた。まだ繋がりが弱かったのだろう。だがその間に真鉤の鎌が、呆れるほどあっさり

と日暮の右膝を切り落とす。血が噴いたのは一瞬だけだ。

真鉤の背中に鉈が突き刺さっていた。心臓のある場所だが刺さりは浅い。さっき通り過

ぎた筈なのにいつの間にかどうやって刺さったのか奈美には想像出来なかった。鉈の柄には血の糸が絡んでいる。

日暮が先に片膝で起き上がった。真鉤から離れるかと思ったら、逆に近づいて鉈の柄を

強く叩いた。鉈が深く進んだ。切先は胸から抜けたかも知れない。日暮は手を離さない。

その手から鉈を伝い、大量の血が真鉤の背中に滑り込んでいく。

ズバンと凄惨な音をさせて真鉤の背中に爆発した。ちぎれた小さな



肉片が周囲に飛び散っ

た。だが真鉤は身を起こしざまに鎌を振った。片足の日暮は躲しきれなかったようだ。よ

るめきながら離れた日暮の左首筋から肩にかけて深い切り込みが入っていた。

「いつてえ」

日暮が唸る。

真鉤は立ち上がりかけて両膝をついた。彼の胸が見えた。直径二十センチほどの巨大な

穴がそこに開き、向こうの景色が見えていた。心臓が、なくなっている。

「だが、もう終わりだな。これをお前の脳味噌にぶちかます」

日暮の右掌の上に、赤い球体が回っていた。彼の血で出来た凶器。左腕は力なく垂れて

いる。流石の吸血鬼も神経を繋ぎ直す余裕はないようだ。

真鉤は膝をついたまま動かない。意識は既にないのかも知れない。だが左手はしつかり

と鎌を握っている。俯いた顔に、あの虚ろな笑みが復活している。

真鉤の状態を見極めようとしているのか、日暮もまた動かなくなった。真鉤にまだ余力

があった場合、迂闊に近づいて止めを刺されるのは日暮の方かも知れないのだ。しかし、

観察していたのは数秒だ。彼は左の膝を軽く曲げ、片足で小刻みに進んでいく。

焼却炉の中にいた真鉤の顔。あの時彼は何と言ったか。まだ生焼けだからとか何とか、

他人事のように言ったのだ。

真鉤はもう、動かないかも知れない。

嫌だ。

「……もうやめて……」

乾ききつた喉からやつと掠れ声が出た。奈美の全身は震えている。自分の心臓の速い鼓動を感じる。苦しい。このまま壊れてしまいそうだった。

日暮はやめなかつた。また一步、二歩と近づく。

「南城さん、止めて。どつちかが死んじやうわよ」

奈美は南城優子にすがつた。原因は彼女の友人を殺したことなのだから、彼女が許すと

言ってくればいいのだ。こんなに二人を追い詰めておいて、許さないなんて彼女が悪い。

切羽詰まつた奈美はそんなことまで思い始めていた。

だが南城はやはり真つ赤な顔で固まっていた。彼女の方が先に壊れてしまつたみたいだ。

こんな時に。涙が溢れて奈美の視界が滲む。

「ねえ、お願い、何か言つて。もういいって言つてよ。二人を止めてよ」

焦つた奈美は南城の肩を掴んで揺さぶつた。

突然南城が動いた。左頬に衝撃。あれ。奈美はよろめいて尻餅をついた。

「あ、ごめん」

南城が自分の右拳を見て、奈美を見て、呆然と言つた。左頬が凄く痛い。もしかして、

殴られたのかも。え、どうして。奈美も訳が分からなくなって動けない。涙がどんどん溢

れてくるのは痛みのためか、それとも……。

「ごめんってば。勝手に手が……痛かつた、ごめんね。泣かないでよ」

立ち上がれない奈美に南城が屈んで背中を撫でてきた。それでも涙は止まらない。

「泣かないで、ごめんってば、ごめわああああん」

急に南城が泣き出した。苦しいくらいに奈美を抱き締めて大声で

泣き続ける。吊った左腕が痛い。

「うわーん、うわわーん、わあーん」

南城もずつとこらえていたのだろつ。そう思うと奈美も急に張り詰めたものが溶けてし

まい、泣き出してしまった。涙が益々滲んできて、ヒュー、ヒヤク、と肺がヒクつく。

南城が泣きながら頬を寄せてきた。涙で濡れた頬。それは奈美も同じか。益々大声になっ

て南城が泣く。

「えーん、うえええーん、ええーん」

「あの一、君達、何やってますか」

抱き合つて泣く二人に日暮の呆れ声がかかった。南城が泣きながら言つ。

「だって、だって、静秋が死んじゃつたら、嫌だもん」

「泣くなよ。仕方ないだろ。人間死ぬ時は死ぬ。人間じゃなくても死ぬテツ」

声が倒れた。床にぶつかる鈍い音。奈美は涙を拭つてそちらを見た。日暮が俯せに倒れ

ている。一瞬、真鉤が攻撃したのかと思つたが、彼は元の姿勢のまま固まっている。片足

のためか日暮が一人で転んだらしい。

「貧血だ」

右掌にあつた血の球がみるみる小さくなって体内に戻される。日暮も殆ど余力がなかつ

たのだ。

「あの、ヒヤク、もう、やめてくれますか」

奈美は聞いた。

「そうだな。君らを見てたらやる気が失せたよ。それに今、優子に殴られたろ。これでお

あいこつてことで」

何がどうおあいこなのか良く分からなかったが、奈美は頷いた。

「優子。俺の足、取ってきてくれないか」

日暮が言うと南城は泣きながら立ち上がり、ちぎれた日暮の足を拾いに行った。奈美も

真鉤が心配だった。残った涙を袖で拭い、膝をついたままの真鉤に歩み寄る。胸には大き

な穴が開いたままだ。目を血の膜が覆っているため見えているのかどうか分からない。

前に立つと鎌で切られないだろうかとふと思ったが、大丈夫という確信はあった。真鉤

の虚ろな笑みは消えている。

「真鉤君」

声をかけると、真鉤は小さく「すまない」とだけ言った。この人はいつも謝るばかりだ。

急に熱いものが込み上げてきて、奈美は右腕で真鉤の頭を抱き締めた。いや、寸前で素

早く頭を引いて躲されてしまった。何、折角私が……。ひどい。

「君の服が血で汚れる」

真鉤に指摘されて気がついた。服やギプスに血がついたらまずいことになる。こんな時

にも気を遣う真鉤に、奈美は愛しいような腹立たしいような複雑な気持ちになった。

戦いは終わった。

南城優子は分以上泣き続けていた。日暮が決まり悪そうになだめていた。奈美は真鉤

の指を探して拾い、血みどろの右手に繋いでやった。

「違う。中指と人差し指が逆だ」

真鉤に言われて奈美は苦笑した。真鉤も微笑していた。

南城がやっと泣きやんだ頃には、真鉤と日暮はなんとか歩けるく

らいになっていた。日

暮の右目は潰れたままだったが、数日で治ると彼は言った。真鉤の胸の穴に、新しい小さ

な心臓が動いているのが見えた。彼は広間にあつた毛布で何度も血を拭いた。

「新しい靴を買わないといけない」

真鉤の靴底は引きちぎれていた。

「服もだろ」

日暮が付け足した。彼の服もボロボロになっていたが。敵同士でなく、友人の口調だった。

「別にあんたを許した訳じゃないからね」

まだ時折しゃくり上げながら、南城優子が真鉤に言った。

「分かっています」

真鉤は頷いた。

「ただね、今日はね、ほんと、とにかく……あつ、藤村さん、ごめんね。歯、折れてない」

「大丈夫です」

奈美は笑顔を作ってみせた。左の頬はまだズキズキ疼いていたけれど。鼻を折られなく

て良かったと奈美は内心思う。

「本当にごめんね。じゃあ、お休みなさい」

「お休みなさい」

奈美は挨拶を返した。軽く手を振って、日暮と南城が病院の玄関を出ていった。日暮は右足を引き摺っている。

「ああ、疲れてフラフラだ。優子、俺を背負ってくれないか」

「何甘えたこと言ってるのよ」

早速南城の拳が飛んだ。殴られてよろめいた日暮の手を南城が掴み、二人は、手を繋い

で去っていった。

「帰りましようか」

真鉤が奈美に言った。二人は並んで廃墟を後にした。

真鉤の全身はまだ真つ赤で、こんな姿を誰かに見られたら大騒ぎになるだろう。でもきつと、見られないだろう。

そういえば、あの時の真鉤の動き。奈美が抱き締めようとする素早く躲した。真鉤に

はまだ充分余裕があったのではないか。もしあのまま日暮が近づいていたら真鉤はどうし

ていたのだろう。躲したろうか、反撃しただろうか、それとも……。

奈美はそれを真鉤に尋ねたりはしなかった。

あの二人は手を繋いでいた。奈美は真鉤の手を見た。軍手は脱いでいるけれどやはり血塗れだ。

でも奈美は、勇気を出して、真鉤の左側に回り込み、右手で真鉤の左手を掴んだ。真鉤

はちよつと驚いた顔をしたが何も言わなかった。

「南城さんみたいに殴ったりはしないから」

奈美が言くと真鉤は苦笑した。

真鉤の手は血で湿っていたが、温かかった。

月の光に照らされながら、二人は黙って歩いた。特に喋ることはなかったし、それでもいいような気がした。

ただ一つだけ、奈美は思い出して真鉤に言った。

「今日の体育祭、楽しかったね」

「そうですね」

昼に見た、あの温かな微笑を真鉤は浮かべていた。

戻る

## 第六章 何故助けた

### 第六章 何故助けた

—

火曜日の放課後、天海東司が屋上で腕立て伏せを始める前に考えたのは、休肝日をいつにするかということだった。酔っ払うのが悪いことだとは思わないが、肝硬変で腹水を溜めるのはかつこ悪いし赤っ鼻にもなりたくない。まだ若いのだから先々のことも考えねばならない。一匹狼にも人生設計は必要なのだ。

それで週に一度は休肝日を作ろうと思いついたのだった。何曜日にするか。週の始まりにはやはり飲みたい。金曜日も頑張った自分をねぎらうために飲みたい。日曜日も特に面白いことがないので飲みたい。真ん中の水曜日はどうか。水曜日は体育があるしくたびれるので飲みたい。結局どの曜日も飲んでいきたいのだ。困ったものだ。でも体育祭のために実は一週間禁酒していたのだ。だから休肝日のことはゆっくり考えることにしよう。取り敢えず今日は飲む。

アルコールを控えめにしようと思って、今日買ってきたのは缶酎ハイだ。しかしこれは失敗だった。冷蔵庫がないのでぬるくなってしまふ。空手部の冷蔵庫を使わせてもらおうかとも思ったが、流石の天海もそれは諦めた。



そのぬるい缶酎ハイを置き、上着を脱いで腕立て伏せを始めて五十七回目、天海しかい  
なかつた屋上に一人の女子生徒が現れた。

「天海君、ちよつといい」

不安げな顔を見ると愛の告白に来た訳じゃなさそうだ。前に頼みに来た女の子とは違う。

今日の顔はなかなか可愛いので覚えている。確か三年の……ええつと、誰だ。忘れた。

「どうかしたかい」

天海は腕立てをやめて起き上がった。

「あの、天海君、相談があるんだけど」

「トラブルかな」

「そう。私じゃなくて、私の友達。五組の三橋瑠里って知ってる」

「いや、知らねえな」

ところで先輩の名前はと聞きたかったが天海はやめておいた。

「瑠里ってさ、エンコーやってんだけど、あ、これは皆には黙っててよ、こっそりやって

る人多いんだけど、で、瑠里が、島高の奴に引っ掛かっちゃったのよ」

島高というのは敷島高校のことだ。隣の地区にあつて不良も多い。

島高とのトラブルに

はもう二十回以上関わってきた。

「引っ掛かつたつてのは」

大体想像がついたが天海は尋ねる。

「電話では三十代だつて言つてたのに、値段とか話をつけて行つてみたらそいつだつたつてこと」

「」

「島高の奴の名前は」

「田口つて奴。知ってる」

その時ピリツと来た。違和感。

「知らんな」

「会話が録音されてて、エンコーのこと学校にばらされたくなかったら三十万払えって。」

それで瑠里が私に泣きついてきた訳。ねえ、天海君、助けてくれな  
い。今日が期限なの。」

天海君がなんとか話つけてくれないかな」

演技だな。天海は直感した。彼女の不安は本物だが三橋瑠里なん  
て女は関係ない。田口

というのも多分架空の人物だ。何故彼女はそんなことをでっち上げ  
るのか。

俺を動かすのが目的だ。

彼女の顔を見据え、天海は聞いた。

「本当は誰に頼まれたんだ」

「え」

彼女は目を瞬かせた。キョトンとした表情で必死に動揺を隠そう  
としている。

「本当のことを言ってくれなきゃ、俺は動かないぜ」

「私、私はほんとのこと言ってるわよ。なんでそんなこと言つの」

彼女は否定しようとした。だが天海が黙って見つめていると、耐  
えきれなくなつて泣き

始めた。

「ごめんなさい、ごめんなさい。でも、でも、お願い」

「誰の差し金だい」

「違う。嘘じゃない。お願い、信用して、お願い、一緒に来て」

彼女は泣きじゃくるだけで本当のことを言わなかった。なら無視  
して今日はもう家に帰  
ろうか。

だが、それが出来ないのが天海東司だ。体育祭で痛い目に遭った  
ばかりなのに。下剤入

りジュースを飲ませた一年の女はあれから見えていない。

天海は溜め息をついた。

「分かった。行くよ」

「本当。ありがとう」

彼女は顔を輝かせた。あっという間に涙が引っ込んでしまう。最近の女は不実になったな。天海は内心ぼやく。

上着を着て缶酎ハイをポケットにねじ込み、名も知らぬ彼女と校舎を出る。校門を抜ける

際に下校途中の真鉤天の姿を見かけ、天海は気軽に声をかけた。彼に出来るのは声をかけることだけだから。

「よう、真鉤。今日は一人で帰んのか。奈美ちゃんはどうしたんだ」  
真鉤は穏やかな口調で答えた。

「藤村さんは今日は部活に行くそうなので」

「部活か。お前も同じクラブに入ったらどうだ」

「文芸部ですから、僕には無理です」

そう言うつと真鉤は微笑した。驕りが薄れたなと天海は思う。何かあつて吹っ切れたのだ

ろうか。だが天海は別のことに気がついた。

「なんか急に痩せたみたいだが、大丈夫か」

「大丈夫です。すぐまた太りますから」

横の女が腕を引っ張つて急かすので天海は真鉤に別れを告げる。

「じゃあな」

「さようなら。また明日」

真鉤は会釈して歩き去つた。彼は女のことを尋ねたりしなかった。瞬間、無表情に一瞥

しただけだ。

「さて、案内しなよ」

天海は女に言った。

十五分かそこら歩いただろう。着いたのは築後二十年くらい経つ

ていそうなコンクリー  
トの地味なマンションだった。八階建て。目的地は何階だ。建物を  
見上げ天海は思う。

玄関はオートロックだった。女は六三とボタンを押して呼び出  
す。

「ちなみです。瑠里の件で」

親しい筈のない相手に下の名前を喋ったのは半端だったな。ばれ  
ているにせよ、演技は

最後までうまくやらなきゃ。いやそんなことよりも。天海はエレベ  
ーターの中で、どの夕  
イミングで逃げ出すかに思いを巡らせていた。六階から飛び降りた  
ら無傷では済まない。

下手すりゃ死ぬ。だがうまく体勢をコントロールして一階下の共用  
廊下やベランダに飛び

込む自信はあった。チリチリと嫌な感触が天海の肌を刺す。駄目だ  
な。部屋に入るべきで

はない。相手は複数で多分武器を持って待ち構えている。十四人相  
手に勝ったこともある

が今回はヤバそうだ。六階に着く前に逃げちまうか。天海は五階の  
ボタンを押したがエレ

ベーターは意外にスピードが速く六階に到着してしまった。  
開いた扉の向こうでニヤついた男が拳銃を握って待っていた。四

メートル、反撃不能の  
距離。用心深い男だ。

それでも天海は突進して一撃を加えようとした。サイレンサー独  
特の響きが連続する。

腹に猛烈な痛み。それに構わず進み、膝を撃ち抜かれて天海は転ん  
だ。

「高校生相手にいきなり四発かよ」

精一杯獰猛な笑みを浮かべて天海は言った。

「甘い奴だな、お前」

告げる男の顔からニヤつきは消えていた。三十代半ば、笑みがなくなる。男は陰鬱に見える。

「お前なら女を盾にして逃げることも出来た。そのくらい頭が回った筈だ」

「そんなことは死んでも出来ねえな」

答える天海の体を男達が押さえ込んでロープで幾重にも縛りつけた。こいつらヤクザだ。

一目で分かる。

「ちなみ、もう帰っていいぞ」

聞き慣れた声が女に告げた。なんとか顔を上げ、天海は男達の後ろに立つ太った高校生

を見た。三年の柿沢。

「じゃあ、三十万は払わなくていいの」  
女が言った。

「いい。だがこいつのことは誰にも喋るなよ」

援助交際がばれたのはどうやら本人であつたらしい。早速エレベーターに戻る彼女に天

海は声をかけた。

「女に幻滅させてくれてありがとよ」

彼女は返事をせず、エレベーターの扉は閉じた。

「よう、天海。ざまあねえな」

天海の頭を足で踏みつけて、柿沢が言った。

「おや、柿沢先輩、体育祭で小便洩らした後は姿を見なかったが、ちゃんと生きてたのか。

俺はてつきり、恥ずかしくて首でも吊ったかと思つたぜ」

怒つた柿沢が天海の頭を何度も蹴りつけた。

「俺の親父はな、若頭なんだぜ」

「で、お前は小便垂れだ。人の力を自分の力と勘違いしてる哀れな

奴さ。あんたらもこんなガキに使われてちゃ世話ないな」

柿沢がまた蹴ろうとした。その肩を押さえ、サイレンサーつき拳銃を持った男が言った。

「信夫さん、まずは部屋に入れましょう。タダシ、血を洗い流しとけ」

そして男は気だるげに天海に告げた。

「安心しろ。致命傷じゃない。まだ二時間は持つ」

全く、ドジを踏んだな。天海は覚悟を決めた。

## 二

1LDKの奥の一室。板張りの床は汚れや血を繰り返し拭いたような染みが残っている。

本来の窓がある場所は鉄板で塞がれ、隣室と繋がるドアも鉄製だった。ちらつく蛍光灯だけが男達を照らしている。ここは監禁用の部屋らしかった。

部屋の真ん中に天海東司が転がされている。手首と足首をきつく縛られ、血行不良のため指が紫色だ。

天海以外には四人の男達がいた。最初はもう三人いたが、天海がすんなり捕まったため去った。

四人のうち二人の若いチンピラが、慣れた工場作業のように天海を蹴り続けていた。

床には血溜まりが広がっている。天海の腹からの出血。四発の銃弾は貫通せず体内に残

っていた。このまま放置すれば死ぬ。撃った男は二時間は持つと言ったが、既に三十分経

った。

凸凹になった天海の顔を、柿沢は黙って見下ろしている。最初は自分で天海を殴っ

たのだが、十分ほどで若い衆に替わらせた。額の骨に当たって拳を傷めたせいもあるが、

柿沢の悪相に浮かぶ不安は別のことを語っている。これだけ殴られ蹴られても天海が悲鳴

一つ上げず不敵な目つきを崩さないことと、腹の出血のひどさに柿沢の方が怖じ気づいて

きているのだ。しかし彼はやめるとも言えず、天海が弱っていくのをただ眺めている。

天海を撃った男は無表情で壁に背を預けている。煙草を持つのは左手で、右手はまだ拳

銃を握っている。天海が突然何をするか分からないと踏んでいるのか。

「信夫さん」

拳銃使いが煙草を壁に押しつけて消し、柿沢に言った。

柿沢は天海の顔から目を離せずに、拳を握り締めたまま立ち尽くしている。

拳銃使いが若い衆に言った。

「お前ら、ちよつと休め。信夫さん」

二度呼ばれて初めて柿沢は我に返ったようだった。

「何です。サキさん」

サキとは名字の佐木であろうか。柿沢も敬語を使っていることから、組の中でもそれな

りの地位にいる男なのだろう。

「どうするつもりです、こいつ」

「……。だから、仕置きをしてやるんだよ」

「信夫さん、俺が聞いているのは、そんなことじゃあないんですよ」  
サキの口元に冷笑めいたものが浮かんだ。

「結局こいつをどうするかってことなんですよ。信夫さんが撃つても構わないと言いましたし、俺は必要と思ったから撃ちましたけどね。このまま解放したら、事件になっちまいますよ。組の関係者だってことはばれてますし、俺達の顔もしつかり覚えてるでしょうか。手足を折ったくらいなら相手がビビって喋らないことはありませんけど、腹の傷が銃創だってことはどんな藪医者だって分かりますよ。弾も中に残ってますしね」

「……」  
「撃つても構わないということは、つまり、最後までやるつもりなんだと、俺は判断したんですよ。ぶつ殺すぶつ殺すって、信夫さん何度も言っていましたね。ドラム缶とセメントも用意しています。ところが、妙ですね。信夫さんの顔は、そういう覚悟のある顔をしてないんですよ」

「俺は、別に……」  
柿沢はそこまで言い、後が続かなかった。二人の若い衆は困ったような顔で見ている。

「別に、というのは、殺すつもりはないってことですか。ならこいつをどうします。申し訳ないですが、俺の体は組のものですから、こんなことのために懲役行くつもりはないですよ。このブローニング、信夫さんが撃ったということにして下さいね。大丈夫ですよ、

信夫さんならまだ少年院ですから。こいつもそのくらいは口裏合わせしてくれるでしょう。  
なあ、兄ちゃん」



「この縄をほどいてくれたら、前向きに検討してやってもいいぜ」  
相当に弱っている筈だが天海はすぐ応じた。左瞼は腫れ上がって  
目が開かない。口から  
吐いた赤い唾には齒の欠片も混じっていた。

サキは苦笑した。それから柿沢へ視線を戻した。

「いや、俺は……」

柿沢はまた口ごもった。サキは溜め息をついた。顔にあからさま  
な侮蔑が表れている。

「信夫さん、どっちかにして下さいよ。ここで殺すか、信夫さんが  
年少行くか。もうどっ  
ちかしかないんですよ。そんなことも考えないで俺達を呼んだんで  
すか。あまり時間はあ  
りませんよ。放っておきゃあこいつは死にますからね」

柿沢の顔は青くなり白くなり、眼球がせわしなく動いて殺風景な  
室内を見回した。

やがて、柿沢は言った。

「わ、分かった」

「分かったというのはどういう意味です」

「そいつを殺してくれ」

「え。殺してくれ、ですか」

サキはわざとらしく呆れ顔を見せた。

「信夫さんが殺すんじゃないやなかつたんですか。天海をぶつ殺すぶつ殺  
すって、これまで何百

回聞いたか分かりませんよ。信夫さんが口だけのヘタレでないこと  
を見せて下さいよ。拳

銃貸しますから。使い方は知ってますよね」

サキが壁際を離れて柿沢に拳銃を手渡そうとした。柿沢は手を伸  
ばしかけ、すぐに引つ

込めようとしてまた止めるというなんとも微妙なことをやった。二  
人の若い衆が柿沢を見

る視線に敬意は失せていた。

突然、横たわっていた天海が縛られた両足を跳ね上げて蹴ろうとした。狙いは拳銃で、

サキの手から落ちたものを拾うつもりだったのだろう。一瞬の機会を彼はずつと待っていたのだ。

「おっと」

だが寸前でサキは足を躲していた。振り向いた彼の顔にはあのニヤニヤ笑いが張りついていた。

「タフな奴だ」

天海を蹴転がし、またサキが発砲した。サイレンサーのため音は小さい。天海の左太腿

と右膝に穴が開く。天海は低い唸り声だけで耐えた。

「大した奴だ。感心するよ。うちの組にスカウトしたいくらいだ」

「お断り、だ。ヤクザは、大嫌いだね」

歯を剥いて天海が答える。駄目押しでサキがまた撃った。今度は右肩だ。七つの銃創か

ら血は流れ続け、合計の出血量はもう一リットルを超えるかも知れない。

「さて、信夫さん、どうぞ。弾はまだ七発残ってますから」

天海から充分な間合いを取ってサキが促した。

額に油汗を浮かべ、柿沢は俯いた。叱られた幼児のような弱々しい声で、彼は言った。

「サキさん、やってくれよ。慣れてるだろ」

「クッ」

サキは低く嘲った。

「信夫さん。あんた、どうしようもない小物だな。言っときますが、高校卒業してもうち

の組には要りませんから。もし入ってきたら殺しますよ」

柿沢は反論出来なかった。サキが拳銃を天海に向けた。その時、天海は開いている右目を細め、別の方を見ていた。顔が腫れているため表情は分からない。隣室から凄惨な音がした。玄関の鉄の扉がへし曲がって飛んでいくのが見えた。向こうの壁に激突し、衝撃で部屋が震える。天海が目を閉じて顔を床につけた。

「うおっ何だ」

男達は固まり、サキが素早く隣室を覗き銃口を向けた。

ドュギュビ、と、サキの背中から太い円柱が生えた。潰れた心臓と背骨を絡みつかせた

それは血塗れの消火器だった。外の共用廊下に置かれていたものだ。投げつけて相手の胸を貫くにはどれほどの筋力が必要か。

「ゲツガッ……」

サキの右手は天井を三発撃って力を失った。その場に崩れ落ちる前に彼の背から消火器

が引っ込んでいく。侵入者が凶器を引き抜いているのだ。俯せに倒れたサキは白目を剥いていた。

「サ、サキさんっ」

若い衆が叫んだ。一人は慌てて懐からドスを抜こうとしている。

「うわ、わわわわ」

柿沢は両腕をバタつかせて意味のない声を洩らすだけだ。その脳天に消火器が振り下ろされ、潰れた頭が太った胸へ完全にめり込んだ。はみ出した眼球が一個、糸を引いて揺れる。

「なな、何だてめっ」

手が震えてまだドスを抜けないうちに、若い衆の一人は横殴りの

消火器を食らって首が

飛んだ。壁をバウンドした生首が足にぶつかって、残った一人が細い悲鳴を上げた。

「た、たす、たす、たすたた」

後ずさりして部屋の隅に追い詰められた男は、消火器と壁に挟まれて丁寧な頭を潰された。

音がゴギツ、から、ブビュジュツ、へと変わり、中身が全部はみ出した。

天海はしっかりと目を閉じて動かなかった。コトンと小さな音をさせて消火器が床に置

かれ、足音のない気配が離れても、天海は目を開けず一言も喋らなかった。

喋ったのは、気配の方だった。

「体育祭は楽しかった」

確かに、真鉤天の声で、そう言ったのだ。

天海東司は目を開けたが、部屋には死体しかなかった。

「なんで、俺を助けた。なんで、喋った。そういうことは、しない主義じゃなかったのか」

答える者は既がない。天海は芋虫のように這い、扉のなくなった入口からなんとか外の

共用廊下へ出た。

天海は取り敢えず、残った力で大声を張り上げた。

「おおーい、誰か、助けてくれえ。救急車を頼む。それが、縄をほどいてくれ。自分で病院に行くからよう」

### 三

町の総合病院に天海東司は収容された。銃弾は全て摘出され、命

に別状はないが、砕けた右膝は暫くりハビリが必要で後遺症が残る可能性もあるとのことだった。

手術を終えてまだ点滴を受けている天海の病室に、二人の刑事が来て事情を尋ねた。天

海は柿沢とのトラブルについてのみ説明し、殺人犯については自分は気絶していたので何も知らないと言った。

刑事はこの町で起きている一連の殺人事件との関連性を指摘した。天海は心当たりがないと答えるだけで、麻酔が残って眠そうなそぶりを見せるとひとまず刑事達は退出した。

警察と病院からの連絡を受け、天海の父親が訪れたのは夜八時過ぎだった。彼は入院の手続きだけ済ませて息子とは面会せずに去った。天海も家族のことは何もスタッフに尋ねなかった。親子はそういう関係だった。

翌日になると午前中のうちから学校を休んで見舞いがやってきた。まだ天海はひどい顔

だし身動き出来ないしものを食べられないのだが、女子生徒はフルーツバスケットやら菓

子やらを沢山持ってきた。今の時期にチョコレートを持ってくる女の子もいた。彼女達がベッド脇のパックに溜まった尿を興味深げに見るので「麦茶じゃないぜ。間違って飲むな

よ」と天海は軽口を飛ばした。男子生徒は新聞持参で面白そうに事件のことを聞いてきた。

「実はお前が殺ったんだろ」と冗談っぽく言う同級生もいた。天海は苦笑して体中の包帯

を示すのみだ。新聞には惨殺とのみで詳しい殺害法については書い

ていなかった。

昼休みの時間帯に担任の教師が来た。暫く休むことになりそうだと天海は伝える。学校

では色々と問題になっているようだった。生徒が惨殺されただけでなく、その生徒がヤク

ザを使って後輩をリンチにかけ発砲さえしたのだから。「撃つたのはヤクザの方だぜ」と

天海は説明した。もしかすると校長など上の者達は天海も処分しようとしているかも知れ

ない。だが担任の男性教師は「早く戻ってこい」とだけ穏やかに告げた。彼は天海のこと

を気に入っているらしかった。

午後になるとまた刑事が来た。昨日よりも細かいことをしつこく聞いてくるが、天海は

当たり障りのないことしか言わなかった。特に、犯人が誰かということには全く知らない

と主張し続けた。刑事の鋭い目つきに、天海は呆れた口調で言った。「もしかして俺が殺したなんて思ってたんじゃないだろうな。俺も死

体を見たが、グチャグ

チャだったぜ。俺にあんな殺し方が出来るなら、捕まってリンチなんかされてねえよ」

「犯人の足跡がないんだ」

刑事の声は得体の知れない不安を孕んでいた。

「部屋の床は君の血で溢れてたが、被害者の靴跡と、君が這った跡しか残っていないんだ

よ」

「そんなこと言われたって俺にや分かんねえよ。死にかけて気絶してたんだぜ。刑事さん

方、重傷の男を尋問するより他にすべきことがあるんじゃないのかい」

勢い込んで喋った後で「いてて」と腹を押さえてみせると、刑事達は溜め息をついて立ち去った。

四時過ぎになって、真鉤天と藤村奈美が一緒に見舞いにやってきた。

「私と同じ病院ね。これ、あの時のお返し」

藤村はひよこ饅頭の箱を見せて笑った。個室の隅に積み重なった見舞いの品に気づいてもう一度笑う。

「悪いが、まだ食べられねえんだ。腸を縫ったらしくてな」

「じゃあ私が代わりに一個食べるね」

前にしたことをそのまま返されて、天海は苦笑した。饅頭は十五個入りで、藤村と真鉤が一個ずつ食べた。

「新聞には撃たれたって書いてたけど、大丈夫」

「まあな。こうしてちゃんと生きてるし、手足もついてる」

「その足は」

ギプスを巻いた右足を見て藤村が尋ねる。

「膝の骨が砕けたとき。まあ、松葉杖なしでも歩けるようになるぞ。奈美ちゃんとお揃いでいいだろ」

「あら、ごめんなさい、私のギプスはもうすぐ取れるって。退院はいつになりそう。長くかかるの」

藤村の物腰に落ち着きが備わっていた。この短期間で多くの経験を積んだみたいだ。

「俺にも分からねえ。病院に飽きたら学校に戻るよ」

そんなやり取りを、真鉤は静かに見守っているだけだ。殺人犯についての話題は出なかった。

この場にいる全員の、暗黙の了解であるかのように。

真鉤は最後になって、一言だけ告げた。

「元氣そうで、良かった」

「ああ」

天海東司は頷き、真鉤の顔を見上げた。彼は何も聞かず、一言だけ返した。

「真鉤、お前、変わったなあ」

「そうかも知れない」

真鉤は微笑した。はにかみはあるが申し訳なさそうではない。薄れた鬢り。

そして二人は去った。

することのなくなった天海はテレビを観た。時々看護婦が来て尿量や血圧などをチェックしていく。主治医が来たので天海はいつになったら食事が出来るか尋ねたが、もう少し

待ちなさいと言われたただだ。ニュースでは事件のことをやっている。マスコミがどう判断したのか、天海の名は公表されていないようだ。犠牲者である柿沢の名も。天海は黙って観ていたが、やがてうつらうつらし始めた。

どのくらいの時間が過ぎただろう。天海は不気味な悪寒でまどろみから引き戻された。

発熱のせいではない、最悪の予感に意識が冴え渡る。

病室の外で誰かが話していた。

「では十五分、二人だけにさせて下さい。その間に話を済ませますから。もしかすると少し騒がしくなるかも知れませんが、気にしないで下さい」

何処か舌足らずで、陰鬱な低い声だった。聞き覚えのある声。看護婦か医師に話しているのだらう。天海は瞬きもせず病室の扉を凝視していた。

扉が開き、灰色のロングコートを着た大柄な男を認めた時、天海



は叫ぼうとした。

「こい……」

だが予想外のスピードで滑り込んだ男の左手が天海の口を塞いでいた。同時に右手人差し

し指中指が喉を突く。気管軟骨のひしゃげるコリユツという音がして、天海は目を剥いて

もがく。息が。

「潰してはいない。大声を出せないようにしたただけだ」

男は手を離して告げた。ナースコールの線も引き抜いて捨てる。

病室の入口に戻り扉を

閉めた。のっそりして見えるが、いざとなれば素早く動けることは既に証明されている。

ゼビュー、カビュー、と喉を鳴らしながら天海はなんとかベッドから転がり落ちようとした。少しでも大きな音を立てて人を呼ばなければ。

「無駄だぞ」

男の一声で天海は諦めた。男は面会人用の丸椅子をベッドの傍らに置いて腰を下ろした。

男の身長は二メートル近く、血色の悪い肌をしていた。髪をオールバックにしておりM

字型に後退した生え際が目立つ。瞼は下がり気味で瞳にまでかかっており、三白眼となっ

て冷酷に天海を見据えている。顔の表情は殆ど動かない。

男はコートのポケットからペットボトルを出し、蓋を開けて一気に半分ほど飲み、ポケットに戻した。

「前に……会ったな、学校の前で……」

天海は掠れ声を絞り出した。それに答えず男は言った。

「私は警視庁の刑事で大館千蔵という。君が巻き込まれた事件について質問をしたい」

「嘘つけ……刑事が、こんなこと、するかよ」

「君をリンチした四人を、殺したのは誰だね」

偽刑事のゾンビのような顔を、天海は黙って見返した。

こんな時に天海を選択肢は一つしかない。切れている口元を歪ませて彼は言った。

「知らねえな」

大館は口を大きく開けた。顎が外れそうなくらいに。リュオーン、リュフュー、と深い

気道で風が鳴る。口を開けたまま天海に顔を寄せる。歯が一本もない赤い口腔が覗く。舌

らしきものも見当たらなかった。

こいつは、人間じゃない。

男は姿勢を戻して告げた。

「嘘だな。殺したのはお前ではないが、犯人を知っている筈だ。犯人はお前を助けるためにヤクザ共を殺したのだからな。何故犯人をかばう。口止めされたか」

「糞食らえ」

吐き捨てた天海の口を大館の左手がまた塞いだ。右手が天海の右前腕を掴んで軽くひね

る。骨の折れる音と靱帯の切れる音が重なり、天海の肘が本来とは逆の向きに曲がった。

天海の叫びは大館の掌に吸い込まれた。

手を離して大館がまた聞いた。

「お前の親戚か。それとも友人か」

「し……知らねえって、言っただろ。耳が、ないのかい」

激痛にも怯まず天海は返す。大館が左手で天海の右耳を掴み、あっさり引きちぎった。

天海は低く呻いただけで耐える。大館は耳を投げ捨てた。

「耳がないのはお前だ。早く言え。私は容赦しないぞ」

「俺は、決めたことは、やり通す、主義でね。お前には、教えてやらねえ」

「そうか」

大館がまた左手で天海の口を塞いだ。動かせぬ天海の右手の、人差し指を摘まむ。ペジ

ツ、と、指の骨が潰れた。大館は停滞なく中指、薬指と進めていく。「気の毒なことだ。粉砕骨折だから二度とまともには握れんぞ」

天海は大館の左手に噛みついた。同時に違和感。こいつの肉は変だ。均質に硬い。大館

は平然と左手を持ち上げた。食い込んだ前歯が三本折れた。すぐにまた口を塞がれる。

結局大館は、天海の右手の指を全部潰した。気だるい大館の瞳に昏い愉悦が滲んでいる。

天海は全身を震わせてそれに耐えていた。この怪物は手段を選ばない。どんな残酷な拷

問でもやってみせるだろう。天海は死を覚悟した。

死んでも言わねえ。

手を離して大館が聞いた。

「犯人は誰だ」

「知ら、ねえ、な。あ、先生」

天海は扉の方を見た。大館が素早く振り返るその隙に天海の左手が動いた。窓へ向かっ

て振ったその手を大館の右手が掴んだ。信じ難い反応だった。

天海の左手は、テレビのリモコンを持っていた。最後の切り札だったのだが。

「窓を割って人を呼ぼうとしたのか。いい機転だし動きも悪くない。人間にしてはな」

大館が右手に力を込めた。天海の左手がリモコンと一緒に潰れた。砕けたプラスチック

部品が床に落ちる。更にねじると天海の左前腕が途中で折れ曲がっ

た。二本のささくれた骨が肉を破って突き出す。

もうメチャクチャだった。それでも天海は歯を食い縛って耐えた。唇を濡らす血は嘔み

切ったのか、それとも前歯の折れた場所から出ているのか、自分でも分からない。

天海の呼吸が再開するのを待ち、大館が聞いた。

「話す気になったか」

「お、こ、と、わ、り」

大館が初めて笑みを作った。陰惨な、ドロリとした笑顔だった。

「なら次は目を抉るが、それでもいいか」

「構わんね、クズ」

間髪入れず大館の右手人差し指中指が天海の右目に突き込まれた。中で指を曲げて眼球

を掻き出し、伸びた視神経を一気に引きちぎるのを天海の左目は見ていた。

天海の口の中で妙な音がした。食い縛るあまり歯を折ってしまったらしい。

天海の中は、痛みと、怒りだけに、なっていた。

また大館がミネラルウォーターを飲んだ。ペットボトルの表面が天海の血で汚れた。

「喋る気になったか」

「益々、喋りたく、なくなった」

「何故そうまでして犯人をかばう。おそらくこれまで何十人となく殺している奴だぞ。お

前にとって、そんなに大事な奴なのか」

口の中に溜まった血を飲み込んで、天海は答えた。

「そんなことは、どうだっていいんだよ。言っただろ。俺は、決めたことは、やり通すつ

て」

「大した男だ。だが、次は睾丸を潰す。男の性器など触りたくもないが、ペニスごとちぎり取ってやる。男じゃなくなるがそれでもいいか」

そいつは大変だ。命の次に大事なところだ。

天海は答える前にむせた。血が気管に入ったようだ。何度か咳をしたが通りが悪く声が出ない。

「何だ。言ってみろ」

「ちょ……ガフツ……ま……」

後は口をパクパクさせるだけだ。大館が聞き取ろうと顔を近づけた。

天海はそれを待っていたのだ。口をすぼめて吹きつけたのは割れた奥歯だった。

「ぬっ」

大館が自分の右目を押さえた。狙い通りだった。失明するような怪我ではないだろうが、

油断した大館の角膜に正確に命中した。

「このガキッ」

大館が怒りを露わにした。天海の右膝を掴んでギブスごと粉碎した。天海はそれでも悲

鳴をこらえ全力で笑顔を見せた。殺される前に一矢報いてやった。

ざまあみる。天海の顔

面を大館の左手が掴む。メシヤゴキと骨が砕けていく。

「あっ」

唐突に大館が手を離れた。何が起こった。朦朧としながら天海の左目は大館を見る。

大館の顔が、ボコボコと盛り上がり波打っていた。皮膚の下で何匹もの大きな虫が蠢い

ているように。と、鼻周辺が十センチほど突き出した。引っ張られて眼裂がずれる。

大館が慌てて自分の鼻を手で押し込んだ。と、反動のように左のこめかみが突き出してきた。ピシリ、と限界まで伸ばされた皮膚に亀裂が走る。左頬まで広がった裂け目から、蠢動する赤い肉塊がはみ出してきた。

「痛え、畜生、痛え、皮膚が」

大館は両手で傷口を押さえて身を屈めた。彼はそのまま走り、窓を破って外へ飛び出した。四階の窓から。

地面にぶつかる音は小さく、すぐに足音が遠ざかっていった。

ガラスの割れる音にやっと看護婦が駆けつけた。悪いけどまた治療を頼む。天海はそんな冗談を言おうとしたが顎が動かなかった。そのまま天海の意識は途切れた。

#### 四

皮膚は大切だ。

皮膚は人間の外見を作る。外見とは人間の本質そのものだ。

だから俺は人間だ。

人間でいるためには人間の皮膚に合わせて形を整えなければならぬ。皮袋内の隅々にまで体を伸ばし密着させ、人間の関節の動きに倣って体を動かす必要がある。長い間苦勞して、それを習得した。

落ち着け。形を間違えるな。

大館千蔵はハンカチで顔の左側を押さえながら駅前のビジネスホテルに戻った。

「お客様、大丈夫ですか。お怪我を……」

フロント係が心配そうに声をかけるが、大館は右手を振って冷淡に返す。

「野球のボールが当たっただけだ」

エレベーターで上る間、大館は「痛え」と「畜生」と「落ち着け」を延々と繰り返した。

畜生。大事な皮膚が。だが落ち着かないと。形を整える。痛みはどうか。自分は本当に痛

みを感じているのか。勿論そうに決まっている。これは俺の皮膚なのだから。

大館は部屋に戻って大型トランクを開けた。衣類や予備の折り畳み式銚、ロープなどを掻き分け、裁縫セットを取り出す。

洗面台で深呼吸を一つして鏡を見る。左こめかみから頬まで二十センチ近い傷口は、幅

も広がって肉が見えていた。というより、肉の盛り上がりが傷を広げている。顔からはみ

出した部分の厚みは十センチを超え、ボールが当たって腫れたとは到底言い訳出来ない状

態だ。露出した筋繊維の流れは一定でなく乱雑に絡み合っている。所々が収縮を繰り返し

揺れていた。滲み出た血が顎を汚している。二年かけて、やっとこの皮膚に馴染んできたのに。

大館は、肉塊を掌で押さえつけた。

「落ち着け。冷静に。冷静に。私は人間だ。人間だ。冷静に。人間だ。人間の形だ」

鏡に映った目を見つめ、大館は自分に言い聞かせた。

暫くして大館は手を離してみた。肉の盛り上がりはかなり軽減している。ボールが当た

って腫れたといってもおかしくない程度になってきた。大館は傷口を引っ張り合わせてみ

て、閉じられることを確認してから縫い針を摘まんだ。通す糸は釣り用の細いナイロン糸だ。

大館は鏡を見ながら、傷口を縫い始めた。

「痛い。畜生。いや落ち着け。怒るな。冷静に。いつでも冷静に、だ。形を忘れるな。で

も痛い。あの糞ガキ。怒るな。冷静に。私は人間だ」

大館は二十センチの傷に七十針かけた。皮膚は大切に、だ。縫ったばかりの傷をタオルで拭き、ガーゼを当ててテープで止めた。

これでよし。私は人間だ。人間の形を忘れるな。大館は蛇口に直接口をつけ、大量に水を飲んだ。彼の肉体に持続的な水分補給は欠かせない。

部屋に戻り備えつけのテレビを点ける。ニュース番組に合わせてから灰色のロングコート

トを脱ぐ。一部が裂けている。窓を破った時か。布地も釣り糸で縫う。コートの内側には

四本の鉤が吊られている。シャツの左袖をまくって確認する。先々週に自分で削ぎ落とし

た前腕の肉は厚みが戻っているが、引っ張って縫い合わせた長い傷はまだ癒合していない。

皮膚は治りが遅いのだ。だから大切にしないと。乗り換えてもまた馴染むまで長い期間がかかる。

ニュースではまだ病院での出来事は流れていなかった。

今日は少し無茶をした。もっと簡単に喋ると思ったのだが。人間のガキのくせに。

警察も流石に私を黙認出来なくなるかも知れないな。大館は考え

ている。マルキの追っ手が来るかも。ふん。奴らは半端なのだ。化け物は残さず始末する



べきだ。

大館はコートを着た。トランクを提げて部屋を出る。彼は多少まともになった顔でフロントにチェックアウトを告げた。

戻る

## 第七章 自己嫌悪

### 第七章 自己嫌悪

—

携帯電話が鳴った。

午後十時のニュースを見て予感していた藤村奈美はすぐに取り上げて相手を確認する。

登録していない固定電話だった。迷わず通話ボタンを押す。

「夜遅くすまない」

予想通りの相手だった。

「真鉤君」

「明日、僕は学校を休むことになると思う。すまないが、明日は一人で行ってくれないか」

いつの間にか奈美は真鉤天と一緒に登校するようになっていた。というより奈美の方が

真鉤の家に寄って呼び鈴を鳴らすのだ。

「天海君のこと」

「……そうだ」

「私もテレビのニュースで、びっくりして。凄い重傷だつて。まさか病院でなんて」

「僕が馬鹿だった。自分のことしか考えてなかった。こんなことを想定しておくべきだったんだ」

真鉤の声に悔恨が滲んでいた。

「暴力団の仕返しじゃないの」

「それはない。刑事を名乗ったということだし、四階の窓から飛び降りて逃げている。多

分、奴は天海君を拷問したのだと思う」

「拷問つて……」

今の時代にそういうことをする人がいるのか。不死身の殺人鬼や吸血鬼がいるのだから、いても不思議はないか。

天海は大怪我をしていたのに、更にどんなひどい拷問が加えられたのか。想像すること

さえ恐ろしい。あの天海が。

「奴は僕を追っている。前に一度話したと思うが、先月から嗅ぎ回っている男だ。島谷さ

んの死体を見つけたのは奴だし、先週コンビニの裏で五人殺したのも奴だ」

「え。あれは真鉤君じゃなかったの」

「僕だつて、そんなにやたら殺し回っている訳じゃないよ」

真鉤は苦笑しているようだった。

「ごめんなさい。えっと、それで、これからどうするの」

「……。ずっと逃げていても、被害者が増えるだけだ。そろそろ、対決すべき時だと思う」

奈美は体育祭の夜の出来事を思い出した。あんな闘いが、また繰り広げられることにな

るのだろうか。

「大丈夫なの」

「やってみる。片がつくまで、僕の家には近づかないで欲しい。それから病院もだ。天海

君の病院……君も通院しているけど、絶対近づいちゃ駄目だ」

「そうする。でも、来週の月曜日には行かなくちゃいけないんだけど。ギプスが取れるつ

て」

「それまでには片はついていると思う。多分」

片がつくというのは二通りの可能性がある。真鉤が敵を殺すか、

敵に殺されるか。

それを自然に理解している自分がいる。

「なんだか、二学期になってから、メチャクチャになってしまったみたい。沢山の人が死

んだし、天海君も……」

奈美はついそんなことを言ってしまった。

「僕のせいだ。僕がいなければ、ここは平和な町だった」

「あ、そんな意味で言ったんじゃない。ごめんなさい。じゃあ、真鉤君、気をつけてね」

それ以上の慰めをかけることは出来なかった。実際に、真鉤に責任の一端があるのだから。

「じゃあ。お休み。また……」

真鉤はその台詞を最後に電話を切った。

また真鉤と会うことは出来るのだろうか。その夜、奈美はなかなか寝つけなかった。

## 二

午前六時。長い手術を終えた天海東司は観察室に移された。体中をガーゼと包帯で覆わ

れ、何本もの管を繋がれ、手足を固定されて。心電図モニターは規則正しい波を表示している。

天海の顔で唯一露出した左目は閉じており、眠っているようだった。

観察室の前を数人の警官が守っていた。ベッドのそばから医師が去り、看護婦が場を離れた。

天海が左目を開けた。まだ麻酔が残っているらしく眼光は鈍い。その目尻が僅かに、笑みのようなものを浮かべた。ベッドの下から小さな声が洩れた。

「……すまない。僕のせいだ」

「気に、すんな」

天海の返事は更に小さかった。舌も顎もともに動かず、呼吸音に似た微かな声。

「自分で、選んだ、道だ。でも、俺は、運がいい。まだ、生きてるし、キンタマも、ちゃんと、ついてる」

右耳介離断、右眼球喪失、上顎骨・頬骨・下顎骨骨折、右上腕骨遠位端剥離骨折、右肘靭帯断裂、右手第一指から第五指までの基節骨粉碎骨折、左橈骨・尺骨複雑骨折、左中手骨から末節骨まで半数以上の骨折、右大腿骨遠位端・脛骨近位端・膝蓋骨粉碎骨折。それだけのダメージを受けて尚、天海の左目には、恨みも、怒りも、後悔もなかった。

「すまない。奴が僕を追っていることは分かっていたのに」

真鉤の声は泣いているようでもあった。僕のことを奴に喋ったのか、とは聞かない。天

海も言わない。答えは自明だった。

「奴は、大館とか、言ってたな。本名かどうか、知らねえ。匂いを、嗅ぐのが、得意な、

奴さ。折れた歯を、吹いてやったら、エキサイト、しゃがった。そしたら、よお、顔が、

盛り上がって、顔の皮が、はち切れ、やがった。自分で、痛がりながら、逃げてった、ぜ。

ふ、ふ。可笑しい、だろ」

「……。君は、凄い男だ」

天海の目尻がまた笑みを作った。

「ふ。当たり前のこと、今更、言うなよ。気をつける。奴は、化け物だ」

「分かっている。僕もそうだ」

「ふふ。眠い、から、寝る。また、な」

「また、見舞いに来るよ。次は普通に」

天海東司は目を閉じた。ベッドの下の声は聞こえなくなった。

### 三

自分がされたら嫌なことは、人にしてはいけない。真鉤天が小学生だった頃、先生に繰り返しそう教えられた。

ということは、自分が人に何かすれば、同じことをされても文句は言えないのだ。

だから自分は殺されても仕方がないと、真鉤はずっと思っていた。真鉤にとって食事は栄養補給であり、料理に美味しさを求めない。何故なら、美味しい

料理を作ってくれる母親は自分が殺したからだ。コーンポタージュの味を真鉤は覚えてい  
る。カレー粉が入っていたのに辛くなくて、ちょっと濃くて、牛乳の味もして、コーンが  
甘くて、柔らかい味なのに、真鉤の記憶の中では鮮烈な輝きを保っていた。

もう二度と味わうことはない。

真鉤天は記憶の中の光景を眺めている。コーンポタージュのお椀がひっくり返っている。

零れたスープが途中で赤い色彩に変わる。スープと混ざった血溜まりの原因は横たわる母

だった。首筋の傷から断続的に血が噴き出して、血溜まりを広げていく。真鉤の素足に血

が触れる。温かい。母はびっくりしたような、笑おうとしているような、不思議そうな、

顔をして真鉤を見上げていた。どうしたの、天ちゃん。母がそう言ったような気がした。

あああああ。

ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。真鉤は何万回繰り返したか分からぬ謝

罪を新たに積み重ねていく。しかしそれが母に届くことはない。自分が既に殺したのだから。

どうしてあんなことをしてしまったのだろう。どうしてあんな悪いことをしてしまったのだろう。

のだろう。僕はなんて悪い子なんだろう。どうして、どうして……。

真鉤は自分を責めながら、罪の重さに震えながら、同時にあの恐るべき光景に快感を覚

える自分に気づいている。真鉤は益々自分を責める。

回想は別の場面に移る。薄暗い寝室。

真鉤は振り下ろされる斧を見ている。夜中にふと気がつく父親がベッドの横に立っ

ていた。両手で握り締めた斧を一杯に振りかぶり、父は泣きそうな、鬼のような形相をして

いた。「天、すまん」父はそう言って斧を振り下ろした。避けることも出来たし父親の手

を止めることも出来た。だが真鉤は動かずに斧を待っていた。自分は悪い人間なのだから

殺されるのも仕方がないのだ。自分がされたら嫌なことは人にもしてはいけない。自分が

やったことと同じことを自分がされても我慢しないといけない。斧は首の半ばほどまで入り込んで止まった。痛かった。息が苦しくなった。でもまだ死んでいない。父は斧を引き抜いた。止めを刺さねばならない。きちんと切り離さないといけない。真鉤はそれが分かっていたので首に力を入れないようにして第二撃を待った。衝撃で視界が揺れる。でもまだ首は繋がっている。痛みも息苦しさもひどくなった。でも首から下の感覚はなくなっていた。父は結局、五回目でやっと真鉤の首を切断した。全身を震わせながら、父は大きな溜め息をついた。その顔は真鉤には、ヒクヒクと笑っているようにも見えた。それは当然のことだ。真鉤は悪い人間なのだから。殺されるべき人間なのだ。死んだ後はきつと地獄に行くのだろう。だが真鉤の意識は途切れなかった。父は力を使い果たしたのだろう、後始末をせずに部屋を出ていった。いつまで待っても真鉤は地獄を見ることが出来なかった。痛みも苦しさも次第に和らいでいくが、薄闇の中で部屋の様子は鮮明に見えていた。やがて、首から下の感覚が戻ってきた。息苦しさがなくなってきた。自分呼吸をしている。痛みはまだ残っていたが、真鉤は首を起こしてみた。きちんと動く手を上げて首筋に触れてみる。皮膚が薄く、感触の違う場所がある。既に傷口は存在しなかった。仕方なく真鉤は起き上がった。父が投げ捨てた斧が床に落ちている。仕方なく真鉤は斧を拾った。生



き延びてしまったからには、父を殺さなければならぬ。それも仕方のないことだ。父は僕を殺そうとしたのだから、父は僕に殺されても仕方がないのだ。

だから真鉤は、居間で酒を飲んでいた父親に背後から忍び寄り、脳天に斧を叩きつけた。

父とは違い、一撃で完璧に割つてのけた。父がどんな顔をしていたのか、真鉤は見えないようにして死体を引き摺っていった。父が死体処理のために買ってきた、地下室の焼却炉へと。

蓋を閉める前に、一瞬だけ父の顔が見えた。真つ二つに割れて血で汚れていたため、表情は見分けがつかなかった。

ああああああ。  
恐ろしい。

この光景に、快感が伴っていることが最も恐ろしい。

また別の光景が浮かんでくる。それは父に刺される場面であったり、小学時代の真鉤がいじめっ子の頭を握り潰す場面であったり、父が険しい顔で死体を毛布に包む場面であつたり、反射的に殺した通行人の死体を前に真鉤が途方に暮れる場面であつたりした。島谷

紀子の恐怖に凍りついた顔もあつた。真鉤へ向けられた藤村奈美の悲痛な眼差しも思い出

す。結局真鉤は人を殺すことしか出来ないのだった。だから真鉤は楽しい思いをしてはいけないのだった。真鉤は自分の宿命以外のことで社会に迷惑をかけるないように努めた。自

分が社会にとつて無害であるように、出来るならば少しは貢献出来るように。何故なら既

に真鉤は社会に多大な被害を及ぼしているのだから。

だけど、どうして、これらの嫌な場面が、楽しいのだろう。

宿命は背負っていくしかない。でも、僕は、どうしようもない悪魔だ。

悪魔であつても、藤村と天海だけは守りたかった。それが自分の存在する意味だと真鉤

は決めた。大館という偽刑事を倒せるかどうかは真鉤にも分からない。だが真鉤が死ねば

奴もこの町を去ることだろう。どちらに転んでも悪くはない。

いや、大館は殺すべきだ。

天海にあれだけのことをしてくれたのだ。奴も同じ目に遭わせなければならぬ。

人を殺すような奴は、殺してもいいのだ。

真鉤はそんなことを考えながら、獲物が来るのを待っていた。出来れば人気のない場所で、確実に仕留めたかった。

#### 四

藤村奈美は授業など上の空で真鉤天のことを考えていた。休み時間に携帯でネットを覗き、新しいニュースが出てないか確認する。時には授業中にも。何も出ていない。

クラスメイトは天海東司の噂をしていた。意識不明の重体とかもう再起不能だとか勝手

なことを言っている。朝のホームルームで先生は面会謝絶だと言っていた。朝刊では手足

と顔面の骨折と右目の失明となっていた。どんなひどい拷問を受けたのだろうか。どんな

ひどい奴に。

きつと、天海は耐え抜いたのだと奈美は思う。

真鉤は無事なのだろうか。ニュースに出てないからといって何も起きていないとは限らない。

闇から闇に葬られてしまう可能性もある。

葬られる、なんて言葉は使うべきではない。真鉤君が生きていてくれますように。奈美

は昨夜からずっと祈っている。

奈美は日暮静秋のことを思い出す。彼は手伝ってはくれないのだろうか。二対一なら勝てる見込みも強くなるのでは。でもクールな人だから、自分のことは自分で片をつけるな

どと言うかも知れない。

学校が終わった。奈美は下校途中で真鉤の家に寄ってみようかと思っただが自制した。危

険な状況に自分が下手に関わって悪化させるのが怖かった。家に帰り着いて真っ先に夕刊

を読む。天海東司が手術を終え、命に別状はないという小さな記事があった。話の出来る

ようになるのを待つて警察は事情を聞く方針という。真鉤については、それっぽい事件は

今のところないようだ。テレビのニュースも見る。やはり真新しい情報はない。

どうなったのだろうか。奈美は焦り始めていた。終わったのなら連絡してくれても良さそ

うなのに。奈美が心配していることを真鉤も分かっている筈だ。なのに電話がないという

ことは、もしかして……いや、あの不死身の真鉤天がそんなことはないだろう。

でも、相手も人間じゃないと、真鉤は以前言っていなかったか。

宿題を広げて奈美は連絡を待つ。集中出来ずに全く進まない。電話は来ない。また二ユースを見る。何も無い。

どうなったのだろう。ジリジリと追い立てられ、奈美は室内を意味もなく歩き回ってしまふ。「どうしたの」と呆れて母が尋ねる。「何でも無い」と奈美は答える。

午後六時になった。まだ連絡はない。電話くらいしてくれてもいいのに。奈美は心配を乗り越して怒りすら覚える。このままでは自分の神経が焼け焦げてしまいそうだ。奈美は真鉤の家に電話を試してみた。予想通り、出ない。留守番電話にもなっていないのでそのまま切る。

携帯には電話しない方がいいかも。そう思いながらも、結局は電話してしまった。だが圏外というアナウンスが流れるだけだ。電源を切っているのかも。殺し合いの真っ最中に携帯が鳴っても困るだろうし。

病院はどうなったのだろう。天海はもう襲われることはないのだろうか。真鉤は何処にいるのだろう。もしかすると天海を守るためにずっと病院に詰めているのだろうか。それともとつくに真鉤は殺されて、死体を埋められて……いや、そんなことを考えてはいけない。でも、無事なら電話くらいしてくれてもいいのでは。いや奈美が勝手に一人で焦っているだけなのか。

どうにかして、真鉤の安否を知りたかった。近づくな、と真鉤は言った。でも、元々バ

あの事故の時に真鉤に助けてもらわなかったら、とつくに奈美は死んでいただのだ。

奈美は決心した。あからさまに危険な真似はしない。面会謝絶と知ってはいるが、天海の見舞いにかこつけて病院を訪れることは出来るだろう。それくらいなら他の同級生もやっっているだろうし、怪しまれることもないと思う。

母には天海の見舞いに行くと言って、奈美は制服のまま家を出た。「なら帰ってきてから夕飯にするわね。もう暗くなるから気をつけてね」

そう言っただけで送った母はもしかすると、奈美の焦りを天海を案じているためと解釈したかも知れない。確かに天海のことでも心配ではあるけれど。

奈美はバスに乗って病院へ向かった。あの坂道とはルートが違っている。この町も慌ただしくなった。奈美は窓から景色を眺めてそんなことを思う。

病院のすぐ手前のバス停で奈美は降りた。午後六時五十分。もう夕焼けが闇に変わりつつある。もつと早く来るべきだったと奈美は少し後悔する。

受付で天海への面会を説明すると、女性の事務員はやはり面会謝絶であることを告げた。

「天海さんのご友人ですか」  
事務員が尋ねた。待合に警官が一人立ってこちらを見ている。

「はい。高校の同級生です。すみませんでした」  
奈美は一礼して病院を出た。何のことはない。真鉤の姿も見当たらず、状況にも変化は

ない。受付にいたのはほんの二、三分で、ただこれだけのために来たようなものだ。

馬鹿馬鹿しい。私は何をしているのだろう。奈美は自嘲した。

帰ろう。奈美は通りの向かいにあるバス停を目指し、横断歩道を

渡った。高層マンション

ンの前を過ぎた時、後方で重いものが落ちる音がした。

え、何。奈美が振り返ると目の前に大きな男が立っていた。身長は二メートル近く、分厚いロングコートを着ている。不健康そうな肌をして、左のこめかみから頬にかけてガーゼを当てていた。左手に五百ccのペットボトルを持っている。中はミネラルウォーターか。

音はもつと離れていた。一瞬でここまで移動したのか。上の階から飛び降りた音だったのか。まさか、マンションの屋上から……。混乱している奈美の前で、男が大きく口を開いた。ガーゼを留めていたテープが一部剥がれる。

奈美を見据えたまま、リュオン、リュフー、と、奇妙な音をさせて二度、深呼吸をした。何。この人は、何をしているの。奈美が絶句しているうちに男は口を閉じた。テープを押さえ、少し聞き取りにくい声で尋ねた。

「天海君への面会ですか」

瞬間、奈美は理解した。この男は人間とは違う。冷血で、目的のためには手段を選ばない。他人の命など何とも思っていない。

彼が、真鉤を追っている偽刑事だった。

馬鹿なことをした。奈美は思い知った。真鉤の言う通り、病院に近づくべきではなかったのだ。この男は天海に近づく者を待ち伏せしていたのだ。

「ええ、そうですけど」

奈美はなんとか答えた。膝が震え出さないようにこらえながら。

ここは通行人もいるし

車の往来もある。無茶なことはしないだろう。いや、この男はいざとなればそんなことは気にしない。

「私は警視庁の刑事で大館といいます。最近この町で起きている連続殺人事件について調べています。」

「天海君もそれに巻き込まれたのだと考えています。天海君の同級生ですか」

男は淀みなく喋った。嫌な目で奈美を見つめている。眠たげで、冷酷な。

「え、ええ」

「どうです。犯人に心当たりはありませんか」

冷静に答えなければ。冷静に。

「いえ、全くないです」

奈美は答えた。成功しただろうか。二人の横を中年の男が通り過ぎる。助けを求め……

いや、無理だ。

偽刑事はまた口を大きく開けて不思議な深呼吸をした。一度だけ。

口を戻して、偽刑事は言った。

「嘘だな」

嘘って、何がですか。奈美はそう言おうとしたが、口が動かなかった。膝が小刻みに震

え始めていた。もう止められない。

「詳しい話を聞かせてもらえませんか。別の場所で。一緒に来て下さい」

嫌です。もう声が出ない。顎が震えて歯がカチカチと鳴っている。偽刑事が右手を伸ばし、奈美の左肩を掴んだ。真鉤君。真鉤君……

物凄い痛みだった。偽刑事はすぐに手を離れた。ギプスが来週には取れるのに。でも、

来週なんて、もう来ないかも知れない。

「分かっただろう。変な真似をすれば殺す」

偽刑事は同じ声音で告げた。

「では、行こうか」

偽刑事がペットボトルを持ち替え、奈美の右腕を掴んで引つ張った。その気になれば奈

美の手など簡単に握り潰せるだろう。へたり込みそうになりながら、奈美は泳ぐみたいに

して歩く。もう駄目だ。拷問されるだろう。天海君みたいに、手足を折られて。そして殺

される。天海君みたいに喋らずにいられるだろうか。とても無理だ。怖い。でもどうせ喋

っても殺される。真鉤君。何処にいるの。

真鉤は現れなかった。大男と女子高生のコンビを通行人が一瞥しながらすれ違う。もう

涙が滲んでくる。私が馬鹿だった。悔恨と恐怖の涙。

偽刑事は時折ペットボトルの中身を飲みながら、どんどん人気のない場所へ奈美を引つ

張っていく。じつくりと拷問が出来るような、暗い闇へ。

「ここだ。前から目をつけていた」

偽刑事が言った。門の奥にコンクリートの平屋がある。建物の幅は三十メートルくらい。

何の企業だったのかは分からないが、門柱の看板も取り外されて今は空のようだった。

空になったペットボトルを放り捨て、偽刑事が錆びた鎖をあっけなく引きちぎって門を

開けた。奈美を敷地内へ引つ張っていく。もう見ている者はいない。先に舌を噛めば楽に

なれるのだろうか。でもその勇気もない。でもいずれ、痛みに耐え切れずに嘔むことにな



るだろう。

真鉤君。

正面玄関でなく横手に回り、偽刑事の手が鉄の扉に触れた。嫌な軋みを上げて扉が変形

しながら開いた。奥は暗くてうつすらとしか見えない。

「入れ」

偽刑事が奈美の背中を押した。奈美はよろめいて三步進んだところまでへたり込んだ。

ポビュツ、と不気味な音がした。奈美は振り向いた。

扉の外側に立つ偽刑事のシルエツトに、新たな輪郭が加わっていた。首の辺りから細長

いものが伸びている。雫が下へ落ちる。血だ。

偽刑事の背後から鉈を突き刺し首を貫通させたのは、私服姿の真鉤天だった。彼はいた

のだ。彼は見ていてくれたのだ。

「逃げろ」

鋭く告げながら真鉤が剣鉈を動かした。偽刑事の首が揺れた。揺れ過ぎる。首がちぎれ

た。ボドリと偽刑事の頭が転がり落ちる。

「逃げろ」

もう一度真鉤は言った。

「え、でも」

もう偽刑事は死んだのに。

と、首のない男の両手が後ろへ伸びて真鉤の胸を掴んだ。人間には不可能な関節の動き

だった。真鉤が剣鉈を振りかぶり首の断面から胸へ刺し通す。偽刑事が真鉤を持ち上げて

入り口上の壁に叩きつけた。コンクリが碎けて破片が散る。真鉤の手が偽刑事の腕を掴む。

絡み合った真鉤と偽刑事が建物内へ転がり込んだ。奈美は危つく潰

されそうになる。

「この糞ガキヤ」

偽刑事の生首でなく胴体が唸った。通路の壁に一方がもう一方を押しつける。刃の煌き。暗いので良く見えない。

「早く逃げる。出来るだけ遠くに」

真鉤の声。そうだ。逃げなければならぬ。真鉤の足手纏いにならないように。奈美は

外へ這い出した。なんとか膝を奮い立たせて歩き出す。建物の中からは重い破壊音が続いている。逃げなければ。

だが、門を抜けて暗い道を歩くうちに、奈美の気持ちはまた変化していった。

このまま家に帰る訳には行かない。すぐ近くで闘いを見守ることは出来ないが、少なくとも真鉤を待っていないなければならない。怖かったが、それが、奈美の義務なのだ。

誰もいない小さな公園があった。ブランコとベンチが一つだけ。

奈美はベンチに腰を下

ろした。強張った体を休ませ、息を整えて、奈美は真鉤が来るのを待った。

彼ならばすぐに奈美を見つけることが出来るだろう。あの怪物に勝って生き残ったならば。

奈美に出来るのはもう祈ることだけだ。

でも、本当に、それだけしか出来ないのだろうか。

風が強かった。夜空を雲が凄スピードで流れていく。その隙間から月が覗いた。

今夜は満月だった。

壁を突き破った先に広い部屋があった。会議室に使っていたのだろうか、隅の方に畳んだ長いテーブルが幾つか残っていた。

闇の中で一旦距離を取り、二つの怪物が対峙した。

「やってくれたな、大事な皮膚を」

大館千蔵はいつの間にか自分の生首を小脇に抱えていた。声は生首からでなく胸から出

ている。彼の発声器官は奥にあるらしい。断面に覗くのは筋肉ばかりで、骨や血管らしき

ものは見当たらなかつた。出血も少ない。一つしかない穴は気管と食道の共用か。断面の

肉が、モゾモゾと盛り上がり蠢いている。

「また縫合だ。治るまでどれだけかかると思ってたやがる」

言い終えてから生首を元の位置に載せた。手を離しても落ちないのはあつという間に繋

がっつらしい。肉の余計な盛り上がりのため首はかしげられ、一周する傷口はよじれていた。

「先の心配は要らない。お前は今日ここで死ぬ」

真鉤天が冷たく告げた。フリーサイズの長袖シャツとスラックス。いつもの私服と違う

のは、彼の身長が十センチ以上伸びているためだ。特に腕が長い。

新しい軍手を詰め、右

手に剣鉞を、左手に鎌を握り、切っ先を軽く前方へ向けている。物体を見るような目つき

で大館を見据えたまま、真鉤は足の動きだけで新品の靴を脱いだ。指に合わせて先が五つ

に分かれた靴下。

「これまで散々逃げ回っていたくせに、自信満々だな」

籠もった声は一応口から洩れた。真鉤が応じる。

「お前はやり過ぎた。お前が何者かなんてどうでもいい。お前の存在を許さない。それだけだ」

「その台詞、そっくりお前に返そう。これまで何人殺した。この殺人鬼が」

真鉤は反論しなかった。

大館はコートの内側から鉄パイプのようなものを取り出した。径五センチ、長さ六十センチ、全体が薄く錆びているのは使い込んできた証だ。溶接した錨の手前、滑り止めのテープを巻いた握り部分に金属のスイッチがついている。大館の指がそれを押す。

カチャリ、と棒の先端部から六本の逆棘が一斉に起き上がった。

鋼鉄の棘は根元の幅が

一センチほどで、緩やかに細くなった先端には更に小さな逆棘がついていた。こんなものが刺さったら抜きようがない。

大館は自作の鋸を床に置いた。コートから別の鋸を出してまた開く。同じ動作を繰り返して合計四本の凶器を置いた。二本の腕でどうやって使っつもりなのか。

「いや。大館は自分の頭頂部に手を伸ばした。髪を掴んでゆっくり引く。顔が上にずれていく。」

マスクでも脱ぐように、大館は自分の首から上の皮膚を脱ぎ去ったのだ。投げ捨てるのではなく、大館は部屋の隅まで歩き丁寧に皮膚を置いた。真鉤へと振り返った顔は赤い肉の塊だった。瞼のない二つの眼球

だけが名残りで、あち

こちらが勝手に盛り上がり輪郭がいびつになっている。

肉塊が更に膨れた。常人の頭部の倍以上に。大館の両肩が少し下がっている。自然に垂らした両腕が細くなつていく。肉塊がどんどん大きくなる。コートが裾が床につく。

繋ぎの服がずり落ちるように、大館は自分の全身の皮膚を脱いでいるのだった。コートを着てズボンも靴も履いたまま、中身を失った大館の皮膚はその場にくずおれた。

脱いだ皮から一步踏み出した大館千蔵は、幼稚園児が作ったような下手糞な肉像だった。

束縛から解放された今、人間の輪郭を逸脱して不気味な変形を始めている。元々骨はなく、互いを起点とした筋肉の制御だけで形態の維持も動作も行っていたのだらう。この男に内臓は存在するのか。脳は何処にあるのか。

表面は血液が滲んでぬらぬらと光っている。首筋のくびれが頭より太くなり、頭頂部から両肩までがなだらかな傾斜となった。頭部が少し胴にめり込んでもいるようだ。両脇から突起が盛り上がって新たな腕になっていく。元の腕もそれぞれの指が融合して太い三本の指となった。

「はじめよう」  
血走った二つの眼球で真鉤を見据え、その下の穴から声がした。ペタ、ペタ、と関節の

明確でない両足が進み、四本の腕で四本の銛を掴んだ。

真鉤天は飽くまで冷静に異形の肉塊を観察している。その口元がふと悪意に緩んだ。

「近親憎悪か」

大館の動きが一瞬止まった。

真鉤の笑みは次第に虚ろなものに変化していく。鋭い視線を投げかけていた瞳は薄く膜がかかったようになり、ここではない別の世界を覗いていた。それはきつと、甘美な殺戮の世界だ。

大館が跳んだ。助走なしで一気に真鉤に体当たりする。真鉤も跳んだ。闇の中に金属の打ち合う響き。

半ばから折れた鎌の刃が天井に突き立った。鋼鉄の鋸が肉と共に床へ落ちる。

両者の位置は交替していた。

真鉤の背中に鋸が一本刺さっていた。腹部から先端が顔を覗かせ、シャツの破れ目に血が滲んでくる。すれ違いざまに大館が投げつけたのだ。

大館の左上の腕が切り落とされていた。真鉤の鉋の仕業だ。鋭利な断面から流れる血は僅かだ。

まだ鋸を握ったままの腕を、大館は屈んで拾い上げた。元の場所に押しつけるとほんの数秒で動くようになる。ダメージは全くないのか。

真鉤は無言で折れた鎌を投げ捨て、左手を背中に回して刺さった鋸を掴んだ。ビヂブヂブヂ、と平然と肉を裂いて鋸を引き抜く。

「ありがたく使わせてもらう」  
左手でそれを構え、感情の籠もらぬ声で真鉤天は言った。

今度は真鉤が先に動いた。低い姿勢で駆け寄る真鉤を叩き潰すべく大館は三本の鋸を振り下ろす。三本とも空を切り、一本は床にめり込んだ。真鉤が寸前で跳んでいた。天井を

破りそうな勢いで上へ。真鉤の鋸を大館の鋸が弾く。大館の低い頭に真鉤の剣鉞が切り込まれた。二十センチほど進むがそこから動かない。筋肉が刃を万力のように挟みつけているのだ。鉞を握る腕を狙って大館の鋸が動く。真鉤は一瞬鉞から手を離し、鋸が過ぎた後すぐまた握るといふ凄いことをやってのけた。しかし抜けぬ鉞をどうするのか。

綺麗に揃えた両足が大館の顔に激突した。渾身の蹴りで鉞が抜け、真鉤の体は大館から離れた。グヒユツ、と肉塊の口から呻きが洩れた。

「やったな」

大館が言った。右の眼球を割って深々と金属片がめり込んでいた。さっきまで天井に刺さっていた、折れた鎌の先端部。素早い攻防の最中に真鉤は足の指でそれを引き抜き、蹴りに乗せて刺したのだ。

大館は手で抜かず、顔の筋肉を使って刃を押し出した。刃に続き、割れた眼球が落ちた。

ドロリとした硝子体をはみ出させ、視神経は先細りになっている。それは何処に繋がっていたのか。不死身の肉塊は眼球も再生させられるだろうか。

真鉤天は相変わらず虚ろな笑みを浮かべていた。唇の隙間から透明な涎が垂れる。右耳を裂き頭蓋骨を削る傷は鋸の逆棘によるものだ。

大館の輪郭が違ってきていた。足は短く、胴はずんぐり分厚くなり、四本の腕が太さを増している。刃物対策か、それとも人間の形を忘れつつあるのか。濡れた肉の表面は勝手に波打っている。

再び両者が接近する。鋼鉄の凶器が打ち合わされ、鉦の刃が欠ける。鉦と鉦が逆棘で絡み合い、引き合う力比べは真鉤が諦めて手を離れた。鋼鉄の鉦が壁へ飛んでいく。鉦の打撃で左肩を砕かれながら真鉤の剣鉦が大館の胴を貫いた。肉の怪物に内臓はあるのか。

「はは」

大館が笑った。やはり鉦が抜けない。肉の壁が波打ち、高い音を立てて刃が折れた。跳びすぎる真鉤の左足首を伸びた腕が掴んだ。仰向けに倒れながら真鉤が何かを投げる。予め用意しておいた釘二本。左目を狙った長さ五センチのそれを大館は肉の腕で受けた。

真鉤が持ち上げられた。異常な筋力を速度に変え壁に叩きつけられる。壁が派手に凹む。

骨の砕ける音は握られた足首から聞こえた。大館は離さなかった。今度は逆方向、床目掛けて叩きつける。真鉤は両手をついて支えようとする。瞬間、おかしなことが起こった。

支えきれず床にぶつかると思われた真鉤の胴が擦れ擦れで前転し、勢いそのままに掴んだ腕を引つ張られて大館の体が浮いた。自分で自分を投げたようなものだ。向こう側の壁に

激突して破り、肉塊の半分が隣室へはみ出した。鉦の一本が落ちる。

だが、大館はまだ真鉤の左足首を離さなかった。真鉤は落ちた鉦を握り、太い肉の腕へ

振り下ろす。三度目で硬い筋肉がちぎれ、真鉤は解放された。大館が壁の向こうから身を

戻す。その時には真鉤は反対の壁に刺さる鉦を引き抜いていた。これで二本と二本。凶器



の数は互角になった。

真鉤は右足だけに体重を預けて立っている。粉碎された左足首は治癒するまでどれだけかかるか。銛で砕かれた左肩は一応機能している。

大館はちぎられた自分の肉に触れた。すぐに融合し一体化する。内臓も脳もないとすれ

ばどうやってこの怪物を殺せるのか。そして、小さな白い球体が顔に生えてきている。眼球が再生しようとしているのだ。

殺人鬼と肉の怪物は至近距離でそれぞれの銛を振った。逆棘が折れる。ちぎれた肉片が

飛ぶ。叩きつけられた銛を分厚い肉が弾く。真鉤の方がスピードがあるが左足のハンデが

あり、打撃も刺突も相手に殆どダメージを与えられていない。大館は銛以外に余分な腕が

真鉤を捕まえるべく追い、凶暴な一撃が真鉤の骨を砕く。頭部にまともに命中すれば脳が

丸ごと吹っ飛ぶだろう。

圧倒的不利な状況に真鉤天は何を思っているのか。彼は殺人鬼の虚ろな笑みを浮かべたまま、

殺すべき敵を見据えながら恍惚と別の世界を覗いている。自分自身の死の瞬間にも、彼は

快感を覚えるのだろうか。

左足首が治った頃には右膝に打撃を受けていた。関節が破壊されブラブラ揺れるだけと

なり、暫くは使えないだろう。首を振って銛の突きを躲すが逆棘に首筋を深く抉られる。

破れた頸動脈から血が噴き出し、やがて止まる。大上段から振り下ろされた銛を弾き切れ

ず、真鉤の左膝がカクンと落ちる。右脇腹を掴んだ大館の腕を銛で

払う。肉が引きちぎられて破れた腹壁から腸が顔を出した。左右斜め上からの連撃を真鉤が転がって避ける。横殴りの銛にも大館の太い足は動じない。突き下ろした銛が真鉤の胸を貫き、力づくで引き抜くと破れた心臓がついてきた。真鉤が血を吐いた。

だがその頃、大館にも異変が生じていた。ぬらぬらと血で濡れ光っていた肉の表面が、乾いてきているのだ。剥き出しの肉から滲み出し、蒸発した体液はどれほどになるだろうか。大館が皮膚を大切にしていたもう一つの理由がこれであり、常時水分を補充していたのもそのためだった。赤かった肉が所々、虚血により灰色がかっている。

大館が灰色の腕を伸ばした。真鉤が逃れようとするがこちらも血流を失い動きが鈍い。肉塊が真鉤に馬乗りとなった。

「おわりだ」

告げる声は掠れていた。真鉤の胸の穴に腕を突っ込み左右に広げる。肺が潰れ肋骨の折れる音。真鉤が銛で叩く。血色の悪かった腕がちぎれて落ちた。大館が別の腕で銛を叩き下ろす。真鉤の右上腕を潰すにはまだ十分な筋力を保っていた。もう一本の銛が真鉤の頭を狙っている。絶体絶命の場面で、真鉤はまだ笑っていた。

突然、大館の胸がねじれて後方を振り返った。

「よう、頑張ってるな」

シャツもズボンも靴も黒ずくめの男が気楽に言った。今訪れたばかりのその男は、ニッと不敵に笑って長い犬歯を見せた。

「きゅうけつきか」

大館が言う。

日暮静秋は、両手にそれぞれ二十リットルのポリタンクを提げていた。両脇にも同じも

のを挟んでおり、合計八十リットルの容器に入る液体は何であろうか。蓋をしていないが

中身はゆったり揺れるだけで零れない。

「おや、偽刑事は何処だ。何やらみっともねえ肉ダルマの化け物はいるんだが、まさかあ

れが大館って奴じゃねえよなあ」

わざとらしく日暮が言った。ギュー、という掠れた呼気は大館の怒りか。馬乗りに

敷いていた真鉤から離れ、五、六メートル先の日暮へ飛びかかる。

四個のポリタンクのそれぞれの口から透明な液体が飛び出して、意志を持つ生き物のよ

うに大館の全身にかかった。日暮は自分の血を混ぜていたのだろう。「よつと」

日暮がポリタンクを抱えたまま大館の体当たりを避けて横に跳んだ。右手の指を鳴らす

と大館の体に火が点いた。一瞬で燃え広がり全身が炎に包まれる。暗い室内が赤く照らさ

れた。黒い煤が昇り、肉の焦げる匂いが室内に満ちる。異様な悲鳴を上げた口にどんどん

液体が雪崩れ込む。

「放火は苦手な方だが、ガソリンの助けがあれば別さ」

燃え狂う怪物からある程度の距離を取って日暮が言った。右膝がまだ完治していないの

か、左右の歩幅は僅かに違っている。右目も瞳の色素が薄かった。「こはばばっぼっ」

肉塊から炎の塊となった大館が猛牛のように日暮へ突進する。日

暮が軽く後ろへ跳び、  
代わりに立ち塞がったのは真鉤だった。左手で腰溜めに持った鋸が  
燃える肉塊へ突き刺さ  
る。大館の勢いは止まらず真鉤は押し倒された。大館は日暮を追い  
かけようとして足を滑  
らせる。

大館の胸に刺した鋸を、真鉤が握ったまま引き摺られているのだ  
った。日暮が攻撃され  
ないよう、自分が足枷となるつもりらしい。

「ばふつばつ」  
口から煤を吐きながら大館が真鉤を締め上げる。炎の腕が握って  
いた別の鋸を真鉤が右  
手で奪い取る。ちぎれ落ちた大館の指は黒く焦げていた。

真鉤は折れた右腕を振り翳し、二本目の鋸を大館の胸に打ち込ん  
だ。

「ばはっせつごほくそぼけっ」

大館が振りほどこうとするが、真鉤は二本の鋸を決して離さない。  
燃える腕が真鉤を殴

る。それでも真鉤は離さない。逆に足を絡めて大館の移動を封じる。  
シャツに火が燃え移  
るが真鉤は無表情に耐えている。

「心臓がまたお出かけのようだが大丈夫か」

さほど心配するふうもなく日暮が問うた。ポリタンクから断続的  
にガソリンの球が大館  
に飛び、火の勢いを維持している。ガソリンはまだ三分の二以上残  
っていた。

「なんとか」

短く答える真鉤は苦笑していた。別の世界を覗いていた瞳はここ  
らの世界に戻ってきて  
いる。彼の苦笑は血の快樂を逃したことを残念がっているようでも

あつた。その顔を炎の

腕が殴る。焦げた肉の欠片が散る。

壁際で日暮が目を細めている。瞳が赤く発光する。

「驚いた。こいつも心臓がないみたいだな。全身の筋肉で血を回してやがる」

「脳はあるか」

バグン、と殴られて後頭部を床に打ちつけながら真鉤が尋ねる。

床が陥没している。

「分からん。肺はあつたが全部焼いたぜ。偽刑事、何かご意見は」

大館の口から出るのは炎と煤だけだ。二本の腕が真鉤の首を絞め上げている。いや、首

を引きちぎろうとしているのかも知れない。しかし真鉤は銚を離さない。大館が動くたび

に炎の中からパラパラと死んだ肉が落ちていく。新たに覗く肉も灰色がかっていた。そこ

にまたガソリンの球が飛んできて追加される。大館の爛れた瞳も怒りに燃えている。

三本目の腕が真鉤の首絞めに参加した。そして崩れかけた四本目の腕が。ゴギン、と頸

椎の折れる音。真鉤の眼球が一瞬裏返る。それでも真鉤は二本の銚を離さなかった。

だが銚が二本共スツポ抜けた。大館が筋肉を制御して押し出したのだ。太い足で駄目押

しの蹴りを入れて真鉤を引き剥がし、大館が走った。壁を破って廊下へ。そして屋外へと

気配が離れていく。状況不利と見て逃げるつもりなのか。真鉤が起き上がるうとするが足

がついてこない。

「おや、変なもの踏んじまった」

日暮がわざとらしく声を上げた。床の隅に落ちていた、服を着た

ままの人間一人分の皮

膚。それを日暮のウォーキングシューズが踏みつけていた。

「汚え皮だな。ゴミはちゃんと燃やさないと」

気配が猛スピードで戻ってきた。バギヨンと壁を破って燃える肉塊が飛び込んでくる。

それをやつと立ち上がった真鉤が体で受け止めた。両腕を大館の胴に回して離さない。突

進速度が鈍り、余裕を持って日暮が避けた。ついでに大量の燃料がポリタンクから注がれ

る。一際大きく大館が燃え上がった。真鉤の体も燃えている。顔を焼かれながら真鉤は全

力で大館に組みついていて。日暮を追おうとして大館が転んだ。真鉤が潰される。真鉤が

両足を大館の胴に絡める。真鉤への被害などお構いなしに、日暮が盛大にガソリンをかけ

る。真鉤の体力を信頼しているのだろう。揺れる炎で天井が焦げる。空気を求めて大館の

表面に別の口が開く。そこに容赦なく日暮がガソリンを注ぐ。怨嗟の声は軽い爆発に変わ

った。炭化した腕が一本落ちた。大館のものがきが次第に弱くなっていく。自身も焼かれな

から、真鉤は決して手足を離さない。バキン、と、腕を含めた塊が転げ落ちた。大館の体

積が小さくなっていく。肉の焼ける異臭に満ちた部屋で、やがて、大館は手足を失い僅かに蠢くだけとなった。

日暮がポリタンクを置いた。中身は残り少なくなっている。転がっていた鋸を四本拾い上

げ、真鉤に差し出した。真鉤は漸くそこで肉塊を解放して立ち上がる。焼け爛れた顔は飽

くまで無表情だ。

受け取った話を次々に振り下ろし、真鉤は大館の体を床に縫い止めた。日暮がポリタンクをひっくり返してガソリンを全てかけ終える。

燃える肉塊を見つめながら日暮が言った。

「ガキの頃に読んだ外国の民話でな、悪魔が人間の皮を着て化けるつてのがあったな。生

きた人間から綺麗に引っ剥ぐらしい」

「こいつは悪魔なのか」

真鉤が尋ねる。

「さあ、それは知らんな」

日暮は肩を竦めた。

かつて大館千蔵であったものは何も喋らない。殺人鬼と吸血鬼の会話がまだ聞こえてい

たならば、まだ喋ることが出来たならば、彼はこう言ったかも知れない。お前達も悪魔だ、と。だが燃える肉塊は、モゾリ、と一度うねっただけだ。

真鉤と日暮は焼け崩れていく大館を冷たく見据えている。真鉤が日暮に尋ねる。

「どうしてここが分かった」

「携帯で呼び出された」

「僕は呼んでない」

「お前じゃない。お前の彼女だ。泣きつかれたから仕方なく飛んできた。女の涙つてのは

最強だな。でもこれはお前への貸しにしとくからな」

真鉤は治りかけた顔に微妙な表情を浮かべる。

「僕の彼女じゃない」

「嘘つけ」

大館千蔵の全てが灰と燃えカスに変わるまで、二人はずっと見守っていた。

肩掛けバッグの中でメロディが鳴った。藤村奈美は急いで携帯を取り出す。真鉤君かも知れない。いや、帰りが遅いので心配した母からかも知れない。いやっぱり真鉤君かも。こんな時にクラスメイトからだったら殺意を覚えるだろうなと思いつつ、奈美は相手を確認する。

真鉤天、となっていた。

通話ボタンを押して耳に近づけると、「終わったよ」と一言だけが、優しい、真鉤の声だった。

目が熱くなり、涙が急に溢れ出した。奈美は返事をしようと思うのだが声にならない。

「お疲れ様」と言うのはおかしいし、「良かったね」も何か変だ。「大丈夫」とか「無事

なの」がいいだろう。しかし喉がヒクつくばかりでやっぱり声は出なかった。

ベンチに座る奈美の前に、人の気配があった。慌てて顔を上げる。携帯を片手に持った真鉤天が、微笑を浮かべて奈美を見下ろしていた。大きな目のシャツ

の袖をめくっている。他人の服を着ているのだろうか。

その横に、どうだ俺をねぎらえとでも言うようにちょっと自慢げな日暮静秋がいた。

奈美は立ち上がった。涙がまた溢れて真鉤の姿が見えなくなる。どうか彼が幻ではありませんか。奈美は祈る。

喉はヒクツと鳴るだけで、やっぱり声は出なかった。



五

いつか会えなくなるあなたへ 藤村奈美

こんな無情な世界だから  
今 全て伝えておきます  
あなたが今 目の前にいるうちに  
ありがとう  
あなたに会えて良かった  
愛していました  
愛しています  
これからもずっと  
いつか急に会えなくなっても  
確かに愛していたのだと  
ずっと愛しているのだと  
覚えていて欲しい  
それだけが 私の生きてきた証だから  
いつまでも このままでいたいけれど  
それが出来ないことも分かっているから  
今のうちに全て伝えておきます  
ありがとう  
私はあなたを愛していました  
愛しています  
この先どんなひどいことが起きても  
それだけは確かなことだから  
どうか覚えていて下さい  
それだけが私の願いです  
愛しています

「うつむ……」

文芸部の部室で、手渡された原稿を睨み部長の岸田が唸っている。ひよろりと痩せた文

学青年っぽい容姿にそんな仕草が似合っている。

藤村奈美はドギマギしながら部長の評価を待っていた。しかし岸田はなかなか喋らない。

「あ、あの……やっぱり、駄目ですか」

内容が短過ぎたかな。それとも稚拙過ぎたか。頭を悩ませ、何度も何度も書き直して仕

上げたこの一編の詩だけが、締め切りギリギリまで頑張った奈美の成果だった。

「いや、駄目じゃないよ」

岸田は目をパチクリさせて顔を上げ、慌てて言った。

「悪くない。というか、なかなかいいよ。切ない感情がストレートに出てるしね。グツと

来るよ。僕も女の子にこんなこと言われたいよ。あっはっはっ」

気の抜けた笑い声を上げた後、ふと真顔に戻って岸田は奈美を見た。

「ただね、本当に切ないんだよ。悲しくなる。高校生ならもっと将来に夢を膨らませてい

るものじゃないかな。いや、色んな生き方があるし、色んな人生はあるよ。ただ、僕は、

藤村君にはそんな人生を送って欲しくなかった。もっと明るい人生で、幸せになって欲し

かったなあ」

「なって欲しかった、って過去形で言わないで下さい。それに、私は充分幸せですよ」

奈美は苦笑する。岸田は頭を掻いてまた笑った。

「あっはっはっ、ごめんごめん。そうか、幸せならいいんだよ。よ

し、採用だ。文化祭用の機関紙に君の詩を入れよう。皆に見せびらかしてやるんじゃないか」

それでも奈美は岸田の瞳に気遣いを認めた。いい人だと奈美は思う。

「そうだ、僕の小説はまだ読んでないだろう。今回は原稿用紙百七十枚の大作だよ。死人の数も残虐度も当社比五倍だ。人数分印刷しといたからどうぞ読んでくれたまえ」

この人はちゃんと受験勉強をやっているのだろうか。部屋に残っていた三年の部員が口を尖らせた。

「部長の小説、そのまま載せたら機関紙の厚さが三倍になっちまいますよ。三分の二が部長の小説ってのはちょっとねえ。スプラッターだし、読んだ人が文芸部を勘違いしそうで嫌だなあ……」

「なら君も対抗して三百枚の恋愛小説を書けばいいんだよ。締め切りは明日だが」

岸田は澄ましたものだ。

奈美は分厚い冊子を持って余しながら岸田に言った。

「あ、あの、じっくり読ませて頂きますね。ただ、申し訳ないんですけど、私、明日から

ちよつと入院するんで、文化祭のお手伝いが出来そうにないんです」

「あれ。ギプスは取れたのにかい」

岸田がまた目をパチクリさせる。

「ええ、ちよつと別の問題で。二週間か三週間くらいですけど」

「そうだったのかい。大変だな。出席日数は大丈夫かい」

「余裕がありますから一応大丈夫です。それに、本当にちよつとしたことですから」

「了解。詳しくは聞かないよ。最終稿が出来たら見舞いがてら持っていくよ」

「すみません」

奈美は部室を退出した。校舎を出ると裏門の前で真鉤天が待っていた。

「帰ろう」

真鉤は微笑した。優しく、少し儂げな微笑だった。

「うん」

奈美は頷いた。

あれ以来、この町で新たな事件は起きていない。島谷紀子の事件も、白昼の通り魔事件も、コンビニの裏で五人殺された事件も、捜査に進展がないようで新聞に載ることが少なくなっていた。

それでも、真鉤は定期的に誰かを殺し続けているのだろう。不死身の殺人鬼と奈美は並んで歩いている。

そんな人生もあるのだろう。奈美はギプスの取れた左手を伸ばして真鉤の右手に繋いだ。

真鉤の背は幾分伸びて、今は百七十センチくらいになっていた。

「詩は、部長のOKを貰えましたか」

いつもの丁寧な口調で真鉤が尋ねる。

「うん。文化祭に冊子になって配られると思うから、真鉤君もその時、読んでみてくれるかな」

「読みますよ」

真鉤は頷いた。彼にはまだ奈美の詩を読ませていない。自分の目の前で読まれるのは恥ずかしかったので、こんな頼み方になった。詩に書いたことを、奈美は実行出来ていない

ようだ。

翌日の午前中に奈美は入院した。ちょっと白血球に異常があるから精密検査と念のため  
の治療を、と内科の主治医は説明した。付き添いの母が帰った後で、  
奈美は慢性骨髄性白

血病ですよねと主治医に言った。医師は戸惑い顔だった。お母さんに聞いたのかね。いいえ、私が知ってるってこと、母には言わないで下さい。それから、私は遺伝的に癌が出来

やすいらしいです。定期的に全身の精密検査をやってももらえますか。奈美は冷静に喋ることが出来た。

治療は骨髄移植や化学療法までは必要なくて、副作用の少ないタイプの新しい内服薬でひとまずはやっていくということだ。入院は二週間で、以降は通院治療を続けるのだと。個室でないのが少し不満だったが、奈美は四人部屋でゆっくり過ごした。勉強の本は持ってきたがやる気にならないので小説などを読んだ。同室の患者達とも少しずつ仲良くなったりした。

母親は毎日、父親は三日に一度くらいのペースで病院に来てくれた。両親には奈美は明るい顔を見せるよう努めた。

真鉤も毎日見舞いに来てくれた。気をつけているのだろう、両親とかち合うことはなかった。彼はいつも桃の缶詰を持ってきて、「見舞いにはこれだと聞いたから」と笑った。

彼はその場で缶切りを使って開け、奈美が食べるのを穏やかな顔で眺めていた。そうして

空の缶を持ち帰るのだ。証拠を残さないためだとは思うが、四人部屋で他の患者も見ているのだからあまり意味はないのにと奈美は思う。

同じ病院に入院している天海東司も、一日に何度かやってきた。

彼は松葉杖で歩行訓練

を始めており、病棟を歩き続けているのだ。左腕は全体がギプスに包まれているし、右手

も使えず前腕部に杖を固定していたし、包帯を巻いた顔の輪郭が歪んでいたが、彼は元気

だった。顔の骨はまだ何度か再手術が必要で、右膝にもいずれ人工関節を入れるのだという。

右耳の縫合した痕は目立たない。右目はガーゼで覆っていた。

真鉤が来ている時に出くわすこともあって、三人で仲良くお喋りをしたりした。天海は

まだ喋りにくい舌で、義眼にした方がいいか海賊の眼帯を当てる方がいいのかで悩んでいるのだと尤もらしく話すのだ。

「眼帯にしたら目の中に小物を隠せるだろ」

そう言つて天海は笑った。あれだけひどい目に遭つていながら、彼は全く変わっていない

かった。真鉤の肉体的強さとは違う彼の精神的強さを、奈美は尊敬する。天海の口に奈美

はひよこ饅頭を入れてあげた。

内服薬は体がだるくなる程度でそれほどひどいものではなかった。岸田部長が文化祭用

の冊子を持ってきてくれたが奈美は真鉤には読ませず隠していた。入院している間に、文

化祭は終わってしまった。その夕方に真鉤はやってきて、奈美の詩を読んだと告げた。

「どうだった」

奈美はドキドキしながら尋ねた。

真鉤は黙って仕切りのカーテンを動かして、奈美のベッド周囲を他の患者から隠した。

「真面目な顔で、真鉤は言った。

「僕の人生は君のためにある。そう決めた」

そうして真鉤は奈美にキスをした。彼の唇は柔らかくて、温かかった。

唇を離れた後、すぐに真鉤はカーテンを戻し、他の患者達に軽く一礼して去っていった。

顔を赤らめている奈美に、向かいのベッドの老婆が悪戯っぽくウィンクした。

入院は予定通り二週間で済んだ。まだ暫く入院の必要な天海にまた来ると告げ、奈美は母親に連れられて退院した。その日の夕食は豪華だった。

週末の昼、トワイライトという名の小さな喫茶店に奈美と真鉤、日暮静秋と南城優子が

集まった。かつて窓越しに真鉤と日暮の姿を見かけた、あの喫茶店だった。退院祝いとい

うことで、皆がケーキを奢ってくれた。天海が退院していたら、この輪に入れたかも知れない。

「まあ食べる食べる」

日暮がニヤニヤしながら直径三十センチのケーキを切り分け、四分の一という巨大な量

を奈美の皿に乗せた。真鉤も笑っていた。

「優子はダイエツト中だよな。こんくらいにしとくか」

「いや待ってよ、今日は特別だから」

十六分の一くらいに切ろうとしたのを、南城が日暮の手からナイフを奪い取り四分の一

を確保した。結局皆、綺麗に四分割して食べた。奈美もなんとか全

部食べた。ケーキが昼食になってしまった。

「ああ、それにしても、なんだか、俺は幸せだなあ」

ふとそのことに気づいたように、日暮が詠嘆調になって言った。すぐさま南城優子が返す。

「私がいるからでしょ」

タイミングを計ったように、二人が同時に大声で笑った。ハハ、とかフフ、ではなく、

あーっはっはっという豪快な笑いだった。

馬鹿馬鹿しいような可笑しいような気分になって、奈美も思わず笑ってしまった。真鉤

も笑った。負けじと日暮も南城も声を大きくした。奈美も大声で笑った。真鉤も声を出し

て笑った。彼がこんなに可笑しそうに笑うのを奈美は初めて見た。

なんだか楽しくて、涙が出そうになるほど楽しくて、でもこれが永遠に続く筈がないこ

とも理解しながら、奈美は皆と一緒に笑い転げた。

奈美は、一瞬一瞬を大切に生きることに決めた。

戻る



## エピソード

### エピソード

倦怠感は症状なのか、薬の副作用なのか、藤村奈美には区別がつかない。何となく体がフワフワして足が地についていないような感じがする。自分が走ったり跳んだりする姿が想像出来ない。この数ヶ月で随分と変わってしまったものだとな美は思う。それともこの感覚は不安から来るものなのだろうか。

病状は進んでいないと主治医は言う。この間、日暮静秋にも診てもらった。特に変化ないと日暮は言ってくれた。彼は覚悟のある者に嘘をついたりはいだろう。

せめて高校を卒業するまでは生きていたい。出来れば大学にも行きたかった。でもどうせ死ぬのに何のために大学に行くのだろう。自分の将来がまるで見えてこない。だから奈美は今を大事にしようと思った。土曜の朝八時、真鉤天に会おうと急に思いついたのもそういうことなのだろう。一緒に何処かへ行こうと思った。バスに乗っても構わない。

化粧はあまり好きではないので、淡い色の口紅だけをつけた。鏡で見る自分の顔はなんだが青白く見えた。いかにも美人薄命という感じだ。鏡の中の奈美が苦笑するが、その笑みもやはり薄幸な感じがした。

母には町に出かけると告げて奈美は出発した。空は晴れている。

びつくりするほど冷たい風が奈美の頬を叩いていく。秋もあつという間に過ぎて、もう冬のだった。

そうだ、一緒に映画を観よう。ポップコーンを食べながら並んで映画を観よう。でも今

どんな映画が何時から上映されているのか、奈美は知らなかった。

真鉤天の屋敷は近くだ。真鉤が奈美の家を訪れることは決してないけれど。彼は遠慮し

ている。家族に自分のことが知られないように。社会に自分のことが知られないように。

屋敷の煙突から、煙が昇っていた。

奈美の頭に、焼却炉の中で膝を抱えた真鉤の姿が鮮明な映像となつて甦つた。背中に悪

寒が走る。ゾクゾクとして、吸い込まれてしまいそうな感覚。

まさか、自殺なんてことは。彼は私のために生きるといつてくれた。だから死ぬなんて

ことはない筈だ。でも焦げた真鉤の映像は消えなかった。

奈美は玄関のドアに触れた。鍵が掛かっている。合鍵を貰っていたので奈美は自分でド

アを開けた。居間には真鉤の姿が見えない。奈美は地下へのドアを開けて階段を下りていく。

地下室の電灯は点いていた。真鉤の姿は見えない。中央にある大きな焼却炉。覗き窓がないので内部の様子が分からない。

真鉤の筈がない。

奈美は祈るような気持ちで、取っ手を掴んで蓋を持ち上げた。

中で人間の形をしたものが炎に包まれていた。服は燃えてしまい焦げた肉だけだ。膝を

抱えてはおらず、上体を前屈させて体を二つに畳んだ姿勢だった。

その首が、後ろにねじれ、側頭部が背中にくっついていった。

真鉤ではなかった。

奈美は理解した。殺されたのだ。これは真鉤ではない。真鉤に殺された、犠牲者だ。彼

は死体を始末しようとしているのだ。焼却炉の本来の役目はそれだった。

勘違いしていた。奈美は安堵したが、同時にどうしようもない悲しさと別の不安が膨らんでいった。息苦しさと思寒と、心臓の速い鼓動を奈美は感じていた。

「藤村さん」

階段から声がかかって奈美は振り向いた。

普段着姿の真鉤天がそこに立って奈美を見ていた。彼は無表情だった。いや、瞳の翳りは

驚きと気まずさと、自己嫌悪を含んでいた。

「ご、ごめんなさい。煙が昇ってて、私、真鉤君かと、思って」

先に電話しておくべきだった。絶対に、そうするべきだった。私は、何を浮かれていたのだろう。

真鉤はその場から動かなかった。彼自身が、奈美に近づくことを、怖れているかのよう

に。

「すまない。これが僕だ」

重い声で真鉤は言った。

「分かっている。分かっている、けど」

分かっている。彼は私のために生きると言ってくれた。真鉤天は奈美のためのナイトだ

った。奈美は真鉤が好きだった。生きている間は彼と一緒に過ごしたいと思っていた。それは本当の気持ちだ。でも……。

言わないつもりだった。でも口が自動機械のように動いて、勝手に言葉を絞り出した。

「いつか、私も、殺すの」

真鉤は、背後からいきなり心臓を刺されたみたいな顔をした。実際に刺されても、彼は

顔色一つ変えないだろうけれど。

「そんなことは、しないよ」

真鉤は首を振った。

「ごめんなさい。分かってる。分かってるけど……」

奈美は同じ言葉を繰り返した。ただただ涙が溢れてきて、奈美は声を出さずに泣いた。

戻る

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1285ba/>

---

陰を往く人

2012年1月4日08時52分発行